
騎士先生プロマ！

ぞなむす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士先生ブロま！

【Nコード】

N49570

【作者名】

ぞなむす

【あらすじ】

この小説はプロント語で構成されています。苦手な方は閲覧をお勧めしません。

ヴァナで狩りに励んでいたプロントさんはいきなり光に包まれた！空に放り出され焦りながらも着地したプロントさんの眼前に現れたのは、ヴァナには存在しない巨大な樹だった。

いきなり異世界とか絶対忍者の仕業だろ……（前書き）

この小説を書いているぞなむすは貧弱一般ブロンティストだからよ
ブロント語も間違えるしFFF11やったことなくても小説書くそ
んな小説でも挙用できる寛大なナイトはそのまま閲覧すべきそうす
べき！逆にこんなのがブロント語とかちよとこれsYれならんしょ
とかいう一級ブロンティストはカカツとバックステッポ！！

いきなり異世界とか絶対忍者の仕業だろ……

主人公タイプの人間が異世界に飛ばされたりすることは稀によくあるらしい

『うおわ〜!!』

いきなり落ちるところから始まるとかこのSS書いたの絶対忍者だろ……汚いなさすが忍者きたない 俺は思考のナイトなんだがよキングベヒンもスを狩ったんだが汚い忍者がHPに戻ったのを見た瞬間おるも光に包まれてしまった……

『一体何がどうなってるわけ!? 理解不能状態なんですけど誰か早く説明して!』

だがどんなに叫んでも何の反応も帰ってこなかった件

『いきなり光に包まれ続けるイベントとか聞いたことないんで抜けますね^^』

とか言っても抜けられないアワレなナイトがいた!!

どうしようもないのでそのまま待機状態でいたんだがいきなり光が収まりだしたので拾遺の確認をするために周りを見渡すと自分が空にいることが分かっちゃしまった……

〜カカツと冒頭に戻る〜

『この硬度からおつるとかちょっとこれSYれならんしょ』

焦ったところでどうしようもない系の話があるので冷静に状況を判断しようと思った 状況を整理すると

キングベヒンもスを倒す 光に包まれる 空 今ここ

整理したところで解決策が浮かぶわけでもなかったんだが……ジ

ヨブを選ばないナイトでも空は飛べない！飛びにくい！！このままでは危険が危ないのでありったけのプロテスをかけることで命ロストを回避することにした

ズドーン！！

両足骨折の上にアバラも何本かいつてしまったがナイトは光系の魔法が使えるのでケアルを唱えてやるとズタズタになってしまった体が治る事になった

『それにしてもここはどこなんですかねえ……？』

俺の前には大きな大木があるんだがヴァナの実装地域を完 全

踏 破している俺が見たことが無い系の不具合が生じている件 これは一体どういうことなんだと有頂天を仰ぐと綺麗な満月が見えてきたが今日は水の曜日なのに白いかいという事実で俺の混乱はさらに加速した！！思わず困惑が鬼なっていると氷が飛んできた！カカツとバックステップで避けて富んできたほうを見ると何いきなりPO Pしてきたくく幼女

『ククク……満月の日に侵入してくるとは運が無いな』

とか言ってきたがこちらは全く理解不能状態でこのままでは俺の寿命がストレスでマツハぬなる；

『お前いきなり襲われる人間の気持ち考えた事ありますか？マジでぶん殴りたくなるほどむかつくんでやめてもらえませんかねえ……？』

と言つてやったら

『ハッ！侵入しておいて襲われないほうがおかしいだろう？まあ境界を抜けてきたの褒めてやるがこんなところで魔法を使うとは詰めが甘かったな』

『いきなりネガキャンまでしてきたくく幼女 仏の顔が三度ということわざがあるからまだ大人の対応をしているがそろそろもう結構ウデとか血管血走ってるから騒ぐと危険』

『誰が幼女だ誰が！！』

俺は事実を述べただけだが奴にはそれが気に入らなかつたらしい

な 何も無い所から氷出してきた 氷出してくるとかコイツ絶対力
イ使いだろ……

俺は持っている盾でその氷をすべて防いでやったらそこには驚愕
が鬼なつた幼女がいた！多分今ので倒せたと思っただろうのだが
恥知らずなカイ使いの氷で倒せるの貧弱一般人だけつまり雑魚専門
そんな氷で一級廃人である俺を倒そうとするその浅はかさは愚か
しい

『おいイ？今何かしたか？』

と挑発してやると顔真っ赤にして攻撃再開してきたが

『ヨミヨミですよ？おもえの攻撃は』

と防ぎつつもさらに挑発をしてやったらさらに幼女の怒りが増し
てきた その形相はまさに鬼の顔といったところかな

『……もういい、生かして捕らえてやるう思っただがやめだ。死ね！
』

そついうと空中に逃れて呪文を唱え出した 遠くて聞き取れにい
がかなりの威力であることが分かる（直感） 盾で受けてやる洗
濯もあつたが和えてここはこちらも魔法で対抗してやるうと思っ
た 『闇の吹雪！！』

奴が魔法を放ってきたんだがそれは氷と闇が合わさっているが所
詮それまでだなというか鬼なつた 一直線に進んでくるその魔法に
向けて

『生半可なナイトでは真似できないホーリー！！』

光魔法をぶつけてやった ダークパワーを使ってくるアワレな幼
女にはこれが一番効果的だと思っただ（確信）

『な、何！？』

俺の予感当たったようで幼女の闇属性の魔法は光属性のホーリ
ーに押し返され幼女にあつた カウンターでダメージを受けるは
めぬなつた幼女は驚愕しひややせをかき無残に落下してくるので俺
はタイミングを合わせてメガトンパンチを食らわせてやった。アワ
レにも吹っ飛ばされた幼女はまだ意識があつたようで

『くっ……茶々丸を連れてこれば……!!』

とか言ってたがもう駄目幼女はこのまま骨になる

『お前自分の実力おw過信しすぎた結果がこれ仲間を連れてくるべきだったな？お前調子ぶっこ来すぎてた結果だよ？』

と言ってるやると

『勝ったと思うなよ……』

と言ってきたので

『もう勝負付いてるから』

と変な空間になったので俺はミステリーを残すためにこの場所から離れようとしたが多分この界限で伝説になってる

ザッ！

と思っていたら誰か来てしまった感

『やあ、少し話を聞きたいんだけど、いいかい？』

と白いスーツを着たヒゲオヤジが立っていた まただよ（笑）

いきなり異世界とか絶対忍者の仕業だろ……（後書き）

需要があれば書きを書く系の話があるんですがねえ？まあ俺は恥知らずな小説家だからよ需要がなくても続きを書くし需要があっても続かない事は稀によくあるらしいぞ？

異世界とかちよとこれSYれならんしょ；（前書き）

二日連続の投稿とかぞなむす馬鹿すぎる。これでは更新が止まってしまふことになるだろうな（確信）

感想を見たんだが早速チエックが入るあるさま；調子こいてすいまえんでした；許して下しア；；その上この特徴を把握せず半角表示できると思っていたぞなむすは隙だらけだった；；

さらに一級ブロンティストが感想を書くことでぞなむすはどこにも逃げられないプレシヤーを背負う事になった 一級ブロンティストの山脈があるから書くのやめても捕まっつて続きを書くはめぬなることは確定的に明らか；まあ恥知らずなぞなむすは続きも書かずにくえ不明になるのは稀によくある話

まあでも一話投稿時点で1000PVを超えてしまふとはさすがに「ネギま」とブロントさんは格が違った！この二つが交わって最強に見えるのは証明されたな 貧弱一般作者が書いてもこれ 一級ブロンティストがほかの作品とのクロスを書いたときどうなるのか創造もつかにい；誰か書いてもいいんじゃないやよ（チラ

今思ったんですが前書き書きすぎてしまつてる感 本編に突入する前に読者を疲れさせる汚い作者がいた！

異世界とかちょっとこれsYれならんしょ；

「何いきなり話しかけてるわけ？」

「すいまえんでした；；じゃなくて、君はここに何をしにきたのかな？」

職務質問とか勘弁してくだしア；；h a i！！捕まりたくないんで素直に喋ります！

「何しにきたも何も勝手に飛ばされた件 目的があるわけがい；；そももここはどこなんですかねえ？」

「…え？」

「ヴァナで狩りをしてたらいきなりここに飛ばされたんですわ？俺が思うにこれは新装されたイベント英語で言うとニューイベント」

「ヴァナ？イベント？」

「…」

「…」

光に包まれてから理解不能状態が続いちえしまっている；このままでは俺の寿命がストレスでマツハ；；

「ま、まあとりあえずついてきてくれないかな？この責任者に会ってもらいたいんだけど」

「いいぞ 俺は寛大なナイトだからよ少女が襲ってきても広い心で許してやる（こちら辺の器がモテる秘訣かも）」

「少女？あー…エヴァか」

倒れてる少女を見ながら言うチヨビヒゲに知り合いだったのかと
いうか鬼なっただ

「まあそれなりに強かったが志向のナイトに挑んだ時点でもう勝負はついてた 俺のメガトンパンチをくらっちえしまっただから治療してやった方がいいと思うまあ一般論でね？このまま放置すると悪化して病院で栄養食を食べるはめぬなる」

ケアルかけてやってもいいんだがこの少女からは闇系の気配がす

るのでやめておいた方がいいと思った（アンデット話）

『そうだね、流石に放っておくのはまずい。君が運んでくれるかな？』

『おいイ？俺が言うのもなんだが水知らずの人間にまかせるべきではない。』

『僕はこれでも人を見る目があると自負してるんだ。それにもし君が変なことをしても手が空いてれば対処できるだろう？』

『おっとと完 全 論 破されてしまった感 この議論は早くも終了ですね』

『じゃあよろしく頼むよ』

頷いたおるは幼女を抱えた一般的に言うとお姫様抱っこ

『あ、そう言えば名前きいてなかったね。僕は高畑・T・タカミチ。君の名前は？』

『自己紹介は責任者のところについてからでいいと思った（手間）』
『わかった。後で聞くことにするよ』

そして俺たちはせきぬん者のところに行くことになった

（露骨な場面転換だ：いやらしい）

席にいん者らしい人間のところに着いたんだがそこには頭の長い奴がいた 貧弱一般転生者や貧弱一般異世界人なら驚きが鬼なるところだがヴァナの一級廃人である俺は（ああこういう人もいるんだな）とあえて触れない事にした（優しさ）

『ご苦労さまじゃの、タカミチ君。君のとなりにいるのが例の……』

『はい、侵入者です』

まただよ（苦笑）

『事前に侵入者として紹介されると分かっていたらそれなりに対応もできますがわからない場合対応が遅れるんですわ？お？』

腕に血走ってる血管を見せながら言ってる

『どうもすいませんでした；許してくださいア……』

二人揃ってプリケツ土下座するはめぬなつた

『まあ仏の顔が三度という名ゼリフがあるからよ今回は許す』

『許された！寛大だなーあこがれちゃうなー』』

と二人が思考のナイトを褒め称えてくるが

『俺は謙虚だからよ誉められても自慢しいい おっとと自己紹介を忘れてた感 おれはブロント謙虚だからさん付けでいい』

と言つてやつた(謙虚)

『ふむ、ブロントでいい』さんをつけるよデコ助エ！！』ごめんあさい；；；』

『それにしてもここはどこなんですかねえ？早く教えテ！』

言いながら抱えたまままだた幼女を近くのソファんに横たえてやつた

『タカミチ君？彼は本気で言ってるのかのう？』

『お前いい加減にしるよどうやって俺がキノピオだつて証拠だよ！』

『嘘をついてるようには見えませぬね。それに彼の着けている武器はどれも一級品です。町中でするものではないしコスプレにしたつて高級品すぎる。それに結界を気づかれずに抜けられるならもう少し目立たない装備でくるでしょう。恐らく何処か遠い場所からの意図しない転移だと思われませぬ』

まあ、どれも推測でしかありませんが、と肩をすくめながら言うタカミチに

『ほうこの装備の良さがわかるのかお前 これは一級廃人装備 これを持ってると強さがオーラになって見えそうになるのでリアにモテる くわすく言うつと 一級廃人装備を持つてる 強さがオーラになって見えそうになる リア は強さに憧れるのでモテる ほらこんなもん』

と思わず感心が鬼なるがどこもおかしくはないな

『とりあえずここはブロントさんがいた場所ではないようだのう』

『【むむむ。】ここはヴァナではいいのか；；；』

『そついうことになるね』

異世界とかちよとこれsYれならんしよ；どうすれbsいいのか

見当もつかない……

『ところでブロントさん』

『何か用がなくく高道』

『ヴァナってなにかな?』

くカカツと説明中く

『ふむ……おもしろそうな場所だのう』

『魔法世界とも違うみたいですね』

ヴァナを知らない人間がいるとか余計にヴァナが遠くに感じてしまっ件 想像を絶する悲しみがブロントを襲った……

『ブロントさん、これからどうするつもりかのう?』

『ほむ、何をするにしてももお金が必要だと思った とにかくその辺にいるモンスター刈って金策するのがとくあさく』

『いないよ』

『え?』

『この辺りにモンスターいない』

モンスターがいないとかこの世界兵う老攻めするつもりだろ……汚いなさすが異世界きたない;

『そこでなんじゃがブロントさん、ウチで働いてみないかのう?』

『 hai!! やります!! 』

『く、食いつきいいのう』

もうちよっところ交渉とかしてみたかったんじゃがのう……とかいってるアワレま老人がいた! さくし策で溺れるとかいう名ゼリフを知らない結果だよ

『所で仕事内容が気になるんですがねえ?』

『ふむ、ブロントさんは勉強はできるかの?』

『おれはエルヴァーンだがINTが高く学者もこなせてしまっ(万能) まあナイトはジョブを選ばないからよどんな仕事もこなす まあ見てなw』

さすがにナイトは格が違ったというか鬼なるだろうな（予感）

『……よし、フロントさんには4つの仕事をしてもらおう』

『9つでいい』

『いや、それは流石に多過ぎるじゃろ……』

ヴァナ人の体力はえごいから別に構わないと言ったら労働基準法でバラバラに引き裂かれることになるから勘弁して下さいア……というので仕方なく引きさがることにした

『ゴホン、ではまず、教師の仕事。二つ目が広域指導員の仕事。3つ目が夜の警備員の仕事』

『夜の警備員とか……いやらしい』

『ゴホン！そして最後に、これが一番重要なんじゃが、教師として副担任に着くクラスの護衛をしてほしいのじゃ』

『おいイ？この世界にはモンスターがいないんじゃないんですかねえ……？なら護衛する必要ないだろ ほら見る完 全 論 破 以下レスひ不要です』

『学園長、彼は異世界人（暫定）です。こちらの常識で話さないほうがいいかと』

『そうじゃの、まずこちらの世界のことから説明すべきだったのう』

〈カカツと説明中〉

『なるほどな こっちの世界の常識は大体わかったくく学園長感謝

そういうことならこの指向のナイトに任せておくことで安心したリアル生活が認可されるのは確定的に明らか』

『うむ、よろしくたのむぞ。仕事の概要をまとめた紙を用意しておくから明日もう一度ここにきてくれんかのう』

『いいぞ』

『では、タカミチくん。彼をどこかのホテルに連れて行ってあげなさい。ついでに服もどこかで調達してくれんかのう』

『この時間に売ってるかどうかわかりませんが……わかりました』

『その前に一ついいか？』

『なんじゃ？』

『まだ名前聞いてないんですがねえ？』

『おっと忘れておったのう。ワシの名前は近衛 近右衛門じゃ。これからもよろしくの』

『【よろしく願います】』

こうやっておるの就職先が決まることになったんだが

『ところで幼女はほったらかしなんだが？』

『あ』

大慌てで手当てするはめぬなつた

異世界とかちよとこれsYねならんしょ；（後書き）

とりえあず会話が多いと地の文を割り込ませるのは難しい 今回で
それがよくわかったよ<<3人感謝

ともかくネギと会う前に疾走とか本気でsYねならんのでそこまでは頑張ります！

やっと仕事かと思っただか？まだだよ！！（前書き）

三日連続投稿とか……作者絶対このSS終わらせるつもりないだろ；
前半飛ばし過ぎる 疲れが出て気力も失せる 心が狭くSSにまで
出てくる いくえ不明 ほらこんなもん

まあ三日坊主という名ゼリフがあるからなぞなむすの勢いも多分こ
こまで 次の更新がいつになるかわからにい；

毎度毎度前書き書きすぎてしまっているが別に読まなくてもいいん
じゃよ（チラ

余談だがぞなむすは前書きでフロント語を練習しているらしいぞ？

やっと仕事かと思っただか？まだだよ！！

おいイ！おいイ！おいイ！

『む…目覚ましの粘着が五月蠅すぎる…二度寝の封印が解けられない不具合が生じているんだが』

露骨におけるのスイミンを妨げてくる時計にハイスラア！をかましてやった

『しつこく粘着してきた結果がこれもう少し早く黙るべきだったな…』
…ジョジョに頭がはつきりしてきたんだが時計をマップたつにしてしまった件　これでは時間がわからない！わかりにくい！

まあ過ぎてしまったことでネガネガしても仕方ないので俺は起きることにした

洗顔・歯磨きをした阿とに石のスープを容易し食パンをかじりながらカーテンを開ける　俺は不良だからよ食パンを良く噛まずに食べるし石のスープも残す

俺はこのまま昼飯まで待っててもいいんだが学園長が『はやくきて〜はやくきて〜』となっちえいるだろうから俺はとんずらを使って普通なら着かない時間できょうきよ校舎まで来た

しかしこの後者の周りは女子しかいないんですかねえ？このままでは俺の寿命が居心地の悪さでマツハ……

『あの、なんでここに男の人がいるんですか？ここは女子校エリアなんですけど』

『何いきなり話しかけてるわけ？』

何いきなりPOPしてきたく〜ツインテール

女子校エリアとか学園ん長これハメでしょ？俺のシマじゃノーカ
ンだから…

『なんでとか言われれば俺は就活来たと答えるだろうな』

『……怪しい』

『おいイ？いきなり人のこと怪しいとか……お前絶対忍者だろ　汚

いなさすが忍者きたない」

「いや、意味がわからないんですけど」

「今のがわからないとか聞いたことないんで抜けますね^^;」
ツインテるに構ってやってもいいのだがもうすぐ授業が始まる時間　ここで構ってこのついいんテールが遅刻したら絶対「ナイトのせいで遅れました」とかネガキャンするにきまつてるからこのまま去ろうとしたんだが

「あ、ちよつと待ちなさいよ!」

とかいきなり腕掴んできた　指向のナイトでもちよつとわずかばかり痛いと感じるとか……こつちの一般人はそんなに強くないのではにいのか；

「おもえ粘着ウザいな　こつちが礼儀正しい大人の対応してればつけあがりやがつてよ」

「な、なんですつてえ!どこが「礼儀正しい大人の対応」よ!ちつともそんなのしてないじゃない!」

あもりのうるささに思わず耳をふさいでしまった件　この距離で大声出すとか意識がシャッターアウトされかけたんだが；

どうしたのかと思案が鬼なっていると向こうからタあクミチが歩いてくるのが見えた

「やあ二人とも、おはよう」

「え、た、高畑先生!?おはようございます!」

「何いきなり話しかけてるわけ?」

「はは、ひどいなあ、プロントさんは」

「こつちは取り込み中なんですわ?お?」

「え?高畑先生はこつちの不審者とお知合いなんですか?」

「証拠もないのに不審者扱いするとかおまえのINTERNの低さが見えてしまったな　もう少し賢くなるべきそうすべき」

「誰がバカレンジャーですつて!?!」

「おいやめる馬鹿!うおわー!」

飛び蹴りかましてくるとかちよつとこれSYれならんしょ・飛び蹴

りは一步間違えると墜落で大ダメージを受けるいわば諸刃の剣。さらにスカートをはいていることにより危険度は加速した！！（恥）

「だ、大丈夫かい？ブロントさん」

「黄金の鉄の塊でできたナイトが布装備のジョブに後れをとるはずがない。英語で言つとノーブオブレム」

「嘘、効いてないの！？」

ツインてんルが驚愕が鬼なってるがもう駄目

「お前が大人を舐めた事ばかりすることでおれの怒りが有頂天になった。この怒りはしばらくおさまる事を知らない」

「な、なによ！やる気！？」

「強がってもおもえがおるにビビってることはバレバレなんですわ？至高のナイトに攻撃効かない！早くあやまつて！！」

「誰があんたなんか」ブ、ブロントさん！落ち着いてくださいア；リアルでモンクタイプのキミが暴れると校舎が壊れるんです！h a i！謝るます！僕は絶望的な戦いたくないんです！アスナ君も早く謝つて！」す、すいまえんでした；；；」

二人ともが土下座することによっておるは怒りの矛を収めることにした（寛大）

「仏の顔がサンドという名ゼリフがあるからよ、今回はゆるしてやるが次やったら雷属性の左が唸るだろうな」

「良かった！許された！もうためかと思つたよ！やっぱりナイトは寛大だなーあこがれちゃうなー」

「それほどでもない」

「た、高畑先生……………」

タカイmチの態度にさらなる驚愕がツインテールを襲つた！まあ貧弱一般人ではナイトのすごさを一目で見抜くのは実際に守られないと難しい系の話があるので理解はできる（共感）だがいずれあつかミチと同じ態度になるのだろうな（予言）

「それで、ブロントさんはどうしてここに？」

「学園ちよんに会いに来たんですがねえ？昨日ホテルまでいった道

を戻ってきたらこうなってしまった件 学年長絶対わかってやっただろう…… 学園ちよいハイスラでボコるわ……」

『ははは（苦笑）学園長のお茶目には僕も時々困らせられるからね。手加減するなら隙にやってくれて構わないよ』

『お前それでいいのか……』

キーンコーンカーンこんん

『あ、チャイムが！』

『アスナ君、早く行きなさい。遅刻はだめだよ』

『わ、わかりました！』

そう言っただけで猛スピードで走っていく少女にとんずらが使えたのか

……と感心が鬼になった

『ブロントさんは学園長室だね。一時間目は僕の授業がないから案内するよ』

『道なら分ってるから別にいいぞ（ひとりのできるもん）』

『僕と一緒にいればさっきみたいに不審者に間違われなくてすむよ』

『「」確かにな お願いします！』

『よし、じゃあ行こうか』

（見事な場面移動 学園長室）

『フオフオフオ、よくきたのう』

『ハイスラア！！』

『うおわー！』

学園長にハイスラかましてやったんだが血が出るだけでダメージはにいらしい……

『じゃあ、僕はこれで』

『案内のお礼にジュースをおごってやるう』

つ【ブロントドリンコ〜謙虚な味〜】

『あ、ありがとう……後で飲むよ』

そう言っただけでひややせかきながらた亜カミチは出て行った

『いきなり切りかからんでほしいのう』

『おつとおるとしたことがヴァルン聖人と間違えてしまった感悪気はなかつたらしいぞ?』

『せめて断言してほしいんじゃないが……まあいい。早速本題に入らせてもらおうかの』

そう言いながら紙を取り出して渡してきた

『それが仕事の詳細じゃ。明日から早速仕事についてもらおうと思ふん出の、今日中にその内容を全部把握しといてくれんかの』

『この量を一晚とかあもりにもひどするでしょう……まあナイトのINTを試すにはいい機会だと思つたんだろつな』

『気付いたかの?』

『これだけ露骨にやられて分らない奴は馬鹿すぎる』

『ホッホ、では頼むぞい』

『がけつん長がマトに見えてきた不具合があるんだが……』

そう言いながら貰った紙を目繰つてたんだが

『……おいイ?仕事量が増えるように見えるんですがねえ?』

『そうかのう?ワシも歳でな、よく見えんのじゃ』

『それならおまえの目は意味がない後ろから破壊してやるうか?』

『すいませんでした……』

またも土下座する羽目になつたくく近衛土下座衛門

『でこれは一体どういうわけなんですかねえ?』

そこに書いてある文字に思考のナイトも思わず引きつったか鬼なつた

女子寮 管理人

『ふむ、それはのう、キミがホテルに行ったあとで気付いたんじゃないがお主住むところがないじゃろ?そこで住処の提供と護衛の仕事の両方を考えた結果これが一番いいと思つたのじゃよ。ちよつど空いておつたしな』

『オウフ……完全論破されちえしまった感； デメリットよりメリットが多いのは確定的に明らか』

『そうじゃる。女子寮の管理人を男に任せるのはどうかという声が聞こえそうじゃが、ブロントさんなら大丈夫、すぐに信用されるじやろつ』

『「確かにな ナイトの信頼度は格が違うからな』

『無論ワシも信用しておる。この信用を裏切らんでくれよ』

『おまえ全力で頼っていいぞ』

『よし、仕事の話はこれで終わり……としたい所じゃが、明日から仕事するにあたってスーツを購入してもらおうと思っくんじゃ』

『ほむ、教師にとつてのスーツはナイトにとつての鎧だからな』

『そついうことで人を呼んでおる。しずな君！』

ガチャッ！！

『こんにちは、指導教員の源 しずなです。よろしくお願いします』

『【こんにちは】俺はブロント謙虚だからさんづけでいいぞ』

『しずな君は先程言った通り指導教員をやっておつての。教師として分らない事があれば聞きなさい。ちなみにタカミチ君は広域指導員と夜の警備もやっておるからこちらも同様にするよつに』

『ほむ 【よろしくお願いします】』

『では、早速スーツの仕立てに行きましょうか』

くカカツと場面移動 スーツの く

『彼が明日から教員として働くことになったので、彼のスーツを急ぎで仕立ててもらえませんか？』

『アイヨ。早速ダケド脱イデ脱イデ』

『いきなり装備ひつpegがしとか……こいつ絶対カジーだ！おい！？何いきなりズボン脱がしてるわけ！？脱がすにしても順序があるでしょう……おい、やめ、うおわー！』

『……まあ』

『オオー良い体シテルジャナイノサ!』

『露骨におるの体を仰視してくる……いやらしい』

『男ガ細カイクト気ニシナイ!』

バシーン!

『オウフ』

『ホラホラめじゃーデ測ルカラ動カナイデヨ』

服屋のおばちゃんに逆らえないアワレな騎士がいた!!

『しかし、凄い傷ですね……』

『感心したように言ってるがどちらかというと犯罪だからな?俺が志向の肉体を持つナイトだったからよかったものの貧弱一般男子だったらおもえ警察に追われてるぞ?』

『あら、ごめんなさいね』

『クスクス笑いながら言っても説得力がにい;まあそれは置いておくとしてこの傷だったな?俺はナイトだからよ ナイトは最前線に立つし敵のタゲとりまくる 後ろのLSメンは安心して全力出せるが自分は敵の攻撃を受け止める 体中が傷だらけになる それがそのままナイトの実績として残る(男の勲章) 彼女が出来る 逆に最前線に立たない タゲがとれない!とりにくい! LSメンから頼りにされず強敵を狩りに行けない 体が貧弱 心が狭く顔にまで出てくる いくえ不明 ほらこんなもん』

『よく話がわかりませんでした、ブロントさんが凄いとということ はわかりましたわ』

『それがわかっていれば十分ご褒美にジューズをおごってやるっ』

つ【ブロントドリンコゝグラットン味】

『わあい^^いただきませす、ゴクリッ……トマトジューズ?でも何か違うような……』

『ほうしずあnは違いの分かる女だな今回でそれがよくわかったよ <<しずなん感謝 このジューズは基本的なトマトジューズの中に オワツタヨ(バシーン!)』うおわー!!』

『ジャアすーつ仕立テトクカラ早朝ニデモ取りニ来ルンダヨ』

『ありがとうございます。それではお願いしますね』

『おるはヴァナでもリアに囲まれてたからよ修羅場とかかなり高確率であったがこういう女のマイペースさが怖いと思ったのは生まれて初めての経験（リアル話）』

『では行きましょうか、ブロントさん』

『h a i ! ! 』

く帰り道なんだが？

『今日は【ありがとうございます】』

『どういたしまして』

『いつかお返ししなくてはなと思った（鶴の恩返し話）』

『いえ、そんなに気を使っていたただかなくても』

『ここで引くとナイトの黒鍵にかかわるんですわ？お？』

『うーん、でしたら今度暇なときにもお茶に誘っていただけませんか？』

『h a i ! 誘うます！』

『期待して待っていますね』

では、私はこちらですので とかいうしずんsと別れたおるは明日から仕事始まりだから寮じゃなくホテルに戻る事になった。そもそも量の場所を知らない系の不具合があるのでいけにい； ホテルなら一人で帰るのでホテルに帰りますね^ ^

くカカツと数時間経過く

『おいイ……ここはどこなんですかねえ？』

迷子になってるアワレなナイトがいた！誰か助けて下シア……

やっと仕事かと思ったか？まだだよ！！（後書き）

書いた後で思ったんだがこのタイトルどう見ても忍者だろ…ぞなむ
す忍者説がでてしまう；

遺伝仕事しないとか……修正されないデ！（前書き）

四日連続で投稿することにより投稿数は更に加速した！

しかし四日連続って……作者絶対睡眠時間削ってるだろ（リアル話）
だが3度目が正直という名ゼリフがあるからよ>>何度言っつもり
だと言ってるサル！！

今思ったんだがキャラクターの口調が難しすぎる件 京美人は見る
分にはいいが書くのは一苦勞だということが今回でわかったよ<<
このかん感謝

キャラの口調がおかしい！修正されて！という人は感想かどっかに
書き込めばいいと思う

遺伝仕事しないとか……修正されないデ！

『ちくしょうこの学校作った奴馬鹿だ；敷地内で迷子になるとか聞いてないんで抜けますね^^；』

やはり抜けられないアワレな内藤がいた！

『まただよ（泣）ここさつきも見たんだが；ヴァナの歩く世界地図ですねと言われた事もあるおるが学園都市ごとき迷子になるわけがない……はずなんだが』

ゲウウ〜

『おつとお腹が空いてしまった感 とりあえず飯にするべ』

『あ〜』

『何いきなり話しかけてるわけ？』

何いきなりPOPしてきたくく黒髪

『なんや困ってはります？』

『誰が迷子だつて証拠だよ！？』

『そか〜迷子なんか〜』

『おいイ！？この会話は早くも終了ですね；』

『どこ行きたいん？案内しあげますえ〜』

この黒髪のスルースキルはAといったところかな……この世界のリアはキャラが濃すぎる不具合が生じているんだが……早く修正されて！

ゲウウ〜

『おいイ……このままでは俺の寿命が空腹でマツハ……まずはレストランかなんかに案内すべきそうすべき』

『了解や。ほな出発〜』

〜カカツと場面移動 屋台〜

『ガツガツガツガツ』

『ほわ〜凄い食べっぷりやな〜。』

『おいイ……この屋台えごすぎる！橋が止まらないとかちよとこれSYれならんしょ。早く修正されないとおるの財布が空になる……』

『ここの食事はうますぎでしょう？朝食が食パンと石のスープだったおるには破壊力はつ牛ンだな』

『気に入ってもらえてよかったわ〜』

『まあ俺は謙虚なナイトだからよえこい屋台でも腹八分で済ますし奢りもする おもえ全力で頼んでいいぞ（太っ腹）』

『ええのん？じゃあ肉まん一つ〜』

『追撃のジュースを奢ってやることでお前の満足度は更に増した！』

『つ【ブロントドリンコ〜黄金の鉄の塊味〜】』

『おおきに〜「ゴクリッ」……ナイトの神髄が見えた気がするわ〜』

『しかしおるが思うにここの店員若すぎませんかねえ？ロードン基準法はどこに行ったんだという顔ぬなる』

『ウチと同じクラス』

『えっ』

『ウチと同じクラス。ここの店員みんな』

『おいイ？そももお前の学年を知らないんですわ？お？』

『あれ？ゆうてなかったなあ……って自己紹介もまだしてなかったわ／＼』

あや〜恥ずかしいわ〜とかいいつつわたわたしてるくく黒髪

『「確かになというか鬼なつた まあ俺も忘れてた系の話があるから気にしなくてもいいと思うぞ（こころへんの気配りがモテる秘訣かも）』

『そやな、気にしててもしやあないし。ウチは近衛木之香いいます。麻帆良学園女子中学校2年、やなかつた、3年になりました』

『俺はブロント謙虚だからさん付けでいい ちなみにここの教師兼好意気指導員兼薬缶警備員兼護衛兼女子寮管理人をやることになつてちえいる』

『お、多いな〜』

『ナイトはジヨブを選らばにいらな これぐらいチヨロいもん
とりあえず明日からだからな【よろしくおねがいます】』

『よろしゅうな〜』

『しかし中学二年だったのかというか鬼なる ここはみんなああな
のか?』

『けっこう働いてる人おるよ?それにウチのクラスの担任数えて1
0才やし』

『おいイ?完全に労働う基準法違反だろ……がけうん長俺にだけ法
律摘要してくるとか……汚いなさすがコノ衛門きたない』

『え、フロントさんおじいちゃんのことしつとるん?』

『知ってるも何も面接が奴だったんだが……おじいちゃん?』

『うん、おじいちゃん』

ナデナデ

『ひゃ!』

『おいイ?これは一体どういうことなんですかねえ……あの後頭部
が遺伝されていない系の不具合があるんですが……こるは修正されな
いな』

『も〜フロントさん。いきなりそんなことしたらあかんえノノ』

『おっととすまにいつい気になってしまった感 あの後とい部が遺
伝されるとかsYれならんのえdな しあkし……』

『ん?なに?』

『露骨に類染めてくるとか……いやらしい』

『あ〜んもう掘り返さんといて〜!』

ポカポカポカ

『うおわ〜!やめてくらふあい……』

ポカポカポカ

『やめろと言ってるサル!!おもえの執拗なポカポカで俺の怒りが
有頂天になった!……』

『きや〜w』

『おいイ！？この状況楽しむとかお前絶対楽道家だろ……』

『まあまあ気にしたあかんえ』

『……そんなに楽しそうにされるとこっちまで笑が鬼なっちえしま
う おもえの笑顔はまさに鬼の力といったところかな』

『それほどでもないわ』

『謙虚にもそれほどでもないと言った！すごいな、憧れちゃうな』

この後も雑談してたらいつの間にか日が暮れちえしまっていた件
おるは大丈夫だがこのかんには夜道が危険が危ないので送ってい
くことになった

くお前場面移動でボコるわ……く

『【今日はありがとう】』

『どういたしまして。あ、忘れてたわ！』

『何かな？』

『迷子やったんやろ？案内したるつもりやったのに……』

『いや必要にい さっき中学校が見えたからそこからなら帰れるぞ』

(確信)』

『ほかほかならよかったわ』

『それじゃあ闇系の睡眠があるのでこれで』

『おやすみ』

こおんかと別れた俺はホテルにとんずらを使って普通なら付かな
い時間にきょうきよ帰還しようとしたんだが

『止まれ』

『何いきなり話しかけてるわけ？』

サイドテるに呼びとめられてしまった。おるはいつになったら
帰れるんですかねえ……

遺伝仕事しないとか……修正されないデ！（後書き）

ブロントさんが教師に就任できない！できにくい！早く続きを書か
ナイト！

ネガ侍は修正されたほうがいいと思った（前書き）

結局4回連続投稿で止まったな こうなるとは思っていたよ（予言）
さて5話目投稿何dがここで一つ注意点があるらしいぞ？

このフロントさんはかなり高確率でリア にもてることになる英語で言うところとフラグメイカーつまりハーレム

まあナイトは高確率で最強のジョブだからよ皆がフロントさんに注目するのは仕方がないと思ったがハーレム嫌いな人はこの先読まないほうがいいだろうな

すでにしな このかん せちゆな の三人にフラグがあつてしまつてる件

程度の違いがあれどフロントさんに轢かれてしまっているのは否めない感

まあぞなむすは恥知らずな作者だからよ原作キャラでも容赦なくハーレム入りさせるしほとんど原作にでてこないしずんなも捏造する

ネガ侍は修正されたほづがいいと思った

まあナイトは高確率で最強のジョブだからよりアにもてるかもしれあいんだが今日はちよつとわずかばかりリアとのエンカウ
ン卜率が高すぎる感；

「一体何の目的でお嬢様に近づいた？」

「お嬢様？誰それ？外人？歌？」

「答える」

「答えると言われてもお前の言ってることが理解不能状態なんだが；

」

「このつ…！とぼけるな！」

ブウン！

「！？バックスステツポオ！」

何いきなり牙剥いてきたくく侍いきなりの攻撃にも靈性に対処して
見せるナイトはやはり流石だなという顔になるがそれにしても侍
の行動は危険だと思った

「何いきなり攻撃してるわけ！？攻撃されるとわかっていればそれ
なりの対応もできますがわからない場合対応が遅れるんですわ？お
？？」

こちらの言葉を見無視して太刀振り回す侍に俺の怒りが有頂天にな
りかけたがそこはナイト 仏の顔が三度の名台詞を実行する様はま
さに仏といったところかな

「おいイ？一体全体どういうつもりなのか説明してもらえませんか
ねえ？」

こちらが礼儀正しい大人の対応をしていたら少し頭が冷えたんだ
ろくな 攻撃やめて

「……もう一度聞く。何の目的でお嬢様に近づいた？」

とか言ってきた まただよ（汗）

「そのお嬢様というのが誰かわからないんですわ？お？そもも俺

は明日からここで働くことになる信任教師英語で言うところのニュータイプ茶」

「……何？」

「おるは学院長の面接通ったからここにいるんだが？あの学園長が危険が危ない人物を懐に入れるわけがい おもえ確認してみるよ」
そう言つてやると継体で連絡し出した しばらくして確認が終わつたんだろつな こちらをじつと三回連続見つめてきた その後もう9回くらい確認したらしいが結果は変わらなかつたようだった

「どうもすいませんでした；許して下さいア；；」

とプリケツ土下座するはめになつた>>キョート

「お前人を信用しなかつた結果がこれ一足早く確認すべきだったな？お前調子ぶっこきすぎてた結果だよ？まあ俺は寛大なナイトだがらなおもえのアワレな行いも水に流すしやり返さない」

「許された！もう駄目かと思いましたが！優しいなー憧れちゃうなー」
「それほどでもない」

「謙虚にもそれほどでもないと言つた！」

羨望のまあざしで見つめてきたが謙虚なナイトは自慢しない

「ところでお前は一体何者なんですかねえ？早く説明しテ！」

「あ、はい。私は麻帆良学園女子中学校3年の桜咲 刹那といひます。お嬢様……近衛 木之香様の護衛を務めています」

「ほう ナイトだったのかというか鬼なつた」

「……まあそう言つても差し支えありませんが」

「……おいイ？ナイトが傍にいないとか聞いたことにい；；」

「私は陰からお嬢様を守っているんです」

「それではいさというとき護れない！護りにくい！その不具合は今すぐ修正されるべきだなと思つた」

「いえ、それは……私などがお嬢様の傍にいる訳には……」

「お前頭悪いないつも傍にいても違和感が仕事しにから護衛に選ばれたんだろそれが離れてたら意味がない 陰から守らせるならもつと強いやつに頼るだろつな」

『っ！？私でも守って見せます！！』

『侍は弱足してもらったほうが世界がよく見えると思った 俺が思うにお前は才能がありすぎるからこつという思考ぬなる 周りを良く観ればおもえより強いやつはいくらでもいるぞ？』

『それはっ……………そうですけど……………』

『陰から守る役目は恐らく他の人間がしているだろうな おもえは傍で守ってやるんだな』

『でも……………ウチは……………』

『今すぐにはいわにいが後悔先立たずという名ゼリフがあるからよ 手遅れにならないうちに決めるのがいいと思った』

『……………』

おっととぐうの音も出ないくらい凹ませてしまった感 まあこれで修正されてくれればいいんですがねえ……………

『とにかく今日は帰るんだな 明日もまだがつこいがあるだろう一晩じっくり考えるkとお進めする』

そう言っでやると迷っているのかせつつなは無言でHPに帰って行った

『おるも帰るか……………』

今日はちよつとわずかばかり疲れてしまった感 あ下から仕事始めなのに疲れるとかちよとこれSYれならんしょ；

ネガ侍は修正されたほうがいいと思った（後書き）

刹那は割と動かしやすいと思った　だがしかし不自然さが際立っているのは早くブロントさんに仕事させたくて焦っている作者がいるからだろうな　そういえばこの漫画リアル忍者がいるんですがねえ
……扱いがどうなるか未定

見事な初仕事だと感心するがどこもおかしくはないな(前書き)

おいィ?これから終末更新になるんだが大丈夫ですかねえ?

しかも今回はかなり急いで書いたから出来が悪い系の話がある…;

そして前書きが少ない感 許してくださいア;

見事な初仕事だと感心するがどこもおかしくはないな

ジリリリリリ

『おいイ？もう少し寝かせてくれませんかねえ』

ジリリリリリ！！バアン！ガシイ！！

『……そういえば今日から仕事始めだったなというか鬼なった
日から遅刻とかマジでSYれならんで準備しますね^^』

くカカツと準備中く

普通なら準備できない時間できょうきよ準備をしたおるは時計を
確認したんだがあまりに準備が早すぎたんだろうな まだ9時だっ
た……つておいイ！？

『めざあmしかけ間違いとか……汚いなさすが目覚ましきたない……』

自分の失敗をめあましのせいにするヒキョウな内藤がいた！！
これ以上遅れると志向のナイトがクビになってしまふ系の不具合
が生じるのでとんずらを使ってきょうきよ後者に辿り着いた

俺は不良だからよ急ぐときはわき目もふらないし学園長室のドア
も蹴破る

『ふお！なんじゃ！？』

『カカツと来たんだが？とりあえずは【おはようございます】』

『お、おはよう……で、どうしたんじゃ？そんなに急いで……』

『おいイ？人が遅刻したから急いできたのにその対応はあまりにお
かしすぎるでしょう？』

『遅刻？……まだ8時なんじゃが』

『えっ！？』

おいイ？今が八時とか一体どういうことだよ（困惑）誰か説明し
て！と困惑が鬼なってるおるにあぐく園長は

『ほれ、時計』

とか時計見せてきた……」「確かに単身は8を示してるんだが；
おるの部屋の新品時計が時間の設定間違えてた感

『よかった！もう駄目かと思っただよ！！初日から遅刻する 職を失
う 金銭的余裕がなくなり顔にも出てくる いくえ不明になるとこ
ろだったな』

『ふう、まったく驚かさんでくれい。……少し早いが渡したいもの
もあつたしの、ちょうどよいか』

『渡したいものに【興味があります】』
『これじゃ』

おるはヴァナの出身だがリアルでは道産子だからよ文明危機にも
対応してるし使いこなす

『ほむ、これは携帯ではいいか？』

『その通りじゃ。これからはプライベートでも仕事でも必要になる
じやろかな。ちなみに使い方は分るかの？』

『おるはタイプピング速度毎秒10文字とか普通に出すし』

『……恐ろしく早いのが』

学園長がひややせかきながら3回連続で見つめてきた

『この界限では見たことのないものだから見てみたいのはよくわか
るが北海道では常識であつておるの凄さとは無関係』

『北海道ってそんな魔窟だったかのう』

しばらく沈黙が走ったがやるべきことを思い出したんだろうな学
園長は話を再会し出した

『まあもう少し待つといってくれんかの、今日から君が担当するクラ
スの担任がくるので』

『【わかりました】』

く露骨な時間経過 20分く

コンコン

『ネギィスプリングフィールドです』

『おお、来たか。入りなさい』
ガチャ

『失礼します』

何いきなりPOPしてきたくく少年　ここは女子中学校じゃなかつたんですかねえ……？

『学園長、この人が僕のクラスの副担任になる人ですか？』

『そうじゃ。ブロントさん、自己紹介を』

『おるはブロント謙虚だからプライベントではさんづけでいいし仕事中は先生付けでいい』

『僕の名前はネギィスプリングフィールドです。麻帆良女子中学校
3　Aの担任をしています。担当教科は英語です』

『おいイ？聞き間違えですかねえ？今少年が担任とか聞こえる不具合があつたんだが；』

『あつとるよ』
『えっ』

『その子が担任であつとる。魔法関係の事情での、彼は10才でこの教師を務めているんじゃない』

『……そういえばこのかんがそういうことが言ってたな　ということとは又ギは『ネギです』このあkの担任なのか？』

『え、木之香さんの知り合いなんですか！？』

『……木之香のことをどこで知つたんじゃない？』

『昨日不覚にも迷子になつてるナイトに声をかけてきた　木之香には昼飯に店紹介してもらつたし夕方まで話っぱなしだった』

『へへそうなんですか』

『……そういえば刹那君が言つてたような気がするのぉ
『おいイ？忘れてるとかお前絶対ボケてるだろ……』』

と言つてやつたらムギがムツとしてきたんだが；

『年上の人にそういう態度は失礼だと思います！』

『あゝネギ君、彼はいいんじゃないよ、別に』

諦めとるからの　とか言ってくるコノえもんにおもわずギガトンパンチが出そうになったがナイトには挑発が効かないからな

『学園長！でも！』

『そもそもこのSSでフロントさんがフロント語使えないとかSYれならんからの』

『メタ発言はやめると言ってるサル！！これはリアル話であってSSとは無関係レス以下ひ不要です』

ミギがむくとか言ってるがもう駄目　この件は学園長が認めちえしまってる時点で論議にならない事が証明されてしまってる感

『ほれほれ、もうすぐホームルームが始まるじゃろ。フロントさんを教室に案内してあげてくれんかの』

『……わかりました』

担任が露骨に不機嫌さを醸し出してくる……前渡多難すぎる……

～見事な場面移動　3　A教室～

『……ここが3　Aの教室です。まず僕が説明しますので後で入ってきてください』

mだ頭がヒットしちまつてる感　頭を冷やすまでは話しかけないほうがいいだろうなと思った

マジがドアを開けると上から黒板消しが落ちてくることになった
予測してたみたいでキャッチしたが下段ガードを固められなかつたんだろうな　ロープに引っ掛かると同時に追撃のゴム手裏剣がモギにヒットした！

『『『イエーイー！！』』』

おいイ……クラスぐるみで教師にわなしかけるとかこのクラス絶対忍者クラスだろ……汚いなさすが忍者きたない；

『コホン！え～本日よりウチのクラスに副担任の先生がつくことになりました』

『ええ～！？』『聞いてないよ～朝倉～！』『くう～私の情報網

にも引つかかかってないなんて!!」……なんかネギ君不機嫌じゃない?」……ええ、そうですね。なにかあったのでしょうか?」
とか聞こえてくる。あまりの元気にほんのわずかに気おされているナイトがいた!

「では、入ってきてください」

んえぎの指示があつたので中に入ることにすた。もちろん汚い忍者の罨はハイスラでズタズタに引き裂いたんだが

おるは壇上が上がって自己紹介を始めることになった

「俺の名前はブロント謙虚だからプライベントではさんづけでいいし仕事中は先生付けでいい。教科は数学を担当することになるだろうな。これから一年【よろしくおねがいます】」

「……」

「……おいイ?」

反応されないとか聞いたことないんで抜けますね^^;

「……カツコいい!」

「うおわ〜!!おもえらいきなり大声あげるのは犯罪だぞ!!リアルポリスに捕まって臭い飯食う羽目ぬなるのは確定的に明らか!!」

最近の女子中学生のパワーはえごいなと思つた;しかしこの教室今日までに円買うんとした女子がほとんどいる件

「どこからきたんですか?」 「趣味は?」 「その髪の毛地毛?」

外人?」

「おいイ!?!おもえら静かにすべき怒られたくないならそうすべき!近隣教室の迷惑になつて通報されるはめぬなるぞ!」

「みんな、取材は『麻帆良のパパラッチ』ことこの朝倉 和美に任せろ!」

パイナツポウが急に立ち上がりだしたんだが

「来た!麻帆良のパパラッチ来た!」 「これで先生も丸裸だ!」

と期待を背つ羽目になつているが

「パパラッチとかちよとsYれならんしよ;プライベントの秘密を明かされて裏世界でひっそり幕を閉じるはめになる……」

クラスメントには神の賜物だがおるにとつては地獄の宴だからな；
『ふふふ、じゃあいくよ！まず一個目、何処出身ですか？』

『北海道で生まれたおるはそのまま喧嘩チームDARKの頭だった
こともある』

『マジで！？ヤンキーじゃん！つていうか日本人なの！？』

『地元では伝説になってたからな』

『ほへ〜一発目からトンデモ事実が発覚してしまったわね……まあ
いいや、次。その肌と髪の色は元からですか？』

『これはもとからだな』

『次の質問です。ブロントって『先生をつけると言ってるサル！』
す、すいまえん；；ブロント先生の名前は本名ですか？』

『これは本名じゃない。本名はもつと長いからよ縮めてブロント
呼ばれ慣れてるからこれで読んでもらわにいと反応できない！出来
にくい！！』

『ちなみに教えてもらったりは……』

『……実を言うとも自分でも忘れてしまった感』

『……さいですか』

『……まあ思い出したら言うからうよ』

『さ、気をとりなおして次の質問いくよ！ブロント先生の趣味はな
んですか？』

『趣味は何かと聞かれればおるはギルティギアと答えるだろうな』

『え！？先生ギルティギアできるんですか！？』

『何いきなりPOPしてきたくく触覚』

『俺はソル使うんだがおもえは何使うんだ？』

『私はカイですね』

『おいイ……カイ使いとか雑魚狩り専門でしょ？お前それでいいの
か？』

『先生カイバカにする気？そうならあんたもう史ね！！』

『うおわー！いきなりシャーペン投げしてくるとかお前絶対忍者だろ
……汚いなさすが忍者きたない！』

『はいはい！ストップストップ！』

和いmの仲裁があったからよかったがなければ雷属性の左が飛んでいただろうな（有頂天話）

『ん〜時間的にこれが最後の質問かな。じゃあ先生、ズバリ、好きな人はいますか？』

『得にはいいい。おるはよくリアに注目されるが一人を選んでしまつては嫉妬で危険が危ない事態に陥る系の話があるからよ今のところは恋愛はしにいかもしれない』

『あ、じゃあこのクラスで気になる人は？』

『おいイ？人の話聞いてなかったのか？ならお前の耳は意味ないから後ろから破壊してやるうか？』

『す、すいまえんでした；；；』

『まあ気になると言えばせつとなかな（ナイト魂話）』

おるの言葉に暮らすがざわめくがおるは焦らなかつた

『おおつと！ここでまたもや爆弾発言！先生の「気になる」桜咲

刹那さん、一言どうぞ！』

『ええつ！え〜と、あの……』

キーンコーンカーンコーン

『おつととタイムアップしてしまつた感。一時間目は英語だからよ真面目に聞くべきテストで赤点とりたくないならそうすべき』

変な空う間になつたので俺はミステリーを残すためそう言つて職員室に戻つたが多分クラスで伝説になつてる

見事な初仕事だと感心するがどこもおかしくはないな（後書き）

このストーリーリーでネギは人として大幅な成長をさせる予定だが大丈夫ですかねえ？

女子寮の管理人ぬなるのが反発されるのは分ってたこと（予感話）（前書き）

なんとか予告通り終末にUP出来た感

毎週投稿は何処にも逃げられないプレッシャーを背負う代わりに小説を書かない事がなくなるいわば諸刃の剣

まあそれは置いておいて1万PVいつてしまった件 この小説が1万回見られているんだなあと感動が鬼なっているんだが？いままで【ありがとございます】これからも【よろしくお願いします】

女子寮の管理人ぬなるのが反発されるのは分ってたこと（予感話）

キーンコーンカーンコーン

『日直号令かけてくらふあい』

『起立、きをつけ、礼』

『授業の内容が分からなかった場合は今すぐ聞きに来るべきそうすべき テスト直前に聞きに来てても時既に時間切れとなることは確定的に明らか』

『じゃあききこめー^^』

『^^』 『おー^^』 『^^』

『うおわー！クラスのほとんどがわかってないとかちよとこれSYれならんしょ； だがサポ学のおるは全ての質問に答えるだろうな』

『先生趣味はー？』

『そういう質問じゃぬえー！！』

ひ不要な質問の嵐をバックステッポでかわしつつ俺は普通なら教えられない時間できょうきよ質問に答えとんずらを使って逃走したんだが

『……なんでおもえがここにいる訳？』

『いいじゃないか、せ・ん・せ・い？』

いつかの金髪幼女に遭遇するはめぬなった そういえばおるのクラスにいた感

『何か用かな？』

『まあ個人的な用事もあるんだがな、今回は仕事だ。今から学園長室に向え』

『それは伝言なんですかねえ？』

『ああ、夜の警備に関して説明したいことがあるんだと』

『伝言なら形態を使えばいいと思った』

『……私もそう思う』

『ところで個人的な用事が気になるんだが？』

『なあに大したことじゃないさ』

『そう言い終えると同時に蹴りかましてきたくく幼女　だが下段ガードを固めた俺には効かず逆に幼女がダメージを受けるはめになった』
『~~~~~っ!!』

『お前調子ぶっこ来すぎた結果だよ?』

『くそ!なんでそんなに硬いんだ!?』

『ランパートという便利アビリティーがヴァナには存在するんだがこいつを使うと物理防御力と魔法防御力が比較的に上がって最高の盾に見える』

『つくづく規格外だなお前は』

『ナイトには常識なんだが?』

『世界が規格外ということか。全く、不公平なものだ』

『やれやれといった風に言う幼女だがおるは共感できなかった感』

『不公平ではない　向こうは強いやつが多いが生活咸鏡はひどいこちらはあもりにも快適すぎる』

『……そういうものか。そうだな、何かを得るには対価が必要なのはどこも同じか。お前たちはモンスターの跋扈する世界で生き抜いているんだ。それぐらいは必要なんだろう』

『そういうこと　だがすかしおもえはどうして蹴りくれてきたんですかねえ?理由がわからないと俺の寿命がストレスでマッハ;』

『ああ、なんのことはない。この前の仕返しをしようと思ったただだ。……無理だったかな』

『なるほどなと納得が鬼なるな　そういえばもう体は大丈夫なんですかねえ』

『あ?ああ、お前は知らないんだっただな』

『なにw知らないのか理解不能状態　早く説明しテ!』

『私は吸血鬼だからな、あの程度のダメージはすぐに回復するんだ』
『吸血鬼だったのかというか鬼なる　ケアルかけなくて正解だったな　ケアルかけてたらお前の命が光属性でマズいことになってた(』

『確信)』

『……お前のケアルとやらは吸血鬼にダメージを与えるのか？』
『吸血鬼というよりはアンデッド まあ闇系の生物にはダメージを
与えてしまうことが稀によくあるらしい（リアル話）』
『イマイチ使えんな』
『そもそもそういつた奴らが仲間であることがいからな まあ例
外はあるが』
『それもそうか。っと、けっこう時間がたってしまったな。さっさ
と行けよ』
『わかるますた！』

〈素晴らしいとんずらだすばらしい 学園長室〉

『メガトンパンチ！』

ドガアン！！

『ブロントさん……もう少し静かにドアを開けてくれんかの』
『おっとと急いできたから丁寧さが足りなかった件 ノックも忘れ
た内藤は隙だらけだった。』

『ま、いいんじゃないかの』

急いで入った学園長室には先客がいた件

『ところでなんでウチのクラスの龍みあがいるんですかねえ？』

『こんにちは、ブロントさん』

『オウフ：普通にあいさつで返されたんだが。』

『あー、彼女は夜の警備のパートナーじゃよ』

『よろしく』

『おいイ……労働基準法無視がデフォルトになっちえしまってる感

このままでは学園の存続が法律でマツハ。』

『フォツフォ、大丈夫じゃよ。ちゃんと手はまわしておるからの』

『学年長絶対ためきだろ……えごいなさすが狸爺えごい』

『褒め言葉として受け取っておこうかの』

『……まあとりあえず』よろしくおねがいます』

『詳しいことは後で龍宮君に聞いておいてくれ。では今晚からよろしく頼むぞ』

『今晚からか？』

『いかにも。今日は他の魔法先生や魔法生徒と顔合わせしようかと思っただがの、高畑君は出張じゃし、ほかの先生も都合が悪い人が多くての。だからそれはまた後日にしようと思っんじゃが』

『いいぞ』

『助かるぞい』

『ところで龍にあはどうやって戦うんですかねえ？【興味があります】』

『フフ、私はこれで戦うのさ』

『つた宮はそういうと銃を袖からジャキツとPOPさせてきた』

『おいイ……突っ込むのも疲れてきたんだがそるは銃刀法違反じゃにいのか…』

『これはエアガンさ。ちょっと改造してあるがね』

『お前知らないのかよエアガンでも威力があつたら違法なんだぞそれを持っているとおもえはリアルポリスに捕まって臭い飯食うはめぬなる』

『えっ』

『いきなり青ざめ出したが時すでに時間切れ犯罪に手を染めてしまったな このままでは何処にも逃げられないプレッシャーを背負うはめぬなるので学園長に相談すべき捕まりたくないならそうすべき学園ちよんなら何とかしてくれると思つたまあ麻帆良の常識でね？』

『う、うん。そうするよ。ありがとうブロント先生。危づく気付かないままリアルポリスに指名手配されるとこだったよ。流石に気配りの出来るナイトは格が違うね』

『それほどでもない 夜まで時間があるのでそれまでに言っておいたほうがいいだろうな』

『そうだね。じゃあ、待ち合わせをしよう。今夜10時に世界樹前の広場で』

『一応連絡先のお換しておいたほうがいいと思った』

『わかった。ブロント先生は携帯持つてるかい?』

『あります!』

『じゃあこれで赤外線通信してつと……はい、これで私のアドレスが入った。一応仕事用とプライベート用の両方入れておいたよ』

『おいイ?プライベートよんも教えて良いんですかねえ?』

『ブロントさんならいいと思っただけだよ』

『おつとと信用された感 ナイトはやはり信頼度が違うなというか鬼なった』

『フフ、じゃあ今晚また』

『hai!!』

〈カカツと場面移動 女子寮〉

『というわけで今日から女子寮の管理人になるブロント先生です。寮内で困ったことがあったら彼に相談してくださいね』

しうゝなの紹介で悲鳴やら歓声やら上がったが志向のナイトは動じなかった

『俺の名前はブロント謙虚だからプライベントではさんづけでいいし仕事中は先生付けでいい ナイトはジョブを選ばないからよ 水道修理とか任されても難なくこなすだろうな というわけでこれから【よろしくおねがいします】』

『なんで男の人が女子寮の管理人なのよ』 『でもあの人かつこよくない?』 『えーかつこよくても男の人が女子寮の管理人は……』 『そうだよねー』

『ちなみにこの決定は学園長の独断系の話があるぞ?』

『『『『『あー、ご愁傷様です』』』』』

『おいイ!?その反応とかこのあぐ園長変な意味で理解されす』

ぎでしょう？学園長これでいいのか……」

『学園長の決定なら仕方ないね』 『むしろ面白がつてこの担当にされたんでしょうね』 『可哀そうに……』 『ま、まあ凹んでたら励ましてあげよう！』 とか同乗の視線が来たのであるは思わう。目をそらしてしまった感 この空気には耐えられないんです！誰かなんとかして……；

『異議あり！』

何いきなりPOPしてきたくくツインター よく観ればこの前おるを不審者扱いしてきた少女だった件

『何か用かな？』

『男の人が女子寮の管理人なんて絶対嫌です！』

『そうですわ！』

続いてPOPしてきたくく金髪 着てる制服は「確かウルスル女子高のものだと思うんだが…… よく覚えてにい；

『管理人室には部屋の合鍵があります。それを男性に使われては婦女子の部屋に男性が自由に出入りできることになります！』

『「確かになというか鬼なるが異議申し立てはガク園長にしてくらふあい； ちゃんと言えば多分受け入れられると思ったまあ一般論でね？』

『アンタが出ていけばいいじゃない！』

『アスナーそれはちょっとひどいよ』 『少し落ち着きなつて』 『ほんまやーなんか他に妥協案あるかもしれんやんか』 とか周りから言われちえしまつてるから思わず俺は助け船を出そうとしたんだが

『僕もアスナーさんに同意します！』

更にPOPしてきたくくネギ おいイ？女子寮なのに少年がいる不具合があるんですが；

『男の人が女の人の部屋に自由に出入りできる状況は好ましくありません。イギリス紳士としてそんな状況見逃すわけにはいきません！……』

とかなんとかいってきたがあまりに自分を柵に上げた言い分に思

わず怒りが有頂天になりそうだったがここで引くのが大人の醍醐味
しかし自分の立場をわかってない又ギには少し行ってやったほう
が今後のためにもいいと思った

『ならお前はいいのかよ ほら見事なカウンターで返した 自分の
立場を理解できてないからこうやって痛い目見るはめになる だが
おもえはまだ成長してない子供だから許されているんだなあと思っ
たまあ一般論でね？』

成長してない子供扱いされた時は一瞬で怒りが有頂天になったよ
うだが隣にいたコノかになだめられていた

『まあ出て行くのはいいが学園ちよいに申し立ててくれないとおる
は野宿するはめぬなる これからの時期貸してくれるマンションは
少ない系の話があるからな』

野宿という言葉に自分の言葉の恥ずかしさを感じたのかばつの悪
そうな顔をしだしたくくツインテールと金髪 周りのフレにも窘め
られる始末 相手のことをよく知らずにネガキャンした結果がこれ
もう少し冷静になるべきだと思った

『とりあえず今日は野宿します！おるからも学園長に言っとくが
多分無駄だろうなと思う（リアル話）』

変な空う間になったので俺はミステリーを残すためそう言って外
に出たが多分女子寮ではその潔さで伝説になってる

女子寮の管理人ぬなるのが反発されるのは分ってたこと（予感話）（後書き）

で 諸刃の剣を使った結果がこれ 本編に入るまであと一話とか言
っておきながら字会でもまだ入らないというあるさま ごめんあさ
い……

あとなんかアンチネギっばくなっているがこのSSはアンチネギで
はない（宣言）原作でもちよっと子供っぽいところがあるのがネギ
なのでそこを宥めることで大人になってもらおうという試み 成長
していくにつれてりりしくなっていくからよ まあ見てなw

侵入者は人工的に淘汰されるのが目に見えている（前書き）

二日連続投稿とかまたぞなむすの病気がでた……わけではなく来週はいろいろと忙しくて更新できないかもしれないので今のうちに更新しておこうと思った（汚いなさすがぞなむすきたない

最近は再生数も落ち着いてきてようやく軌道に乗ったかなと思ったんだがまだブロントさんの扱いに慣れてない系の話があるらしいぞ？少しでもおかしいと感じたら感想に書くべきそうすべき！

話が変わるがそろそろサブタイトルのネタが尽きてきた感 これからネタが被ることもあるが気にするとハゲるので気にしないほうがいいらしいぞ？

毎度毎度長い前書きはやめろといってるサルくくぞなむす

侵入者は人工的に淘汰されるのが目に見えている

まあ俺が野宿することになっても仕事の時間はカカツとやってくるんだがおるはあらかじめ部屋から装備をとってきておいた（この辺りの用意周到さが人気の秘訣かも）

『この辺りでいいんですかねえ……？』

キョロキョロと辺りを見回してもタツつんの姿がみあたらない

『おつとちよつと早く来てしまった感』やあブロントさん』うおわー！何いきなり後ろから話しかけてるわけ！？これって間接的とはいえ殺人罪と同様だろ……俺の寿命が心臓麻痺でマツハ……』

『ごめんあさい……いやでも声をかけないと気付かないだろう？』

そう言いながら必死に弁明する辰巳あ

『「確かになというか鬼なるがもう少しやり方があると思った

前方にまわって声をかける 相手が驚きが鬼ならず良好な関係が築かれる 彼女ができる 後方から声をかける 相手がびっくりして怒りが有頂天になる 怒られて心が醜くなり顔にまで出てくる いくえ不明 ほらこんなもん』

『今度からは気をつけることにするよ……』

『いつまでも喋ってても仕方がないので仕事の説明をするべきそうすべき』

『わかった。仕事の概要はね』

〈見事な説明だ……〉

『わかりますた！』

『よし、それじゃあ行くつか。今日の私達の担当は西の森だからね』

〈露骨な場面転換 西の森〉

『龍宮はスナイパータイプの人間なので後衛にナイトである俺は前衛に置くのが一番効率的に見える』

『ああ、その盾はやっぱり騎士のものなのかい？』

『その通り俺の装備は全て一級廃人装備なのでとてつもなく強いオラが見えそうになる』

『じゃあ前衛は任せたよ。あのエヴァンジェリンを封印中とはいえ打ち負かした実力、見せてもらおうか』

『あの幼女はそんなに強いんですかねえ？』

『えっ』

『えっ』

『なにそれこわい。彼女は吸血鬼の真祖で、600万ドルの懸賞金がかけていられたこともあるんだよ？封印されても満月の夜にはある程度力が戻って、かなり強いはずなんだけどね……』

『あれが強いとか言ってる時点でお前の未熟さが証明されてしまったな もっと精進するべき死にたくないならそうすべき』

『ハハ……そうするよ』

引きつったか鬼なっているがそんな雑談してるうちに敵が接近してきた

『おっと、来たね』

尾にが大漁に攻めてきたのでたつみやは後ろに下がっておるは前に出た

『ハイスラア！！』

開幕のハイスラで一匹仕留めた俺はその陰から攻撃しかけてきた汚い鳥の残劇を華麗なバックステップで交わした

『俺はこのままタイムアップでもいいんだが？』

と挑発してやると軽々と乗ってくる馬鹿が大量にいた

『ヨミヨミですよ？おもえ達の攻撃は』

と追撃の長髪で奴らの怒りは有頂天に達した 頭がヒットした状態で見えてなかったんだろうな 龍宮の銃撃を食らって数匹HPに帰ることになった

だがしかしその銃撃はちよつとばかりやりすぎてしまった感一瞬で頭を冷やしたおい達の半分が俺の足止めにもう半分がつか宮に向ってしまった

いきなり自分にタゲが剥いて焦ってる龍宮は対処できそうになくだったので

「とんずらあ!!」

普通なら着かない時間で急ぎよ龍いmやの元に駆けつけた俺は敵の猛攻を全て防いでしまった

「あ……」

普通なら助からないところを助けられてほうけているスナイパーがいた!!

「辰みあ 調子乗って銃撃ちまくった結果がこれ もう少しタゲこおう慮して打つべきだったな まあ今回は思考のナイトがいうらからおもえ全力出していいぞ」

「……! やつと許しが出たか! 封印が解けられた!!」

そういったた宮はマシンガンタイプのエアガンを取りだしたおいイ……こんな装備用意してるとか流石龍宮は格が違ったというか鬼なった

バリバリバリバリッ!

「ハハハハ!!」

全力出せる反動でたつみあが壊れてる不具合があるんだが・早く修正されテ!!

そうこうしてるうちに敵の大半が減ってしまった感 そこでたつみーはハンドガンに持ち替えて残ったやつらを消していくんだが

「……」

おるはその中の1匹のオーラにほうとつか鬼なっていた たつみあもそいつ以外は消し終えたんだがそいつのオーラに気付いたんだらうな 射撃をやめて冷静に相手を見つめていた あいつの実力を感じ取れるやつは本能的に長寿タイプだと思った

「狐女だね…… ああいったやつは素早い攻撃が得意だから気を付け

なよ』

龍宮の助言を聞きながら前に進んだんだが奴は一向に動く気配がない；警戒しつつ距離を詰めると残り10メートルくらいだったないきなり懐に飛び込んできたくく赤いきつね

『！？バックステツポウ！！』

バックステツポで距離を開けようとしたが狐は更に距離を詰めてきた件 だがしかしこれはおるの張った罠

『ヨミヨミですよ？お前の光堂は』

突撃してきた狐の右とんファアの振り上げを下段ガードを固めることで軽々防いだおるは

『立つ身あや！』

と合図した

パン！

たつみあの放った弾丸は見事に狐女の足に当たったんだがここで攻撃をやめないのが戦士の醍醐味

『追撃のグランドヴァイパー！！』

これでダメージは更に加速した！！

見事に飛んで行った喫えんは10メートル地点で着地した まだ立ちあがるその闘志にほうとういうか鬼なったがダメージが大きかったんだろうな 足が小鹿のごとく震えているのが見えてしまった

『勝ったと思うなよ……』

とか負け惜しみ台詞を言ってきたので

『もう勝負付いてるから』

と言ってやった うなだれたまま消えていく狐女の仮面が不意に割れてしまった件

『あっ……！！』

狐女の素顔がのぞいてしまったが以外にも可愛らしい顔をしてた（リアル話）銀髪に切れ長の赤い瞳が似合う素晴らしい美少女だすばらしい

『きゃっ……！！』

顔を隠しながら消えていった狐女はこの世界で出会った中でも高確率で一番乙女だと思った

『ふう、近くに術者も鬼も見当たらないし、今回はこんなものだろう』

『思考のナイトにはこれくらいチヨロいもん　しかしあれだけの弾幕放って小遣いは大丈夫なんですかねえ？』

『実をいうとね、団体が相手だとこちらのほうが経費が浮くんだよ。ハンドガンやスナイパーライフルはどうしても一発一発の威力が小さいから術処理された特殊な弾丸が必要になるんだが、コイツの力はすごいからな。その分反動もでかいが弾は術処理されていない物でも十分だから総合的に見て安くつくんだ』

『普段からそんなの使ってるのか？』

『普段は使わないよ。パートナーが刹那だから……あ、刹那っていうのはウチのクラスの』

『あああの侍だなというか鬼だった　ここにきて二日目に切りかかれた系の話があるんだが……』

『……なんでまた』

『その日の昼にこんかと会っててよ　それで不届きものと間違われてしまった；；至高のナイトが不届きものとかかなりSYれならんで完　全　論　破してやったが』

『ああ、いつものか』

『いつものとか；勘弁して下シア；……』

『彼女は愛しのお嬢様のことになると周りがよく見えない系の不具合を抱えるからね。まあ許してやってくれ』

『仏の顔を3度という名ゼリフがあるからよ　とりあえずは許すことにした』

『ありがとう。で、話を戻すけど、彼女は前衛だがどちらかというところと攻撃に向いているからね。タゲとりができないからこちらもある程度自由に動けるようにしとかないと危ないから。だから今までは本気を出せない辛い仕事だった……』

『なるほどな 確かに侍ではタゲはとれない！とりにくい！その点ナイトはタゲとりは上手いし防御もこなせるから高確率で最強のジヨブに見える 侍は攻撃力に特化しているのでナイトに防御を任せると最強の攻撃と最高の防御が備わりより最強に見えるだろうな（確信）』

『へえ、刹那のことを評価してるんだね』

『実力的にはおもえとそう変わらにいがな 二人ともその歳でこれとかどれだけ強くなるつもりだよ……俺は今まで大してビビることはまずなかったがお前たちの将来に生まれて初めてほんの少しビビった。』

『ありがとうフロントさん。それで』

何いきなり顔近付けてきたくく龍みあ

『パートナーに選ぶならどっちがいい？』

『どちらを選ぶかと聞かれれば俺は状況によると答えるだろうな 対個人なら間違いなくせうなを選ぶが対集団ならたうと宮を選ぶだろうな』

『…フフ、そうか。じゃあこの学園で夜の警備をするときは私とのペアがほとんどだろうね』

『それは今回のことでよくわかったよくあつ宮感謝』

『どういたしまして。これからはマナと呼んでくれ。こっちのほう呼びやすいだろう？』

『じゃあマナ』

『何か用かな？フロントさん』

『【そろそろ帰りませんか？】』

『そうだね。そろそろ交代要員が来るだろうし』

とか言ったらきてしまった件 よく観たら

『瀬う「彦ではにいか』

『あれ、フロント先生？ああ、先生もこちら側でしたか』

『それはこっちのセリフなんだが？』

『いやーなんとなくそうだとは思ってたんですよ。この学校、魔法

を知ってる人が結構いますから、意外な人がこちら側だったりするんですよねえ」

「俺はえゝ流彦がこちら側だとは思ってなかった感　あまりに普通すぎるでしょう?」

「……ちよつと気にしてるんですけど、それ」

「おつとついちよつとばかり配慮が足りなかった感　俺はうまく一般人に溶け込んでるなと思っただけなんだが　ごめんあさい」

「はは、いいですよ別に。どうせ僕なんか……」

「あまりネガネガしていると余計にネガが強調されるらしいぞ? 気にしないべきそうすべき」

「まあ落ち込んでても仕方ありませんからね。とりあえず二人ともお疲れ様。後は僕に任せて今日はゆっくり休んでね。特にブロントさんは今日初めての出勤だったんでしょ?」

「ついでに言つと野宿なんですが……」

「え、それまたどうして……?」

「ブロントさんの事情説明は神の賜物といったところかな」

「なるほど……またあの学園長は」

「おいイ……先生にも言われるとかこの学園は早くも終了ですね」

「まあまあ、僕からもなんとか言っておきますよ。でも今日は我慢して下さいね」

「昔かあゝ野宿には慣れてる　テントを持っていた俺に隙はなかった!」

「ブロントさん、そろそろ行くつか」

「マナが急かしてくるので瀬流彦に別れを告げて帰途に着いた　ここにきてから一日が異常に長い不具合が生じてるんだが」

「おまけなんだが」

「ねえブロントさん」

『何か用かな？』

『なんなら私の部屋で寝させてあげてもいいよ？』

『おいイ！？年頃の娘が男連れ込むとかSYれならんしょ・折角だけど【遠慮します】』

『刹那もいるんだけどね』

『余計に危険が危ないんだが、主に俺の身の危険……』

侵入者は人工的に淘汰されるのが目に見えている（後書き）

おいィ……龍みあまでフラグ立ててくるとか……このプロントさん
絶対一級フラグ建築士だろ 汚いなさすがナイトきたない……

これでネガ侍のネガが消えればいいんですがねえ？（前書き）

ぞなむすは恥知らずの書き手だから仕事が忙しくても休憩時間に書くというわけで9話目投稿 キリが悪かったのだから短いまま投稿することになったが投稿しないよりはましだろうなとおおmった
まあ俺が思うに10話目からは多分本編に入る系の話があるので区切りがいいといえればいいんだろうな

これでネガ侍のネガが消えればいいんですがねえ？

『む……太陽がフラッシュ使えるのはずるい』

テントの間隙から卑怯な太陽がフラッシュかけてきたせいで俺の安眠がマツハなんだが；点とじゃ光を遮れない！遮りにくい！昨日は2時にネタの今日は5時に起きてしまつというある様 睡眠時間が足りず仕事が出来なくなるだろうな

『オウフ；二度寝ができないんだが』

あまりの明るさに二度寝の封印が解けられない系の不具合が生じているので力カツと起きることにした（この辺りの潔さが健康の秘訣）

軽く伸びをしてテントの外に出ると侍が刀振り回してた

『おいイ？何刀振り回してる訳？』

『うひゃあ！！？』

刀降るのに夢中で気づいてなかったんだろうな 声かけた瞬間奇声をあげだしたくくせつつな

『ブ、ブロント先生！』

『こんな朝早くから訓練かよおもえ何処まで強くなるつもりなんですかねえ？』

『いえ、私はまだ未熟者ですので……』

『「確かにな」というか鬼なるがあまり焦っても仕方がない系の話があるらしいぞ？』

『……この間先生と戦った時に思ったんです。このままではお嬢様を守れないと』

『俺も守つてやるからよ一人で背負わないべきそうすべき 守りたくて守るんじゃない守ってしまうものがナイト 時にお前はこの間のことを考えたのか？』

『守るためにお嬢様の傍にいるほうがいいというのはわかりました。そのために私が選ばれたんだというの。ですが、その……』

『なんだ恥ずかしいのか？恥ずかしがっているのはコミュニケーションもとれないだろうなと思った』

『うう、でも今更なんて言えはいいんか……』

『俺が思うにとりあえず挨拶から始めるべきだな 挨拶がきちんとできる 社交性が豊か 友達が増えて心が豊かになる 彼女ができる 逆に挨拶がきちんできな 社交性が豊かでない 友達が少なく人から無視されやすい 心が醜く顔にまで出てくる いくえ不明 ほらこんなもん』

『そう、ですね。とりあえず朝の挨拶だけでも』

『いきなり会話で盛り上がるうとするプレッシャーに比べれば挨拶するくらいちよるいもん』

『ええ、そう考えると幾分か楽になりました。ありがとうございませ。……プロント先生に会ってから教えられてばかりですね』

『そう言っで恥ずかしそうに頭を掻いているが別に恥ずかしがることはないと思った』

『お前頭悪いな先生が生徒にものを教えるのは普通だろ そもも俺のほうが人生の先輩なんですわ？お？先輩が後輩に丁寧に指導してやるのは当然だと思ったまあ一般論でね？』

『いえ、そんなことはないですよ。生徒の悩みに気付いて指導して上げられるという先生はなかなかいませんから』

この麻帆良でもと続けるせうと那に「確かになと応えてやっただここの先生は優しすぎるのが多いと思っただ 時にはきつく言っでやらないと子供は成長しないんだなあと納得が鬼なつたんだがその点煮つた先生はえごいと思っただ 生徒の嫌われ役に徹して生徒を指導する姿はまさに立派な先生だなと思っただ』

『新田先生は厳しいですけど、一部の生徒はそれが生徒を思っただことだというのを分っていますよ』

『ほうならばお前もわかっているということだな流石に刹那は格が違っただ！訓練で疲れているだろうしジューズを奢ってやろう』

つ【プロントドリンク〜メガトンパンチ味〜】

「わあい^^いただきます。「ゴクリツ」辛っ！なんですかこのジューズは!!!」

「このジューズは某黒い炭酸にシヨウガとトンガラシを配合することでパンチの利いた味に「こんなものを飲ませないでください！」オウフ・木評だった感 残すともったいないので後は俺が飲んでやる」「ゴクリツ」「あっ！」「普通に飲めるんだが？」

そう言っつてやると頬を真っ赤に染めた刹あんがそこにいた！

「おいイ？何いきなり頬染めてる訳？」

「か、間接キス……」

…気付かなかった件

「おっととちよつとわずかばかり配慮が足りなかった；h a i！！謝ります！」

「いえ、その、別に……」

顔を真っ赤にして再起不能状態に陥っているのでこれ以上の会話は無駄だろうなと思った

「とりあえず寮に帰るべきそうすべき！」

多分恥ずかしかったんだろうな顔真っ赤にしたまま首を9度盾にふった後何も言わずに寮に戻っていった

ダークパワーっぽいのはナイトが持つと光と闇が両方そなわり最強に見えるが

遂に本編に入ることになった やつとだよ(苦笑)

だいたいは原作通りに進むかもしれないが恥知らずなぞなむすはストーリーを駄目な方向に持っていく可能性があるのでこれからも注意してみるのがいいと思った

ダークパワーっぽいのはナイトが持つと光と闇が両方そなわり最強に見えるが

仕事時間になったのでニギと一緒に教室に入ろうとしたんだが恐らく忍者が罠はってたんだろうな 前方から巨大な鉄球が来たんだが俺はそれをメガトンパンチで粉碎してやった 更に至高のナイトに隠ぺいは効かなかった！鉄球の罠が囷ということを見抜いたおるは素早くバックステップで下がると俺がいた場所には大量のくなくないが刺さることになった やはり忍者だった！というか鬼なりながら教室に入っていくと追撃のくなくないが飛んできたんだが俺が指二本で止めてやるとそれを投げた長瀬とかいう忍者が関心が鬼なっていた 『おいイ？罠をかけるにしてももう少しやり方があるでしょう？黄金の鉄の塊でできたナイトだから対処できたものの先に入るのがニギだったら死んでるぞ？』

あまりに下限を知らない忍者クラスに睨みを利かせてやると顔を青くして黙るはめぬなった

『ほ、ホームルームを始めます』

空気が悪くなったのがわかったんだろうな ノギがいきなりほんムルーム初め出した

又ギがホームるんム進行している間俺は暇なんだが時折来るエバソジエリンからの鋭い視線に睨みで返してやる作業を繰り返していた そうして時間を潰しているとガララツとドアが開く音がしたので見てみるとしずんがいた

『ネギ先生、フロント先生』

『何いきなり話しかけてるわけ？』

『今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなも直ぐ準備して下さいね』
『おつととちよつとばかり忘れてた件 一時間目が身体測定になる系の話があるらしいぞ？』

『え、ここですか？わかりましたしずな先生！で、ではみなさん身体測定ですので……えと、あの、今すぐ脱いで準備して下さい！』

『おいイ……今すぐ脱げとかちよとSYれならんで抜けますね
^』

『『『『ネギ先生（ブロント先生）のエツチ~~~~ツ』』』』
『俺は関係ぬえ〜！』』

急いで出たんだがおるがエロヴァーンとか今すぐ修正されるべき
だな そうしないと俺の生活がセクハラでマツハ；；

『おいイ……もう少し考えて発言してくれませんかねえ？』
『……すみませんでした』

素っ気なく言うネギの態度に俺の怒りが有頂天になりそうだった
がそこは耐えるのが大人の醍醐味

『誠意が感じられないんですわ？お？紳士ならたとえ相手が嫌いな
相手でもミスをしたら謝るべきだと思っただまあ一般論でね？』

そう言われてハツとした又ギはこちらを向いて頭下げてきた

『ごめんなさい』

『許す』

『えっ』

『今回程度のことなら謝ったら許されるべきだと思った。ミスする
ことは人間ならよくあること それをいつまでも粘着するのは汚い
忍者のすることだからな』

『ブロント先生……』

ちよつとわずかばかり感動してしまったのかネギはおるを3回連
続見つめてきたが志向のナイトには当然のことなので自慢しにい

『でも目上の人に対するあの言葉づかいはいけないと思います』

『おいイ！？ここでそれ持ち出してくるとか……っっていうかそもも
もおるがブロント語使わないとこのSS成り立たないんです！許し
てくらふあい……』

『メタ発言は禁止ですがそう言われればそうですね……どうにかな
らないんでしょうか？』

『それはネギま×ブロント作った作者に言うべきそうすべき』

『メタは禁止と言ってるサルー！』

『すいませんでした……』

10才の少年相手にジャンピング土下座するアワレな内藤がいた
！！

『先生　！大変やー！！まき絵が………まき絵がー！』
ガララッ！！

『……何！？まき絵がどうしたの！？』

『わあ……！！』

『うおわ……！！？お前から服着ずに出てくるとか犯罪だぞリアルポリ
スに捕まりたいのか！？』

くちよとSYれならん場面移動　保健室く

『おいイ？大丈夫なんですかねえ』

『恐らく貧血ですよ。一応検査は一通りしますが多分大丈夫でしょ
う』

学園の説明の時間いたんだが麻帆良の保健室の先生は医師免許持
ってるらしい英語で言うところプロ　その判断ならば大丈夫なんだろう
なというか鬼なったが一応この目で見といたほうが安心できると思
った

『俺が思うに大事がなくてよかったな』

『そだねー大したことなくてよかった』

『昨日は暑かったからねくそのせいかも』

まけいの様子を見た俺はそう言ったんだが実は大丈夫じゃないと
感じてた　蒔絵からダークパワーが感じられる系の不具合がある件；
ちよとSYれならので他の生徒を安心させて退場させてから治療
してやるうと思っただ

『というわけでお前らは教室に戻るべき2時間目に遅れたくないな
らそうすべき』

『……はい！』

ぞろぞろ戻っていくが又ギが固まってる系の話があるんだが；

『ネギも職員室に戻って二時間目の準備しとくべきそうすべき』

『は、はい！わかりました！まき絵さんも大丈夫みたいですね！』
ちよつとわずかばかり虚勢張ってる感じがしたので俺は耳打ちして
やった

（まき絵から感じるダークパワーの心配はしないでいいぞ 俺が後
で直しとくんだが）

（！？ブロント先生治療できるんですか？）

（至高のナイトは白魔法も使いこなす そそも俺は全てのジョブ
をマスターしているのでこの程度はお手の物）

（……わかりました。頼みます）

（おるに任せることで安心したりリアル生活が認可されるからな 全
力で頼っていいぞ）

そう言っつてやると納得したんだろうなニギは職員室に戻っていつ
た。

↓安心した場面移動が認可される 学園長室↓

『おいイ？失礼するんですわ？』

『おお、ブロントさんか。どうしたんじや？』

『今日まき得が桜通りで倒れてたらしいんだが何故かダークパワー
に侵されていた この学園は結界張ってまで守りに入ってるので不
審者が入りにくい！入れない！！なのにこれは一体どういうことな
んですかねえ？』

と言っつてやると頭抱え出したくく学園長

『あゝそれは多分エヴァの仕業じゃな』

『やはり幼女だった！エバングリンのダークパワーの波長と似てた
感 ちよつとかなりお仕置きしてやったほうがいいと思った』

『そうじゃの……知らせてくれてありがとうブロントさん。エヴァ
ンジェリンを呼び出して事情を聴くとするかのう』

『それがいいと思った しかしどうしてダークパワーの持ち主が学

園の守護に回っているのか理解不能状態　ヴァナにも暗黒がいたが
守りには向いてないな』

『ああ、それはの……』

（素晴らしい説明だ素晴らしい）

『なるほどなというか鬼なった　しかし差う残とマスターは汚いな
封印解けられる約束しときながらいくえ不明とか絶対忍者だろ……』

『そこはワシにも疑問なんじゃよ。少なくとも約束を違えるような
奴ではなかったとは思っんじやがの。恐らくは身動きできない状況
にあるんじやろうな……公式には死亡したことになつとるしの』

『えっ』

『まああやつがそうそう死ぬとは思えんがの！』

またフオフオフオとか笑いだした学園長をスルーして考えたんだが

『……それでもやはり汚いと思う　約束は果たすためにするんだが
それを果たさないのは卑怯すぎるでしょう？どんな困難な状況d
もそれを打破して来るのが当然だと思つたまあ一般論でね？』

『確かにそうじゃがのう。だがもう死亡説がでて何年もたつておる。
本当に死んでおつたら今更どうしようもないじやろうし、だからこ
そエヴァはネギ君の事を襲うと思つておつたんじやが……』

『エヴァンゲリオンが何故ネギを狙うのか【興味があります】』

『こういつた呪いを解くには本人かその血縁の血液を使うのが一番
手っ取り早いからの。そもそもあやつのかけた呪いは術式もでたら
めでの。なおさらその方法でないと無理なんじやよ』

『……おもえはネギの危険が危ないとわかっていながらこの教師
にしたのかよ？』

『……封印状態のエヴァと戦わせることでネギ君には経験を積んで
欲しかったんじや。彼はサウザントマスターの息子じやからの。あ
やつの因縁を引きずるのは明確じや。それに対抗するため出来る
だけ早く力をつけてもらいたかつたんじやが……まさかエヴァがこ

の学園の生徒を襲うとは思わなんだ。彼女は基本専守防衛じゃからの。それに女子供を殺すことはないというのも大きな理由じゃ」

『吸血鬼は血を吸えば強くなるらしいぞ?』

『ネギ君を確実に仕留めるためじゃろう……一般生徒に被害が出ては流石に見過ごすわけにはイカン。ちゃんと対策を整えるつもりじゃ』

『ネギの保護もするんですかねえ?』

『それはお主に任せようと思っておるんじゃないが?至高の騎士なんじやろ?』

『お前分ってるな流石学園ちよおだと思った 思考のナイトたるおるに任せることでじゅっじゅつした先生生活が送れるのは確定的に明らか』

『頼りにしとるよ、ブロント先生』

ダークパワーっぽいのはナイトが持つと光と闇が両方そなわり最強に見えるが

タイトルが無理やりになってきた感；

お前捏造するなリアルポリスに捕まりたいのか！？（前書き）

ぞなむすは見直しせずSS投稿するんだが後から見直してみると文章がおかしかったり文脈がおかしかったりするのに気づくらしいぞ？とりあえずエヴァ編が終わった時にまとめて訂正するのであもり気にしすぎると禿げる それまでは我慢して読んでくださア；；

お前捏造するなよりアルポリスに捕まりたいのか!?

夜になったんだがおるは不良だからよ 寝ないで外出するし噂の
桜通りも見回る

二ギや他の生徒には夜に寮から出ないように言い含めてあるんだ
が万が9に出歩いている奴がいるといけないので見回りすること
になった 思考のナイトが良の守りに着いたほうがいいという意見も
あったんだが立つ身あやせつつながいるからよ 封印されてるとか
言うエヴァーージェリンも侵入できない!できにくい!!よっておる
が外を見回ること危険が危ないのを力カツと助ける確率がアツポ
するのは確定的に明らかなんだが?

『しかし吸血鬼がドレイン使えるのはずるいな 吸血鬼なら日の光
と十字架でやられるべき』

エヴァンゲリオンはハイデライトウォンカーというやつらしく
日の光でもハイにならない系の不具合があるんでそこら辺は貧弱一
般吸血鬼とは格が違うなと思った

『きゃああ!!』

何いきなり聞こえてきたくく悲鳴 誰かが襲われてしまった感
普通ならつかない時間できょうきよ駆けつけたおるが見たのは卑怯
にも女子生徒を襲ってるエヴァんじえりnだった

『おいイ!?何人襲ってる訳!?!』

駆けつけざまに直ぐさまメガトンパンチ食らわせてやろうとした
んだがヨミヨミだったんだろうな あっさり回避されてしまった件;
『フフ、来ると思っていたよブロント』さんをつけると言ってるサ
ル』すいませんでした:;:』

『おいイ?学園ちよいから注意されなかったのかよもし注意されて
てしたならお前のINTの低さが目に見えそうになる』

襲われていた女子生徒を抱えてみるとウチのクラスの宮崎だった
件 どうしてこうウチのクラスはトラブルに合いやすいんですかね

え？まったくもって理解不能状態

『フン！あいつが何を言おうが知ったことか！』

『お前頭悪いな権力者舐めてると警察に指名手配されてそのまま臭い飯くうはめになる』

『力さえ取り戻せばどうともなるわ！』

『どっちにしても今更誤ったところで時すでに時間切れ　お前メガトンパンチでボコるは……』

『む、ここで折角集めた力を使いたくはないんだが……』
『まてーっ！ん？ぼうやか、ちようどいい』

ニギが杖で飛んできたんだが；

『おいイ？おるは漁にいるように言ったんですがねえ？聞こえてなかったならその耳は意味ないな後ろから破壊してやるうか！』

『え、ぶ、ブロント先生？とそれは……宮崎さん！？それにエヴァンジェリンさんまで！』

『又ギ宮寄をたの』
『ネギ先生！そのブロント先生が吸血鬼だ！宮崎が襲われているのを見た！！』
『おいイイイイイ！？なにいきなり人に罪かぶせてる訳！？事前に罪かぶせられるとわかっていたら対処のしようもありませんがわからない場合手の打ちようがないんですわ？お？』

『な、やっぱり！ブロント先生は悪い人だったんですね！！？』

『おいイ……感違いとかちよとこれSYれならんしよ；ナイトが悪者扱いされるとか聞いたことないんで抜けますね^^；』

『逃がさないぞ！』

『ネギー！』

おっとと家具屋坂も木に香もきてしまったんだが　言いつけ守る奴はいにいのか……；

『良い所に来たな感違いしてる又ギになんか言っ』
『アスナさん、木之香さん！ブロント先生が噂の吸血鬼です！』
『ネガキャンはやめろと言ってるサル！』

『やっぱりあんた不審者だったのね！？許せない！！』

いきなり飛び蹴りかましてきたんだがナイトの反射神経はえこいからなバックステップで力カツと回避してやった

『うおわー！いきなり蹴りくれるとか犯罪だぞリアルポリスに捕まりたいのk!?!』

『宮崎さんを離しなさい！』

エヴァんじえねrが使つてた魔法の矢とか言うのに似た詠唱してきたんだが魔法は一般人にはれるとオコジョにされるのでこの場の誰にとつても地獄の宴となることは確定的に明らか

『おいやめる馬鹿どうなつても知らんぞ！』

とおるはポケットに入つてた小銭を指ではじいて攻撃 詠唱を阻止してやった

『うわっ！』

『!?!?ネギ!』

二人とも焦っているがもう駄目俺の怒りが有頂天になった

『ちよつと待ってーな二人とも!』

と思つたら此のかが声上げてきたので収めることになった やはりこの科は一級癒し系だなと改めて感心が鬼なつた

『ブロント先生が吸血鬼なわけないやん！吸血鬼つてあれやる？日光とかに弱いんやる？やつたら昼間に授業なんか出来るはずあらへんやん！それに桜通りの吸血鬼つて春休みからある噂やで？ブロント先生が来た時期と合わへんやん！もうちよつと冷静になつてーや!』

吸血鬼疑惑であわやおるはこのまま骨になるのかと思つていたが木之香の必死の弁護によつて居場所ロストを回避することができた

『うっ、確かに……』

『言われてみればそうかも……』

なんとか疑惑が解けられた！

『助かった、終わったと思つたよ やはり木之香は格が違うな 凄いなー憧れちゃうなー』

『それほどもあらへん』

『ナイト救ったのに謙虚にもそれほどでもないと言った!』

そういつてき之香の頭をなでてやるとk pのかは勝手に家来になる(確信)まあ騒動が終わってよかったんだが

『二人とも謝らなあかんえー』

『すいまえんでした; ; ;』

『ごめんあさい; ; ;』

二人揃ってジャンピング土下座するはめぬなつた

『二人とも人を信じなかつた結果がこれもう少し早く気付くべきだったな? 寛大なナイトだからよかつたものの汚い忍者だつたらおもえら今頃死んでるぞ?』

シユンとなつてるようだがもう駄目二人はそのまま土下座し続けることで許されると思つた

だがいつまでも土下座させとくわけにもいかにい系の話があるのでやめさせてやつた(この辺の心遣いが人気の秘訣かも)

『とりあえず今日は帰るべき死にたくないならそうすべき おるが送つていつてやるから』

そうして4人は変な空気を漂わせたまま料に行くことになつたんだが俺はまだ寮生活の封印が解けられていないのでまたテントで過ごすはめぬなつた; ; ;

封印が解けられた！はずなんだが；（前書き）

最近筆が乗ってる感 やはり本編に入ると違うなと思った

しかし最近ぞなむすは新たなクロス先を探しているらしいぞ？もうすでに3つほどやってるのにまだ増やすとか……自分の性分にギガトンパンチ食らわせてやりたい……

候補をあげるとするならこれ

・恋姫無双

・リリカルなのは

・ただしにかわ
FATE

リクエストがあれば書くかもしれない系の話があるので言ってみるべきそうすべき（言うだけならただ）

封印が解けられた！はずなんだが；

『衝撃のファーストブリットン！』

『うおわー！』

朝になったんだが言ったばかりで被害者出したアワレなガキ園長に
思わず怒りが有頂天になった俺はとりあえずドア破壊して入ること
にした

『おいイ？この学園内側に対する警備があまりにもザルすぐるでし
よう？早く修正されないと生徒の寿命が犯罪でマツハ！』

『むう……昨日の警告は意味をなさんかったか。余程今回に賭けて
いるのじゃな』

『どうにかしろと言ってるサル！』

『もうちよつと待ってくれんかのう？今エヴァを呼び出しておるん
での』

く卑怯な時間経過く

『おい爺、扉がないぞ……』

幼女が来たんだが扉の余りの惨状にひきつりが鬼なつてた

『おおエヴァ、やっときおったか』

『スルーか；まあいい。で、何のようだ？プロントまで』さんをつ
けると言ってるサル！』ごめんあさい……』

『おもえ自分の胸に聞いてみるよ』

『……ああ、昨日のことか』

『お前はまず謝るべきだと思ったまあ一般論でね？』

そう言つてやるとエヴァんずえりんはヤレヤレとか言い出した

『はいはいすまんすまん』

『お前絶対謝る着ないだろ……』

あまりの態度に怒りが有頂天になりかけたがそこは収めるのが

礼儀正しい対応だと思ったのでそれはおいておくことになった

『エヴァ、わしは警告したはずじゃな？これ以上一般生徒に手を出せばただでは済まさんと』

爺が初めて出した殺気に思わずビビってしまった感　やはり狸爺だった！

『ハン！こつちだつて形振り構つてられないんだ！この機を逃せば永劫封印がとかれることは無くなるんだぞ！』

『だからと言って他人を犠牲にしていけないじゃろっが！……堕ちたものだのう「闇の福音」も』

『……おい爺、貴様今なんと言った？』

『「闇の福音」も堕ちたもんだと言ったのじゃよ、エヴァ。人に、特に女子供には決して自分から手を出さない誇り高い悪だったお主がのう』

『貴様アアア！！！』

『ギガトンパンチ！メガトンパンチ！』

『ぐはあ！！』

頭がヒットしすぎた二人に思わず黄金の鉄の塊でできた拳をブチ込んでしまった

『おまえ達は少し落ち着くべきそうすべき　ヒットした頭では会話もおぼつかなくなるのは稀によくある話　そんなんじゃどちらも完』

全論　破できずリアルファイトに陥るのは目に見えてる』

『うう……そうじゃのう』

『くっ……わかったよ』

とりあえず納得が得られたので急遽話を進めてしまつことになった

『とい「あえずエヴァンジリンは一般生徒に手を出さない事が最低限必要だと思つた』

『フン、安心しろ。もう襲わんさ』

『それで信用されると思つてるお前の浅はかさは愚かしいな　卑怯な吸血鬼は直ぐ約束破るからな』

『なんだと……』

おつとと本当のことを言ったら睨まれてしまった件 だがおるの姉はもつと殺気はなってくるのでどちらかというは無問題

「だからよ襲う原因をなくしてしまえばいいんですわ？お？つまりエヴァンジェリンの大 弱 体 化をしている封印を解けられればいいのではいか？」

「それができるんだつたら苦労してないぞ……」

勝手にあきれが鬼なっているエバングェリンとかマジム力つくんでやめてもらえませんかねえ？

「ここに「いレース」という便利魔法があるんですがねえ？」

「なんじゃ、それは？」

「この魔法はステータス異常を解消してくれる魔法でこれを使えばエバングェリンの封印は解けられると思った」

「つまり解呪の魔法か……」

「界呪とはまた違うらしいぞ 敵の魔法による麻痺もうちけせる件」

「便利な魔法じゃのう」

「しかし並みの魔法じゃ無理だぞ？なんせあの馬鹿が力任せにかけたから……」

「とりあえずやってみればいいと思った」

普通ならまだ終わらない時間で詠唱を終わらせることになった

「「いレース」！」

パアアア！

ヴェアングェリンの体が魔法の光に包まれて何か腐りが壊れる系の音がしたんだが

「……成功したんですかねえ？」

あもり変化が見えずに困惑が鬼なっていると

「……変化がない」

「えっ」

「変化がない！ちつとも魔力が戻ってこんぞ！！」

そう言うエバングェリンにおけるは更に理解不能状態に陥った 手ごたえはあつたんだが

『何か他に原因があるのかもしれない。とりあえず魔法効果が消えるときの独特な音が下から一つは異常が無くなってるはずなんですか？』

『一つの魔法異常が無くなる？……まさか』

『いきなり体まさぐり始めたくく幼女。幼女といえどもう少し周りの目を気にすべきだと思った（リアル話）』

『ふう……吸血鬼化が解けたわけではなさそうだな』

『……おもえはもともと吸血鬼じゃなかったんですかねえ？』

『ああ、私は禁呪で吸血鬼になってな。それが解けたのかと思ったんだがどうやら違うようだ』

『「いレース」はランダムで一つ打ち消す系の話があるらしいぞ？』

『……それを先に言え』

『ジト目で睨まれたんだが；』

『それは知らなかったから仕方がないだろ以下レス不ひ要です』

『うゝむ、他に魔法がかかっていた覚えはないんだが……』

『本人にかけられていない魔法は打ち消せにいから多分それが原因詳しく言くと弱足化結界とか世の中には存在するらしいぞ？』

『そうはいつでもここは感知結界しか張られていないはず……まさか』

『エヴァンジェイアの視線が爺に向ったんだがそれに焦ったんだろうな。学園長はひややせかきながら否定してきた』

『そんなはずないじゃろ！そもそもそんな結界張ってたらエヴァが気付かんはずないじゃろうし！』

『怪しい……』

『世の中には電気で発動する結界があるらしいぞ。視野を広げてみるべきそうすべき』

『電気ねえ……茶々丸に調べさせるか』

『ま、待つんじゃー！』

『必死になって呼びとめてるがもう駄目エヴァンゲリンはそのまま出ていった』

『相手を舐めた結果がこれもう少し用心すべきだったな?』

『うう……どうしたもんかのう』

そのまま骨になりそうな牡蠣園長はほっとしておるも部屋を出ることにした

封印が解けられた！はずなんだが；（後書き）

封印が解けられたのかどうか！？

おるには想像できない悲しみが襲ってるんだが；（前書き）

早くに書きあげてしまったのでフライング投稿なんだが？

これからも度々フライング投稿することが稀によくあるらしいんだがぞなむすの病気だと思って温かい目で見てやるべきそうすべき

最近思ったんだがブロントさんの視点のみで地の分までブロント語になってこのSSはとてもよみにきうのではないか？

おるには想像できない悲しみが襲ってるんだが；

『それではHRを始めます』

次の日になったんだが又ギはHR始めてた 特に連絡時候はなかったようだったのでHRはすぐ終わることになったんだが

『一時限目の国語は担当の先生が風邪でお休みだそうですので、自習となります』

『やった！』 『これで×切に間に合う！』 『もうダメだと思ってました』

皆喜びが鬼なって騒いでいるので俺が注意するはめぬなった

『おいイ？静かにするべきそうすべき！もし静かにしてなくて仁田先生に怒られたらあなたたちのせいですからね？煮た先生は他のクラスには神の賜物だがこのクラスには地獄の宴だからな？』

そういつてやるとクラスは黙るはめぬなった

そのままおるは教室出たんだが

『おい』

いきなりエヴァンジェレンに話しかけられた こうも人気がある
と一人の時間もとれにい；

『何か用かな？』

おるが冷静に聞いてやると

『昨日の話なんだが…』

一瞬理解不能状態に陥ったがそこは志向のナイト

『『イレンス』の話ですかねえ？』

といつてやると

『そうだ』

とうなずくことになった

『あれから調べてみたんだが、どうやら私の封印の他に学園全域に私の力を封じ込める結界があるみたいだ』

やれやれといった感出してきた

『その学園結界は魔法より科学のほうに重点を置いてるらしい。全く魔法使いが科学の力に頼るとは……』

『なら茶々丸に頼ってるお前はどうかんだよ？調子に乗ってるからこうやって痛い目見るはめになる』

『む、うるさい』

『自分のミスを認められないアワレな吸血鬼がいた！』

『だまれ〜！』

ポカポカやってきたが痛くも痒くもない感 しばらくしてそれはおかしいと思った

『おいイ？結局封印は溶けてないんですかねえ？お前の力の無さに理解不能状態 早く説明しテ！』

『…私の力の大半を封じ込めているのは学園結界の方だな。それにサウザントマスターの呪いは予想以上にやっかいなんだ』

何急にメガネかけだしたくく幼女 これ絶対属性狙ってるだろ……
『サウザントマスターの呪いはな、本来ならば登校地獄という単一の呪いなんだが、奴が適当にかけたせいか様々な種類の呪いがかかっている状態になっているんだ。わかりやすく言うと鎖で何重にも縛られた状態だな』

『お前が壊したのはそのうちの一本というところだな。だから私の力はほとんど戻っていないんだ』

『だったら何度も「いレース」書けることでこの問題は解決ですね』

『昨日の話を聞いてなかったのか？吸血鬼化が解けてしまう可能性があるがあるといっただろ』

『……おもえは吸血鬼のままでもいいんですかねえ？』

『600年吸血鬼として生きてきたんだ。今更変わるうとは思わん。それよりも吸血鬼化が解けることで600年の歳月が一気に人間の体に押し寄せてしまう可能性がある。流石にまだ死にたくはないんでな』

『600年生きてまだ生きたいのかよ？』

『まあな……久々に面白そうな奴に出会えたんだ。ここで終わるの』

は少し惜しい』

『面白そうな奴に【興味があります】』

『フフ……お前だよ、プロント先生』

『えっ』

『お前のやることなすことすべて見ておいてやるよ。私の暇つぶしのためにな』

『おいイ……24時間監視体制とかちよとsYれならんしょ……そんなことされたら俺の寿命がストレスでマツハ……』

『ハハハ！気にすることはないさ。ただ横に立ってお前のなすことを見届ける。ただそれだけだ』

『吸血鬼はムシしてやると勝手に家来になることが証明されたな』

『だれが家来だ！』

『オウフ……』

杯キツクとか危険が危ない；黒いものがチラリと見えてしまった不具合があるんだが；

『まあそれはおいといて、だ。「イレース」という魔法が変わったことは、学園の外に出られるようになったことだけだ。ただし、学園結界の外に出れば全盛期の半分の力を出せるし、その状態であればサウザントマスターのかけた呪いの残りも解呪するのはたやすいだろう』

『学園に縛られることはなくなったのはいいが、おもえはこのまま学園を去るんですかねえ……』

『むっ……そんな寂しそうな顔をするな』

『だ 誰が寂しいって証拠だよ！？』

『大丈夫だ、少なくともお前がここにいる限り、呪いを解いても出ていくことはない。お前の道を見なければならぬからな』

『まだ3年も大半が残ってるからなここで抜けられるとクラスのみんながさみしがるのは確定的に明らか まああくまでクラスの間が悲しむのであって俺が悲しむのとは別問題以下レス不要です』

『フフ、まあそういうことにしといてやるよ』

『おいイ？あまりに舐めた態度をとると流石のナイトも怒りが有頂天になることは稀によくあるらしいからその辺にしておくべき死にたくないならそうすべき』

笑って流されてしまった件 吸血鬼のするースキルはまさに鬼の力といったところかな；

『なあ、ブロント先生？いつまでもエヴァンジェリンというのも面倒だろう？これからは私のことはエヴァでいい』

突然の申し出だが受けてやるのが大人の対応だと思った

『わかりますた！』

『それからお前が困った時は私に声をかけるよ。少しくらいは力になつてやるから……な』

そう言うエヴァはほんの少し悲しみが鬼なつちえしまっていた

どんな思いがあるのか思考のナイトでも想像がつかないんだがそれでも守つてやらないとというナイトの心を掻きたてるような表情だと思つた

おるには想像できない悲しみが襲ってるんだが；（後書き）

ブロントさんの視点ばかりだとエヴァの心情とかネギが何かしてても書けない系の不具合が生じるんだが；

お前らそれでいいのか？（前書き）

そろそろプロント語も一通り出しつくしてしまった感

文章がワンパターンになって読者が楽しめない！楽しみにくい！不具合が生じてきてしまっているんだが；

ちよつとわずかばかり耐えられないというプロンティストはこれから先読まないほうがいいだろうな 逆にその程度問題にいいというナイトはこれからも【よろしく願います】

ところで新作話なんだが「プロま」と同様にプロントさん完全一人称がいいか地の文は基本3人称がいいか選んでくらふあい

お前らそれでいいのか？

また呼び出しだよ（苦笑）

今は放課後なんだが学園両から呼び出し食らってしまった件

ここ最近あの頭見てる確率がどちらかというと高確率；まあ呼び出されてしまった者は仕方がないので学園長室へ力カツと行くことになっただが

「ん？」

またPOPしてきたくくエバ こうも遭遇率が高くては一人の間も作れない（苦笑）

「どうしてここにいますかねえ？今は一般的に言うと放課後テイクタイム いつもサボり気味なエヴァンがまだ学校にいるのはおかしいと思った」

「いや、あの爺に呼び出されてな」

「なんだお前もなのかというか鬼なった 折角なので【一緒に行きませんか？】」

「ああ、別々に行く理由もないしな」
エバが素直に了承したのに少し驚きが鬼なっちえしまったが気を取り直して二人で行くことになった。

（リアルで場面移動 学園長室）

「『ギガドリルブレイク！！』」

「『うおわー！！』」

いつもの通りドア壊して入ろうとしたんだがベアも便乗してきた件；

「お前それでいいのか？」

と俺が親拙心で言っちゃったんだが

「何いきなり話しかけてる訳？」

とか言われた 俺の怒りが有頂天になりかけたがよく観ると顔を真っ赤にしているそっぽ向いてる幼女がいた！多分ノリでやったのが恥ずかしかつたんだろうな 海苔でやってしまっただで後悔するはめぬなるのは稀によくある話

そんな幼女は掘っておくことにして早速本題に入った

『なんの用なんですかねえ？早く言うべき死にたくないならそうすべき でないと夕食作るの遅くなるんです！僕の夕食時間奪わないでください！僕が夕食食べそおかねて餓死したら早く言わなかった崖院長のせいですからね！！』

『おおおお落ち着くのじゃブロントさん！ゆゆゆすらんでくれえ！』

あまりしつこく粘着しても話が進まないのでさっさと放してやることにした

『ごほつごほつ……死ぬかと思っただわい。まあ、とりあえず用件を言つとすかのう。まずはブロントさん、寮生の説得が終わったんで今日から寮で暮らしてくれんかのう？』

『封印が解けられた！今まで雨風しのぐのが大変だった 安心できないつらい生活だった！』

『なんだお前寮にいたんじゃなかったのか？』

エヴァが疑問が鬼なっていたので説明してやった

『寮生の信頼が得られなかった 寮暮らしが出来ない！出来にくい！ 野宿（今ここ）』

『お前にしては珍しく簡潔な説明だな』

『おいイ？俺がいつわかりにくい説明したんだよ 捏造すんなよ犯罪だぞ』

『……話し続けてもいいかのう？』

『いいぞ』

『う、うむ……切り替えが早いのう（ボン）』

『切り替えたくて切り替えるんじゃない切り替わってしまうものがナイト』

『そ、そうか……で、次はエヴァなんじゃが、あれからどうじゃ？』
『あれとは？』

『ブロントさんの「イレース」をかけられてからじゃよ』

『ああ、それなら……』

幼女が説明し出したが俺には基地の情報だったので力カツとカツト！！

『なるほどのう……ではもうネギ君は襲わんと考えて良いんじゃない？』

『わざわざそんなリスクを背負う必要もなくなったからな』

『しかしのう……それでは少し困るんじゃないが』

『何が困るんだ？むしろ安心だろう』

『学園長はお前と又ギを戦わせたかった感 お前みたいない級魔法使いと戦わせることでノギの経験値は上がってしまっただろうな（確信）』

『いつ、一級魔法使い……フ、フン！要は練習台にしたかったんだろ！いくらおだてたところでやらんぞ！！』

おだてられて嬉しいのはヨミヨミですよ？と俺は思っていたんだが何急にシリアスになりだした<<gakuencho

『お主、この間警告を無視して生徒を襲ったじゃろ？その罰じゃ』
『罰だと？爺はいつからそんなに偉くなったんだ？』

一色束髪のふいんきだったので仕方なく助け舟出してやることになつた

『おいイ？よく考えてみるべき後悔したくないならそうすべき おもえが二ギと戦う 学園長に対して薄暗い所が無くなるしメギがやはり「闇の福音」は格が違った！というか鬼なる ムシしてたまに助言してやると勝手に弟子になる 「闇の福音」の後継者が誕生して世界に知れ渡る 世間が「闇の福音」はすごいなあこがれちゃうなあー状態になる 彼氏ができる 逆にミギと戦わない 学園y知うがしつこく粘着してくる 安心した学園生活が認可されない 心が狭く顔にまで出てくる いくえ不明となるのは確定的に明らか』

『なるほど……確かに悪くはないな』

ニヤリと笑う工場にちよつとわずかばかり引いたんだが；

『それに暇つぶしにもなると思うんですがねえ？』

『……そうだな。いいだろう、受けてやる』

『よし、そうと決まれば早速打ち合わせじゃ！』

あーだこーだと言い合っているんだがどう見ても悪餓鬼にしか見え
ない感

それもすぐ終わったんだがハハハと高笑いしながら出ていくえゝ
sとフォフォフォと笑う賀古延長にはちよつとかなりついていけない
と思った

お前らそれでいいのか？（後書き）

もうすぐ？エヴァ編が終わるんだがここらでいっつかい新作入れようと思った

呪いとか勘弁して下さい……（前書き）

おいィ……またぞなむすの病気だよ……

なかなかエヴァ編が終わらない系の不具合が生じてるんだがあまりにおそろぐるとだれてしまう感 というわけで次からスピード早めていくことになるだろうな（リアル話？）

『……しかし俺が思うに、あいつがこんな汚いことするはずもない……しかし聞くだけ聞いてくのが上策』
あまり気にしても仕方がないので、気持ちを切り替えて引っ越し作業続けることになった

〈カカツと場面移動 女子寮〉

『あつ』

『えつ』

俺の部屋ぬる管理人室の前に来たんだが、せうてなを見かけるとなった

『【今晚は良い月夜ですね】』

『こ、こんばんはお日柄もよく?』

『おいイ……それはこんにちはだと思つた』

『え、あ……』

顔真っ赤にしてうつむきだしたくく刹あゝ コンフェに弱い不具合は修正されるべきだと思つた

『あの、どうしてここにいるんですか?』

『管理人が管理人室にいたらいけないのかよ』

『あ、いえ、この間顔合わせの時に反対が出て野宿していると聞いたのですが』

『今日許しが出たのでこれから管理人室に住むことになった』

『そうなんですか。私の部屋は管理人室の隣ですので何かあったら声をかけて下さい』

『隣だったのかというか鬼なつた 俺はナイトなので何かあったら頼るし頼られもする』

『何かあれば遠慮なく頼らせてもらいますよ』

『任せる 志向のナイトが傍にいて安心して寮生活が認可されたな』

ナイトが横にいる幸福を噛みしめることになるだろうな(予言)

『そういえばお前とタツつ宮は同質なので二人が隣ということになるな』

『そうですが……何故私が龍宮と同室だと知ってるんですか？』

srつなは疑問が鬼なつて首をかしげているんだが

『この前一緒に夜警備した時に聞いた』

『えっ』

『えっ』

『夜の警備で一緒になったんですか？』

『うむ 立つ身あはガンナータイプでナイトとの相性は最高だと思

つた』

『へえ……』

おつとと刹那んが不機嫌さ醸し出してきたんだが嗜好のナイトはそれが嫉妬からくるものだと思抜いてしまった 龍う宮のスキルばかり褒めていたのが妬ましかつたんだらうな

『せうなも侍スキルがえごいからナイトに前衛を任せることで本気を出せると思った 本気を出した時の刹那んの力は多分恐らく鬼の力といったところだらうな 強い敵たとえばNMなんかと戦うときはえsつなの力が必要だと思った』

『そ、そうですか？ありがとうございます』

嬉しそうにはにかむ刹那の笑顔は破壊力ばつ牛ンだな

『そろそろ就寝時間なので寝るべき遅刻したくないならそうすべき』

『わかりました。それではおやすみなさい』

『【おやすみなさい】』

エスなと別れ部屋に入ったんだがまだ荷物の整理をしていなかった件 最近睡眠時間がとれにくい系の話があるんだが；

ついに別視点からの封印が解けられた！本編を別視点から見ているだけなので別に見なくても特に問題はないんだがこのSSにどっぶりつかりたいなら見るべきそうすべき

戦闘シーンはカットしてあるので本編見てくらふあい 戦闘シーンがわからない！わからにくい！という不具合のある方は感想掲示板でぞなむすにそのシーンのことをいってやると返信で説明or番外で書くことになるだろうな

15話までのAnother View【Side：エヴァンジェリン】

【Side：エヴァンジェリン】

最初に見た時はただの侵入者だった。いや、違うな。間抜けな侵入者だと思っただったか。とにかく、侵入者であることには変わりない。その程度の存在だった。

初めは月の美しい夜だったから少し痛めつけてから爺に突き出してやろうと思っただ。しかし、人のことを幼女だのなんだのと挑発してきたので生かして捕らえることはやめた。

が、結果は敗北。その時出しようする全力を出した。並みの魔法使いでは凌げないほどの攻撃を加えたはずだった。なのに奴は一步も引かず正面からすべて受け止めて見せた。思えばこの時から興味がわいていたんだらうな。あのサウザントマスターでさえ私とはまともに相対しようとしなかったのに（あの時の私は封印されていなかったが）この「闇の福音」と正面から戦おうとする奴には少し感嘆したものだ。

意識を失った私が次に目を覚ましたのは学園長室だった。爺と奴が何やら話をしていたので、眠ったふりをして聞き耳を立てていた。すると聞こえてきたのは、奴が異世界からの住人だということだ。最初はバカな、と思った。確かに魔法世界というものはあるが、そこも違う世界等有るものか。だが、落ちていて考えてみれば有り得るのだ。奴の身につける伝説級の武器は私が聞いたこともないものであったし、あれだけの強さを持った戦士、いや騎士か？も聞いたことがない。そして奴が放った、私が見たこともない魔法。私の魔法と拮抗することもなく押し切った奴の魔法ははつきり言って異常だ。詠唱もせずにあれほどの魔法を放つことはこの世界では考えられない。これらの点から見て、私は奴の言うことを信じることにした。

それから話は進んでいき、奴が先生としてこの学園にとどまるこ

とになった。これは素直に嬉しいことだと思った。600年生きて大抵のことには耐性が着いてしまったが、異世界の住人と触れ合うことは滅多にないだろう。せいぜい私を楽しませる玩具になってほしいものだ。

その後忘れられていた私の治療が行われた。今更起きるのもあれなので寝た振りを続けていると、体のあちこちを触られた。しかも奴にだ。治療するためであって変態的なこととは無関係と分かっていたが、かなり恥ずかしかった。

次の日、担任の忌々しい坊やとともにやってきたのは、私のクラスの前担任になった奴だった。まあなんとなくそうなるだろうなと思ってはいたんだが、多少驚きがあった。

案の定この生徒に振り回される姿を見ることが出来たのはよかった。が、逆にこのクラスの手綱をとれたことは意外だった。坊やでもいまだ手綱をとりきれないところをとってみせるのは流石だと思ったな。

放課後、学園長から伝言があったので、折角だから話を聞くことにした。異世界というのにも、奴の存在自体にも興味があったからな。その前にこの前の借りとして一発蹴ってやったんだが、恐ろしく硬い脛に逆にこちらが痛がるはめになった。くそつ、覚えてるよ。聞いた感想はふざけるな、の一言だ。明らかにこちらの魔法よりも優れている。いや、魔法に限らず全ての戦闘技術が上回っているのだ、こちらを。世界が違う理不尽を感じたりもしたが、次の奴の一言で醒めた。

曰く「この世界は恵まれている」
なるほどな、と思った。過酷な環境で有れば有るほど人は進化を続ける。いや、人に限らず全ての生き物はそうなのだ。私も、600年の間追われ続けたからこそこれだけの強さを得られたのかもしれない。そう思うと、何故かやるせない気持ちになった。

満月の夜、もう何度目かになる吸血を行おうと桜通りに潜んでいた。最近では桜通りの吸血鬼という噂（実際にいるんだが）のおかげでやりづらくなつたものだ。爺にもくぎを刺されたしな。しかし、そこが一番いい血が吸えるのだ。多少のリスクを背負つてもやるしかなかった、計画のために。

そうして少しの間待つっていると、ちょうどよく宮崎が通りかかった。周りにも人影は見えないのでさっさと済まそうとした。が、少し焦つたせいだ。宮崎がこちらに振り向いた。吸血鬼の噂に怯えていたのだろう、私の姿を見るなり悲鳴を上げた。マズイ、このままでは人が来てしまう。そう思った私はさっさと血を吸つてしまおうとしたんだ。

だが、やはりやつは格が違った。恐ろしい速度でこちらに走ってきたと思つたらすぐさまパンチを放ってきた。事前に予測してなかつたら直撃をもらつところだった。

奴と会話しながら私はいくつも考え事をしていた。それは、奴に対する返答や計画への想い、そしてここをどう切り抜けるかということだった。魔正直に奴を相手としては無事ですむどころか、逃げ切ることもできないだろう。ここが正念場だと思つた。

しかし救いは意外なところから現れたんだ。坊やがやってきたんだ。恐らく坊やも悲鳴を聞きつけてきたんだろうが、好都合だった。傍から見ても坊やが奴のことを良く思っていないのは明らかだったからだ。だから私は奴に罪をなすりつけて戦略的撤退をしたのだ。思い通りにいったのはいいが、坊やは少しまっ直ぐすぎるな。あれでは人に騙されても文句は言えんぞ。

次の日になり私は爺に呼び出された。昨日の件で報告されたのだろうと当たりをつけて向つたんだが、扉がなかった。まさか学園長室の扉が吹き飛ばされているとは思ひもよらなかつたが、それは置いておくことになった。

そして話が始まり、爺から文句を言われた。しかし、私だつて引け

ない。もう15年もこんなところに閉じ込められているのだ。解放されたいと思うことは間違いじゃないはず。それなのに私の心情を理解せずそちら側の事情だけを押しつけてくる爺にいささか腹が立った私は一発かましてやろうと思った。けれどかまされたのは私の方だったんだ。しかもやったのはブロント先生（一応先生とつけないとうるさいからな……）。

理不尽な暴力にかつとなりかけたが奴の言い分も一理あると思いつりあえず怒りの矛を収めることにした。

その後奴の世界の魔法にどんな呪いも解く魔法があると聞き、早速試してもらった。鎖の碎ける音はしたが自分の力になんの変化もなかった。おかしいと思い失敗かと聞いたのだが、返ってきたのはランダムで一つ状態異常を消す魔法だという言葉だった。ランダムで一つ？もしかしたら私の吸血鬼化でも解けてしまったんじゃないかと焦ったよ。結局吸血鬼化が解けたわけじゃなかったがそれ以上かけてもらう気にもならなかった。今更吸血鬼から人間には戻りたくないのが本音だったからな。

とにかく、自分がどうなったのかを調べるために急いで部屋を後にした。

その後調べてみるとサウザントマスターの呪いはいくつもの呪いが重なり合ったもので得あることがわかった。本来なら投稿地獄だけで済むはずが、強引にかけたせいでこうなっただけ。あくまで推測だが。そのうちの一つ、「学園の外には出られない」という呪いが解けただけだったが、それだけでも十分だ。外に出れば少なくとも縛られはしないんだからな。

それに学園事態に巨大な結界が張られているのが茶々丸の調べで分かった。私の力の大部分を封じ込めているのもこの結界らしい。しかもこの結界は電力で動いているらしい。通りで私が気付かないわけだ。全く、魔法使いが科学に頼るとは……時代も変わったものだ。

次の日になってプロント先生に会った。「イレース」による影響と今の自分の状態を告げた。こちらの身を案じているその表情が気になったのか、それとも私が学園を出ていけると告げた時の寂しそうな表情が気になったのか。私はこいつと離れたくないと思ってしまうんだ。サウザンドマスターも私の身を案じてくれたが、結局は呪いをかけ、ほったらかしにした。でもあいつは違うような気がする。どんな状況でも、私が「助けて」といえば飛んできてくれそうな気がしたんだ。

恐らくあいつは私だけではなく誰にでも優しいんだろう。それでも、私にもその優しさが振り分けられるというのなら。奴が困った時に助けてやることもやぶさかではないと思っただんだ。

放課後になり、爺からの呼び出しがあった。プロントさんも呼び出されたらしいから昨日の一件だろうと思った。何処まで話すかを考えながら扉をぶっ壊してみた。意外に爽快だったが、少し恥ずかしかったな。

結局爺には大部分のことを話し、その上でもう坊やを襲う気がないと行ってやった。私としても坊やに手を出すことはリスクの高い賭けだったからな。坊やに手を出せば学園の正義の味方取りだけでなく、本国の立派な魔法使いまで差し向けられるかもしれない。

だというのに爺は元から私と坊やを戦わせるつもりだったらしい。ふざけるな！と思っただよ。いくらプロントさんに一級魔法使いと言われようとも、そんな踏み台になるようなまねはできない。

が、プロントさんの言葉に耳を傾けていると、坊やと戦ってみるのも面白いかと思えてきた。別に負けてやる必要はないんだ。むしろ敗北の味を教えてやるのが坊やのためになるだろう。ああいった才能のある奴は壁にぶち当たることが少ないからな。

さて、どうやって打ち負かしてやるうか。そう考えながら爺と話し合った。どんな話し合いをしたか？フッフ、それはその時になってからのお楽しみだ。

15話までのAnother View【Side…Hヴァンジンジエリン】(後書

Another Viewのタイトル募集するんだが？

ミステリー残して消えるヒキョウな生徒がいた！！（前書き）

今回短いんだが？満足できない人は「同一作者の最新小説」から「騎士・恋姫十無双」を選ぶといいらしいぞ？（宣伝）まだまだ序盤だしこれからも続くかわからんけどどうかよろしくお願いしまふ

ミステリー残して消えるヒキヨウな生徒がいた！！

朝になったんだがやはり寮生活は格が違ったというか鬼なつてた
野宿生活は野生動物には神の賜物だが俺にとつては地獄の宴だった
からな

今日も今日とて遅刻しないようにとんずら使ってたんだが学校への
未知の途中でウチのクラスの中国人に出会うことになった

「ブロント先生、おはようね」

「【おはようございます】おもえは確かウチのクラスの趙だったな
超ネ。間違えないでほしいヨ」

「おつと間違えてしまった感 だが俺が名前を間違えるのは稀に
よくあるので気にしたら禿げる」

「まあ別にいいけどネ」

「やった！許された！」

「許すついでに肉まん買っていくネ。超包子の特製肉まんヨ」

「超パオ図には一回行ったことがある件 あの時は箸が止まらない
系の不具合があつたんだが；」

「そうだったの力。じゃあおいしさは伝わってるはず。買って行くネ
！」

「朝から美味しいものが食べれるのは流石まほらといったところかな
9つでいい」

「いや、流石にそれは食べすぎ……いえ、なんでもないです。はい」

「何いきなりおとなしくなつたくくチャウ 何がどうなったのか全
く理解不能状態なんだが」

「気にしたら負けヨ、うん」

金払って肉まん受け取つたんだが話してるうちにかなり時間がた
つたんだろつな 結構ギリギリの時間になってしまった

「じゃあ俺は朝系の仕事があるのでこれで」

「お仕事ガンバてネ。ヴァナの英雄さん？」

『！？おいイ！今のは一体どういう……』
振り向いたらc i a oが消えていた件 ミステリー残して消える
とか汚いなさすがちゃおきたない！！

決闘は江波にとっては神の賜物だが又ギにとっては地獄の宴だな（前書き）

遂に「Fate/buront knight」も公開されてしまった件 興味があるなら見てみるべき暇があるならそつすべき

決闘は江波にとっては神の賜物だが又ギにとっては地獄の宴だな

『それでは、ホームルームを終わります。いいんちよさん、号令お願ひします』

規律霊の合図でHR終わったんだがこれからちよつとばかりし厄介事がある件

『おい、坊や』

『あなたは……エヴァンジェリンさん』

遂に計画が実行に移されるんだなと俺は思った

『お前に決闘を申し込む』

『えっ』

『えっ』

おつとと家具屋坂にも聞かれてしまった感 俺が思うに周囲への配慮が足りなすぎでしょう？もう少し気をつけるべきだな

『ちよ、ちよつとアンタ！決闘ってどういうことよ！！？』

『言った通りの意味だ、神楽坂アスナ。日時は大停電の日、停電と同時に開始する』

『ま、待つて下さい！なんでいきなりそんな……』

『別にいきなりというわけではない。戦う理由は互いに有るはずだ』

『エヴァンジェリンさんに有っても、僕にはありません！』

『桜通りの吸血鬼、その正体が私だと言ったら？』

『！！？』

そういえばこの間は捏造されてうやむやになってた

『やいやいやっぱりおめえがああ悪名高き「闇の福音」だな！？』

『おいイ！？オコジヨが喋ってる系の不具合があるんですが……この世界の生き物は喋るのかというか鬼なった』

『アホ、喋るわけないだろ』

『事前に喋らないとわかっていればそれなりの応答もできますがわからない場合こういう反応になるんですわ？お？そんなこともわか

らない吸血鬼はバカでFA！」

「な、なんだと〜！」

何急に牙剥いてきたくくエヴァ　だがしかし俺が頭を押さえてやるとリーチが足りずに攻撃できないはめぬなつた（新喜劇）

「ともかくオコジヨが喋るとSYれならんことになるので黙ってくらふあい（しきたり）」

「すいまえんでした；；じゃなくてだなあ！」

「その質問にはいかに、と答えてやろう下等生物」

「か、下等生物……」

深い悲しみに包まれているオコジヨがいた！！

「で、先生として止めなくていいのか？ん？」

「そ、それは……でも、学園長に報告すれば……！！！」

「もちろんそんな事をすれば誰が犠牲になるかはわかるな？」

「うつ……ならプロント先生！」

「落ち着けと言ってるサル！これは決闘であつて殺し愛ではいい！

お前はこの戦いで経験を積んどくべき死にたくないならそうすべき

「死つ……ってどういうことよ！」

「考えればわかることなんだがネギは英雄の息子なので敵ができやすい！英雄のしがらみにとらわれるのは稀によくあることだからな強くなつておくにこしたことはないんですわ？」

「だからって……そんな危険なこと……」

「じゃあいつ来るかわからない戦闘の機会を待てというのかよ　ほら見事なカウンターで返した　調子乗ってるから痛い目見る」

「そんな……僕が襲われることなんて」

「！そうよ、そもそもそんな仮定の話したってしょうがないじゃないかい！……い！……」

「……実際今回のエヴァもネギの父親がらみだつたらしいぞ？」

「『えつ』」

「そつだ。桜通りでの吸血鬼騒動も今回の決闘も全てお前の父親が元凶だ」

『どつして……』

『詳しく言うのはめんどいから省くが、サウザントマスターは私をこの地に封印し、私はそれを解きたいがためにお前の血を必要としている。そしてお前から血を吸うために生徒の血を吸い力を蓄えていたんだ』

『そんな……そんなことって……』

おつとといいすぎてしまった感 想像を絶する悲しみが又ギを襲つてるだろうな

『ちよつと待ちな！そもそもあんたは600万ドルの懸賞金が付いてた大悪党だ！封印されたって文句言えねえだろうがよ！！』

『喋るなど言ってるオコジヨ』

『ごめんあさい……』

周りの生徒に3回連続見つめられたんだが；

『まあ封印されること自体に文句は言わんさ。いつかそうなると覚悟してたからな。しかし許せんのはそのことじゃない。奴は私に3年で封印を解きに来ると約束していたのだ！それが15年待っても時に来やしない！おかげで私は15年も中学生を続けているんだぞ！！』

絵羽も相当溜まってたんだろうな 一気に爆発してしまってるんだが；

『しかもクラスの奴らは卒業すれば私のことを記憶から消されていくんだ。覚えているのは魔法関係者だけ。だが魔法関係者は私のことを嫌っているものがほとんどだ。私は友人を作ることもしないんだよ』

『だから私は解放を望む。そのためにお前に決闘を挑む。私が勝てば貴様の血をいただくぞ』

エバの決意がえごいのはわかったがあもりに悲しすぎるでしょう？このままではフレが作れずソロプレイし続けるはめぬなる

『安心するエヴァ 俺が友達になってやっからよ』

頭をなでてやると気持ちよかつたんだろうな 嬉しそうに目を細

めてきた

『……わかりました』

『ネギ！？』

『悪いのは父さんかもしれません。僕は関係ないのかもしれませんが。でも生徒が悪い子としているのを見逃すなんて僕には出来ない。それが一回の決闘で終わるのなら僕は受けるべきだと思います』

そういうニギの顔はまさしくナイトの顔だな

『ですが、僕が勝ったら悪さはやめてもらいます！いいですね！』

『フツ！よく受けたぼうや！しかし、だ。貴様の条件は飲めん！！』

『えっ、なんでですか！？』

『実際にはもう一般生徒の血を吸う必要が無くなったんだ。ならばこの条件はフェアじゃないだろう？』

『「確かになというか鬼なった それじゃ賭けは成立しない』

『そこでだ。ぼうやが私に勝てたなら私が一つ魔法を教えてやる』
『魔法を……？』

『安心しろ。この「闇の福音」が使っていた魔法の一つだ。これからのあなたの人生で役に立つだろう。まあ勝てたらだがな』

『ほう それは名案だな なら俺からも一つ魔法教えてやる ヴァナの魔法は協力だから格が違ったというか鬼なるのは確定的に明らか』

『わかりました。その条件で受けさせてもらいます』

『よし！これでいい。大停電の日が楽しみだ！』

フハハと高笑いしながら去っていったんだがこれは一種の癖なんですかねえ？

『もうあんまり日がないが作戦根っつくべき負けたくないならそうすべき エバは伊達に600年生きてないぞ』

『あの、ブロント先生なら勝てますか？』

『封印が解けてたら互角かもしれないな だが今は封印されてるか買った（余裕）』

『へえ〜エヴァンジェリンさんがどんなに強いかわからないけどプロ

ント先生も結構強いよね』

『だが俺が強いただけであつてEvaが弱いわけではないんですわ？
お？600年研鑽してきた技術力はまさに鬼の力といったところか
な』

『じゃあ僕勝てないんですか？ヤダー！』

何いきなり泣きが鬼なつてきたくくメギ

『お前にも勝機がありますん』

『どつちよ……』

『ちゃんと戦略立てれば勝てるだけの力をおもえは持つてる。しか
し俺が思うに麻帆らの住人あもりにもつよすぐるでしょう？至高の
ナイトがつかうあくしてられないとかちよとsYれならんしょ。』

『勝機が全くないわけじゃない。なら……よし！がんばるぞ！』

『その意気だべ』

『ところでブロント先生』

『何か用かな？』

『エヴァンジェリンさんがもう悪さしないならネギが決闘する必要
ないんじゃない？』

『その通りだが時すでに時間切れ。ノギは決闘受けるはめぬなつた』

『え~~~~~!!』

所詮カイ使うは雑魚狩り専門（前書き）

ブロントさんの同人誌とか誰得だよ……俺得か

ブロントさんSSで同人誌作る決意したんだが決意が萎えることは稀によくある話 また企画倒れだよ（苦笑）

この小説もそろそろ軌道に乗ってきて45000アクセスとか普通に行くし9900PVだつてとる もうすぐ第一章終わるんだがいままで【ありがとございました】これからも【よろしくお願います】

所詮カイ使うは雑魚狩り専門

『追撃のグラウンドヴァイパ!』

『おわ〜!』

所詮カイは雑魚狩り専門

俺は今アハルナの部屋に来てるんだがどうしてもカイが一番だと証明したかったらしいな　いきなり牙剥いてきたので返り討ちにしてやった

『お前はなかなかやりこんでて思わず「ほう……」というか鬼なつたが所詮はカイ使い　ソルに勝てないのはまあわかってたことだな』
『ダメージ与えておいて逃げに徹するとか……それに今のハメでしょ?　ウチの部屋じゃノーカンだから』

『限られたルールの中で勝利条件満たしただけ　ルールも有効活用できない奴は雑魚でFA』

『くやし〜!』

『悔しかったら腕磨くことだな　普段の積み重ねが生きてくるのはゲームも勉強も一緒』

『うう……』

うなだれて心なしか触覚も元気がいい・ちよつとわずかばかりやりすぎてしまったなと思った

『ハルナ〜フロント先生〜もうすぐ停電の時間ですよ〜』

台所の方で型付けしてる本屋が声かけてきた　実は夕食も作ってもらった件　嗜好のナイトである俺もこの夕飯には思わず満足した

『……今更なんだが男を部屋に入れてもいいのかよ?』

『大丈夫大丈夫!　管理人なんだし』

『管理人でも男はみんな狼という名ゼリフがあるのを知らないのかよ?』

『おやあ?　至高のナイトであるフロント先生が黄金の鉄の塊でできた自制心を発揮できないのお?』

『おつとと完 全 論 破されてしまった感 この議論は早くも終了ですね』

『まあ実際何かするようには見えませんし。不思議なことに湯江がなんか言ってるが当然のことなので聞き流した』

『そろそろ【お暇させてもらいます】』

『え〜もっ?』

『教職員は大停電の間見回りがあるんですわ?お前らは出歩かないべき教員に説教されたくなければそうすべき』

『そっか。なら仕方ないね。次は負けないわよ、ブロント先生!』

『あの、また御夕飯食べに来て下さい』

『さよならです』

3人に見送られて部屋を出た瞬間にヒキヨウな停電が始まったんだがライト装備のナイトが暗闇装備の夜に後れをとるはずがないおるはとんずらを使って普通なら付かない時間できょうきよ約束の地へ行くことになった

くカカツつと場面移動 麻帆良大橋く

『おいイ?なんでカグヤ坂がここにいるんですかねえ……?』

『思わず疑問が鬼なっちえしまったがここに華婦等坂がいるのはおかしすぎるでしょう?』

『何よ、いたら悪い?』

『どちらかというとかなり悪いな』

『ぶ、ブロント先生!アスナさんは魔法のこと知ってるので……その……』

『ほう 魔法生徒だったのか 気付かなかった件』

『いや、魔法生徒じゃないんだけど……』

『アスナさんは一般人ですよ』

『……まさかバレタノ力?』

『はい……就任初日に』

『おいイ！？初日ではれるとかちよとそれsYれならんしょ…このままではムギの寿命がオコジヨでマツハ…』

『だ、大丈夫ですよ！黙っていてもらえますから！』

『そういう問題じゃないんですわ？お？俺が思うに初日ではれるような事をしたのが問題 相手が汚い忍者じゃなくてよかつたな 汚い忍者だつたらおまえ今頃オコジヨだぞ』

『あう〜』

何いきなり涙目になってきたくくニギ

『ちよつと、やめたげなさいよ』

『ここで叱っておかないとマズイことになるだろうな（確信）』

『そもそもネギが魔法使つたのは本屋ちゃんを助けるためだったのよ！それを何も知らないで……』

『ほう それは素晴らしい行動だなすばらしい すかしそれとこれとは別問題 魔法使うにしてもそれなりの誤魔化し方があるでしょう？それでもできない奴は魔法使わないほうがいい』

『ぐっ……』

おつとと完 全 論 破してしまった感 ここでフォロー入れとくのが大人の醍醐味

『これからは気をつけることでこの問題は解決ですね 立派な魔法使いになるんだつたら人前で魔法使うことは稀によくあるらしいからな 誤魔化し方を普段から考えておくべきオコジヨになりたくなかつたらそうすべき』

『 hai!! 気をつけまうs!! 』

『……もうそろそろ始めて良いか？』

絵葉はほうつておくと勝手に話しかけてくる（寂しがり屋）

『 そうだな 1対1でいいんですかねえ？』

『 ブロントさんがそつちにまわってもいいぞ？ん？』

『 俺は審判だからよ どつちかにつくわけにはいかにいよ』

『 ブロント先生、こちらは僕とアスナさんの二人でいかせてもらえますか？』

『2対1とか……』

『へっ、いくら兄貴が天才だからって「闇の福音」相手に一人で挑むのはきつい。それに負けたら血を吸われるって話じゃねえか！だから安全マージンとらせてもらっせ！』

オコジヨがなんとか言ってるが発送が汚い忍者みたいなんだが；
『フツ、そちらが二人で来るなら……』

タン！とEvaの後ろに何かかが降りてきたんだが

『こちらも従者を使わせてもらっ』

『よろしくお願いします』

『ええ！？茶々丸さん！！？』

『茶々丸さんがエヴァンジェリンさんの従者なんですか！？』

『ハイ』

『おいイ！？茶々丸じゃにいか これはちよと戦力差がありすぎじやにいか……』

『フン、事前にどれだけの戦力を用意できるかも強さの内だ』

『……まあいいけどよ』

『・えちよ それないんですけどwwwwエヴァンジェリンだけでもきついのに従者とかwwwwww』

『おいイ……心の声が漏れてるんですが<<オコジヨ』

まあ認めざるを得ないだろうな

『決闘は2対2の勝負 どちらか一人でも致命的な致命傷を負う寸前までやるんだが判定は審判である俺がすることになるので知っておいてくらふあい では試合開始なんですわ！！』

まずrヴぁが勝つんだが一瞬の油断が命取りという名ゼリフがあるからな

見事な戦闘だ……（前書き）

やっとテストが終わったんだが追撃のレポートで俺の時間は更に加速した！今回更新出来たが来週も更新出来るとは限らないのは確定的に明らか やはり楊枝があるとストーリー物は書きづらいな 今回のそれがよくわかったよ<<テスト感謝……すると思ってる浅はかさは愚かしい

P.S. ついに東方陰陽鉄wikiにも進出することになったんだが興味があると作者：ぞなむすで調べると出てくるらしいぞ？

見事な戦闘だ……

『先攻はくれてやる！こい！』

『いきます！「契約執行90秒間」！「魔法の射手光の17矢」！
絵葉が先行譲ったので又ギが詠唱することになった

『なかなか詠唱が早いじゃないか。「魔法の射手闇の17矢」！』
エヴあも同じ魔法で対抗したんだが流石天才少年と言ったところ
かな 見事に相殺されてしまった感 貧弱一般人なら絵羽の魔法に
押されて絶望が鬼なるところを相殺で済ます二ギは格が違ったな

『いくわよ！茶々丸さん』

『はい』

一方ではカグヤ坂と茶太丸が壮絶な凸ピン合戦始めた おもえら
戦う気はあるのか；

『次はこちらからいくぞ！「氷爆」！』

『！？「風楯」！』

氷と爆風が合わさり強烈に見える「ヴあ」の魔法をムギは風の盾で
防ごうとしたんだが押し切られたんだらうな そのまま後ろに吹っ
飛ばされるはめぬなった

『うわあ！！』

『そら、まだまだいくぞ！「魔法の射手氷の29矢」！』

魔法の矢が襲いかかってきたんだが二ギは読んでたらしくしゃが
みダストで回避すると矢は橋の柱にあたって消えた

『「雷の暴風」！』

しゃがみダスト辺りから呪文詠唱してたらしく威力の高い魔法出
してきたんだが江波は『見事なカウンターだ』とか言いながら余裕
で避けてた

『「えっ」』

だがしかし射線上に家具羅坂と矢茶丸がいた系の不具合があった
のでノギは焦りが鬼なりつつ魔法をそらした

その隙に詠唱終えたエバアが一気に決めにかかった

『「氷神の戦鎚」』

『おいイ！？それはあまりにも威力が高すぎるでしょう？』

と俺は止めに入ろうとしたんだがニギが杖に乗ってなんとか避けたのだからあれがそのまま落ちると橋の寿命が衝撃でマツハぬなるので俺は破壊することにした

『生半可なナイトにはまねできないホーリー！』

ホーリーを食らった氷塊はアワレにも一撃で粉碎されることになった

『失礼します』

『えっ！？』

メギは折角避けたんだが避けた先に茶々マリが待ち構えていることになってた 家具あざかが追いかけてきてるがちよつとわずかばかり間に合わない件

『ぐっ！』

アワレにも一撃食らわせられると思ったんだがニギはなんとか下段ガード固めてたので致命的な致命傷にはならなかった

『でやああああ！！』

その一瞬の停滞でかぎゅあ坂が追いついてきたので茶々あるはそのままガードするはめぬなった ミギも魔法の射手唱え始めたんだが江波の存在を忘れてたらしく

『「魔法の射手闇の11矢」！』

『うおわ〜！』

直撃することになった しかし事前に盾張ってたんだろうな大したダメージではいらしくすぐに反撃に移った

『「魔法の射手風の7矢」』

スピード重視らしく数減らしてきたんだがそれでは当たらない！ 当たりにくい！よってエヴが体をずらしただけでよけられちえしまった

『「白き雷」！』

ニギの手から白いサンダラが放たれたんだが絵羽は「ほう……」
というか鬼なるだけでやすやすと飛んで避けた。ノギは避けられる
と思ってなかったらしく驚きが鬼なっていた。攻撃を連発すれば当
たると思っている浅はかさは愚かしいな。経験が浅いのはバレバレ
なんですか？

同時にカグヤ坂も契約執行きえりたんだろうなネギのところに戻
っていったので茶々まも絵羽のところに戻ることになった

『マスター、もうそろそろ……』

『むっ、もうそんな時間か』

おつととそろそろ時間だな。俺が思うに集合時間がちよつとわず
かばかり遅かったんだがもすかしたらエヴあは制限時間つきで決闘
することでハンデつけてるんじゃないですかねえ？ドジ娘だという
可能性も否定できない不具合があるんだが

『さあそろそろ決着をつけようじゃないか！』

『「契約執行30秒間」！』

『はああ！』

『くっ！』

神楽あさかの身体能力が高すぎるんだが；江波の従者である茶々
まりと互角とか聞いたことないんで修正されますね^^；

『坊や！お前の使える最高の魔法でこい！』

『なら、これしかない！「雷の暴風」！』

『「闇の吹雪」』

『えっ』

『フフ』

おいイ！？同種の魔法で打ち合うとか絶対負けず嫌いだろ……

『いきますー！』

『こい！』

バチバチバチィ！

どつちも威力が同じらしく拮抗することになった

『ぐぐっ……はあー！』

『くう……やあ！』

ありつたけの力を込めるのも同時でエネルギーの上昇に耐えられず見事な爆発が起こった

二人ともノーダメージだったんだが優劣は確定的に明らか

『あ……う……』

『私の勝ちだな』

爆発の瞬間にエヴァはカカッと距離を詰め魔法で作りだした剣を又ギの首に突き付けることになった

吸血鬼騒動もシャッタアウトされた(前書き)

第一部完！した訳なんでしばらく更新が停止する(予定) テスト期間中もそうだったが東方陰陽鉄 Wiki でSS書いてるか恋姫のほうを書くことになるだろうな だがしかし予定が狂うことは稀によくある話なのであまり気にすると禿げる ではゲーム制作と同人誌作る系の仕事があるからこれで

吸血鬼騒動もシャッターアウトされた

『キャンー!』

何いきなりビリッときた<<エバ

『つつ、封印が戻ったのか』

『大丈夫ですか?』

『いつもどおりに戻っただけだ。それよりも自分の身を心配したらどうだ?』

『つつ……』

おっととネギは負けてしまったので吸血されることになる

『ちょっと、やめたげなさいよ!』

『何を言ってる、こいつは賭けに負けたんだ』

『だからって……』

『文句を言うなと言ってるサル!ネギは負ければ吸血されること知ってて決闘受けたんですわ?お?文句言うやつはただっ子でFA!』

『いいんです、アスナさん。僕が賭けに負けた。それだけのことなんです』

『ネギ……』

『ここでそれを捻じ曲げてしまつたら、僕の言葉に重みが無くなつてしまう。重みのない言葉なんて誰も聞いちゃくれません』

『ネギはわかつてるな 約束守らない奴は信用されない!されにくい!それでは教師として失格ぬるので約束守るのが大人の醍醐味』
俺が思うにネギは子供っぽいところもあるが10才にしては大人びているのでそれくらいチヨロいもん

『安心しろ。何も死ぬまで吸うつもりはない。せいぜい貧血起こす程度だ』

『絵羽もこういつているのでお前ら全力で安心していいぞ』

ちよっとわずかばかり青いか鬼なってるがこういうのは力カツ

と済ませたほうがいい（リアル話）

『じゃあ早速……』

『え、ちょ、心の準備が……』

カプ

チューチュー

『あ、あ、あつう』

ボタン！

『ネ、ネギ〜！！？』

『おいイ！？ちょっと吸いすぎじゃないですかねえ？このままでは又ギの寿命が貧血でマツハなんだが；』

マギに駆け寄ったんだが顔色が青ざめてる通り越して真っ白な不具合が生じてる；

『ちゃんと加減してるさ』

かなり高確率で不安なんだが；

『ふう、全快とはいかないがある程度封印は解けたようだな』

『まだ完全じゃないんですかねえ？』

『まあな。だが焦ることもない。時間はたっぷりあるんだからな』

アハハハと笑いだす江波の機嫌は有頂天と言ったところかな

『ともかく俺はミギを保健室に運ぶ系の仕事があるんでこれで』

おれはそのままノギをかついで保健室に行くことにした

俺はああこれでやっと吸血鬼騒動が終わったんだなと感慨にふけることになった

吸血鬼騒動もシャッターアウトされた（後書き）

第二部「修学旅行妨害する奴は心が醜い」（予告）

吸血鬼騒動が無事に終わって一安心してたら何急にPOPしてきた

<< 修学旅行

こつも行事が多くてはフリーの時間も作れないが何を言ってももう駄目 そのままナイトは過労で骨になる

折角なので楽しもうと思つてたがきたない影が見え隠れし出したので俺はきょうきょハイスラを使つて撃退することになるだろうな

予告はかなり高確率で変更になるだろうな

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、露骨な前編、(前書き

大して長くもないくせに前後編に分けるアワレなぞなむすがいた！
！h a i！今同人誌とかでこっちに頭回らないんです！勘弁して下さいア……

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、露骨な前編、

『おいイ？今週末空いてますかねえ？』

『ええ、空いてますけど』

『じゃあ【お茶でもしに行きませんか？】』

『いいですよ』

今週末に休みが取れることになったので前から決めてたしうゝな
とのお茶をしに行こうと思った

当日は絶交の御出掛日和だったんだが一日しか休みが無いのであ
もりつかれないスケジュールにすることになった 具体的に言うと
2りで散歩 喫茶店で食事 ショッピング レストランで食事 解
散（先に言っておくがホテルへ直行とかコリブリなネタは無いか
ら）

ということでもまず2りで散歩することにした

『ブロント先生は学校に慣れましたか？』

『俺の社交性はA+といったところなので俺が寮に泊まるころには
もう慣れてた まあちよつとわずかばかり問題児がいたんだがそれ
もちよと前に解決した俺に隙はなかった』

『それはよかった。ここつて結構個性的な子たちが多くて馴染めな
い人がよくいるんですよ』

『「確かになというか鬼なるが大人の俺から見ればぜいいんかわ
いいものだな 俺が頭やってた喧嘩チーム〜D R A K〜じゃリアル
バリスタが日常ちゃ飯事だった件』

『え？ブロント先生つて不良だったんですか？』

『俺は不良だったからよ北海道の不良まとめ上げたりするし過度な
不良行為は取り締まったりしてた 青年時代に不良行為に走るのは
いいがそれなりのやり方があるでしょう？先生に怒られるくらいな
らまだいいがリアルポリスに追われるはめになるほど悪事を働くの
は不良ではなく犯罪者よつて俺がまとめ上げ未然にそれを防ぐこと

で不良も貧弱一般人も安心できるのは確定的に明らか』

『あえて不良のトップに立つことで逆に犯罪を防止するんですか…
…すばらしいことですね』

『それほどでもない』

そのまま雑談しながら街まわってたんだがチンピラがウチのクラ
スの伊豆見と大子オチに絡んでるのが見えた

『私達急いでるんで』

『いいじゃんよ〜ちよつとだけ、ね？』

『おいイ？ウチの生徒に何してるんですかねえ？』

あもりにも目に余る行為だったのでおれがきょうきよ助けに入っ
たんだが

『あ？なんだてめえ』きた！ブロント先生きた！』

『メイン盾きた！』

『『これで助かる！！』』

と大歓迎状態だった

『何してるか聞いてるんですわ？お？』

『何ってナンパしてんだよ。見てわかんねえですかあ？』

『ナンパは女性を誘うことなんだが一度断られたら潔く引くのが大
人の醍醐味 お前らナンパやるのはいいがそれなりのやり方がある
でしょう？そんな乱暴にやってる時点でリアルポリスに追われるは
めになる それともお前らには嫌がつてるこいつらが見えませんか
？見えないんだったらその目は意味ないな後ろから破壊してやろう
か？』

と注意してやったんだが

『ああん？てめえうざいな先公のくせによ』

『そんなやつぶっ飛ばしてやれよ』

『へへ、それもそうだな。おい！俺はこれでも空手二段だぜ？怪我
したくなかったらさっさと消えな！！』

と息巻いてきたので雷属性の左をヒットさせてやって

『口で語るひまがあるなら手を出すべきだったな』

と言つてKOした　すると泉と大胡おうちが

『ブロント先生、助かりました!』

『助かった〜終わつたかと思つたわ』

と先程の恐怖を忘れて俺の元によつてきたが流石にのされてる奴らが可哀そうだったので救急車を呼んでやつた（この辺りの気配りが人気の秘訣かも）

『おもえら大丈夫だったか?』

『大丈夫です。ヒーローは遅れてやつてくるものだなとわかりました……』

『ホンマ怖かつたわ……』

『おつとと落ち着くべきそうすべき』

うずみと大耕地がおるの胸で泣きだしたんだがこれを黙って受け入れてやつた　そのまま俺は二人の頭を撫でてやることになった

『俺は不良だからよかなり高確率で絡まれるしそれが怖いとも思わないがお前らはそんなことに耐性がない貧弱一般人　よつて想像を絶する恐怖がおもえらを襲つただろうが嗜好のナイトが傍についてるからお前ら全力で泣いていいぞ』

それからしばらくの間2りに泣かれることになった

（露骨な時間経過だ……）

『落ち着いたか?』

『ha , hai!』

『いきなり泣いちゃつてすいませんでした』

『おつとと謝る必要はない　これくらい教師として当たり前のことお前からこれからも全力で頼つていいぞ』

『か、かつこいいタル』

2りが憧れてたがまれによくあることなので俺は自慢しない

そして疲れてたみたいだったのでジューズを奢つてやつたところ2りは霊を言つて帰ることになった

『流石ですねフロント先生』

『それほどでもない』

『謙虚ですね。憧れてしまいます』

『これくらい一級好意気指導員ならチヨロいもん アワレな不良はギガトンパンチで黙るはめぬなる』

助けたくて助けるんじゃない助けてしまつものがナイト

『もうそろおる昼時なので世界樹前の喫茶店に行くのがいいと思つた あのあたりの店は安くてうまいので評判がいい学生からよく利用される』

『では、そこに行きましようか』

何いきなり腕組んできたくくしずな こんなところをあざくらに目撃されると捏造さるるはめぬなるのでやめてもらえませんかねえ；

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、露骨な前編、(後書

修学旅行編に入ったんだがまだ修学旅行になんも関係ない不具合；

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、見事な中編、（前書き

最近普通の小説書いてたらプロント語が使えなくなってきた件 不
自然なところがあれば言ってお下しア……

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな。見事な中編。

『おいしかったですね』

『これはチエックすることで今後も使えるようにしておくべきだと思っただ』

俺たちは喫茶店で食事したんだがあまりにもレベル高すぎるでしょ？

『次はショッピングに行く系の計画があるんだが俺は麻帆良に来て魔が無いので案内を頼むんですわ？』

『ショッピングでしたら麻帆良ストリートにいい店がたくさんありますよ』

『なら言ってみるべきそうすべき』

（見事な場面移動 麻帆良ストリート）

『ほう……』

見事な品揃えだと感心するがどこもおかしくはないな

『何か買いたいものがあるんですか？』

『俺が思うに腕時計が必要だと思った。「確かに今は携帯電話で確認できますが電源が切れた場合時間がわからない！わかりにくい！不具合が生じるんだが腕時計を持っていることでこの問題は解決ですね』

『じゃあまず時計屋に行きましょうか』

俺たちは徒刑屋に行くことになったんだが

『おいイ？見るからに高そうなんだが？俺の給料が値段でマツハになりそうなんだが。』

『それなりに安い物もあるから大丈夫ですよ。教師は身なりも大事ですからあまり適当な時計を着けてる訳にも行きませんし』

『教師はいろいろと大変なんだな 今回のもそれがよくわかったよ』

<<時計感謝

いつまでもビビッても仕方がないので力カツつと入ることにした
『おいイ……』

外見通りの店だったよ（苦笑）桁が9桁いくとか絶対この店学生
向けじゃないだろ……汚いなさすが高級店きたない

『あ、ブロントさん。これなんてどうです？』

『ほうおまえわかってるようだな光属性が使い手のナイトにダーク
パワーっぽい黒が似合うのは確定的にあきら……おいイ！！？ちよ
つとわずかばかり高すぎるでしょう？いくら俺の月給が99万でも
フケタは買えにい……』

『ブロントさん、初任給で99万も貰ってるんですか……？』

『いくらか仕事を兼任しているので当然だと思った』

夜間警備と護衛は危険手当も含まれているらしい（リアル話）

『とにかくもう少し安いのにするべき借金したくないのでそうすべ
き』

『うーん……これなんてどうですか？』

『装飾が多すぎるんだが？見辛い時計とか聞いたことないんで抜け
ますね^^』

『じゃあこれは？』

『pink色とかちよとsYれならんしょ；もう少しまともな選
ぶ着ないのか』

『ん……』

俺も見てみることにしたんだが何急にPOPしてきた<<セール
一体何なのかと見てみると2つセットで9万のペアウォッチだっ
た件

『これなんてどうですかねえ？デザインも盾っぽくナイトの俺には
ぴったりなんだが？』

『いいですね。黒と白の2色ありますし』

『よし』

店員を呼んでショーケースの中を指さして言うと中の時計出して

きたのでそのまま金を払って買うことになった

『満足なんだが？』

『よかったですね』

これで時間間違えることはないだろうな（フラグ）

『しずあん』

『何か用ですか？』

『1個やる』

『えっ』

『白い方をやるんだが？俺が見たところお前も時計装備してない系の不具合があるので俺がプレゼントするます！！』

『でも……』

『俺は一つで十分だし1個しまっておくことになるだろうな。しまつちゃうくらいならいさずなが使ったほうがいいと思ったまあ一般論でね？だから遠慮せず受け取るべきそうすべき』

『…はい、わかりました。ありがたく頂きますね』

その時のしずなの微笑みはA+といったところかな。流石のナイトもちよつとわずかばかり照れてしまう系の話があった；

『お。俺は思考のナイトだからよ余ったドロップは人にやるし霊を言われても自慢しない！』

『くすっ、わかってますよ』

『おいイ！？人のこと笑うとか犯罪だぞリアルポリスに捕まりたいのかあ！？』

『さあ次は服を見に行きましょうか』

『また無視だよ（泣）』

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、卑怯な後編、(前書き

もう前書き書くことがありまへん……

それでも俺は書き続けるだろうな

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、卑怯な後編、

『あくんばい』

『乾杯』

チン！

あの後含みに行ったんだが結局いいのがなくウインドウショッピングになってしまった。そこで当初の予定どおりレストランでディナーすることになった。

『しかし夜景の見えるレストランとか贅沢すぎでしょう？この学園都市設備揃いすぎだろ……』

『実際使うのは学園都市で働く大人たちがほとんどなんですけど、たまに生徒も使ってるみたいですよ』

『おいイ…背伸びし過ぎではいいか？』

『子供の内はそんなものですよ』

『そういうもんですかねえ……』

『今日はありがとうございました。すごく楽しかったです』

『俺も楽しかったんだが？』

『また今度おかえししないといけませんね』

『前にスーツ作ってもらった時のお礼だからお返しとか不ひ要です』
『時計までもらいましたから』

腕につけてる時計撫でながらしずなが言ったんだが

『残された時計を生かしただけ。お前全力で気にしなくていいぞ』

『気にします。まあ私の事を助けると思って待っていてくださいな』

『お前それでいいのか……』

それから俺たちは食事しながら色々話したんだがもう時間になった
『家まで送るぞ』

『いえ、大丈夫です。そこまで迷惑かける訳には』

『ここ最近物騒だからよ。夜道には騎士をつけるべきそうすべき
騎士をつける。安心して帰れる。心が豊かなので性格もいい。彼氏

ができる 逆に騎士をつけない 不審者に襲われる可能背がアツポ

心が狭く顔にまで出てくる いくえ不明 ほらこんなもん』

『ふふ、わかりました。送ってもらえますか？』

『hai!送ります!!』

俺はしずなんを送ることになった

く露骨な場面移動 しうゝなの家く

『ありがとうございます』

『俺は思考のナイトだから霊を言われても自慢しない』

『また今度誘ってくださいね』

微笑みながら言う静なに俺は

『いぞ』

と言ってやった(この辺りの気配りが人気の秘訣かも)

『ではさようなら』

『さようなら』

家の中に入っていくいずなの後ろ姿に至高の淑女だったな

俺はしずなんとお茶しに行くことで狩りを返すだろうな、卑怯な後編、(後書き

最後の方ちょっとわずかばかり面倒だった件　やはり幕間はやるべきではないと思った(リアル話)

グラットンスウィフトでバラバラに切り裂いてやるつか!?(前書き)

先頭描写はなれないんだが…っていつかこのSS主眼を先頭においてない系の話が(r y

グラットンスウィフトでバラバラに切り裂いてやるうか!?

『また呼び出しだよ(疲)』

『まあそう言わんでくれ』

俺は授業も終わって部屋で休もうと思ってたんだが形態が急になりだしたのでカカツと電話に出ると『おうわしじゃわしわし』とかわしわし詐欺してきたので無言で切ってやったんだが諦めきれなかったんだろくな 粘着してきた汚い詐欺を言いまかしてやるうともう一度出たら『わしじゃ!近衛門じゃ!』とか言ってきたので話を聞いてやることにした

聞けば寂しかったらしく悪戯してやるうとか思ったんだろくな 詐欺電話かけてきたが下段ガードを固めた俺に隙は無かった アワレにも電話切られるはめになったがじゅ延長が焦って電話かけ直してきたがもう駄目学園町はそのまま骨になる

そのまま学園チウを無視してやると何いきなり来たくくメール 送り主は江波だったんだが卑怯な岳園長が頼んだらしく学区園長の洋犬とえヴあの小言が書いてあった なんでも魔法先生が都合付く日が今日らしく俺の顔合わせしたいそうだ

ならばと俺は装備固めて世界樹前に行くことになった

『この学園にこんな魔法先生と生徒がいたとは知らなかったんだが?』

『まあそうじゃろくな。これだけ集めるのに苦労したんじゃぞ?先生の技能、魔法使いの技能、それに人格の揃ったこれ以上ない者達じゃて。各々の名前は後で聞いてもらうとして、まずはブロントさん。自己紹介をしてくれんかのう(チラ)』

『俺はブロント謙虚だからさん付でいい 【よろしくお願いします】』

『……おいイ?』

『何いきなり睨んできてる訳くくほぼぜいいん お前らいきなり睨

まれる奴の気持ち考えたことありますか？マジぶん殴りたくなるほどムカつくんで止めてもらえませんかねえ？」

「やめんかお主ら。すまんのブロントさん、皆心配なんじゃよ」

「許すぞ」「確かに俺はヴァナでは古代からのナイトだがここでは新参だからな 新参が歓迎されないのは稀によくある話（DRACK話）だから仏の顔を三度と言う名ゼリフに従って許す」

「ナイトは心が広大なね。やはりナイトじゃないと駄目か」

たつみやが尊敬のまあざしで三回連続見つめてきた

「辰巳あはわかってるようだな後でジューズを奢ってやろう 俺は優しいから他のやつらにも伝えてやるべき」

「すごいなーあこがれちゃうなー」

切なが懂れてきたが俺は慣れてるから自慢しない（謙虚）

「で、じゃ。今回来てもらったのは顔合わせ以外にもブロントさんの実力を見せてもらいたいんじゃないじゃよ。模擬戦という形だな」

「俺の実力を知りたいならそれが一番だろうな 俺は誰と戦えばいいんですかねえ？」

「私がお相手しましょう」

刀持ってるやつがそう言うてきたんだが

「チえんジで」

「な！？」

「あの、ブロントさん」

「何か用かな？<<せうてな」

「この人は葛葉刀子先生といって、この学園でも有数の使い手ですよ？私の剣の師匠でもありますし」

「「確かにこいつはせつつなより強いだろうな だがしかし俺は夕あきミチと戦いたんですわ？お？」

「えっ？ぼくかい？」

「俺が思っにおもえが一番高確率で最強だろうな 別に俺はバトルマニアという訳ではない ただ真の男は思わず強い男と戦ってしまふ真の男だからもてるという事実」

『……ご指名とあらばしかたありませんね。ここは譲りましょう。ちよつとわずかばかり怒りが鬼なつてたがここで引く唐子はさすが大人だな』

『うーん……ぼくもやってみたかったしね。いいですか？学園長』

『うむ、いいじやろ。早速位置についてくれんか』

柿園長に言われて俺たちは力カツと位置に着くことになった

『準備はいいかの？』

『はい』

『いいぞ』

『では始め！！』

【Side：龍宮】

さて、あの時見事に前衛を務めたブロントさんの実力がすべて見られるだろうか？

『先手はやるんだが？』

『じゃあ遠慮なく』

先手を譲られた高畑先生は早速「居合い拳」の構えに入った。ポケットに入れた手を目に見えない早さで出し入れすることで衝撃を飛ばす高畑先生の得意技だ。

さあ、果たしてブロントさんはどう対応するのか……

ガン！！

『むっ』

『下段ガードを固めた俺に隙はなかった』

ふむ、盾で全て防ぐとは……結構な衝撃のはずなんだけどね。

『……これならどうかかな？』

高畑先生の体が少し前に傾く。本格的な構成に入るつもりだろう。ガガガガガン！！

『ダメージをいくら積み重ねてもすぐ回復できるんだが？本気で来るべき死にたくないならそうすべき』

流石ブロントさんは格が違った！いくら高畑先生が居合い拳を撃

つたところで相手にならない事が証明されてしまったね。

『いや〜……結構威力あると思うんだけどね』

『直接当たると流石のナイトも結構ダメージ受けるが盾で防ぐとほとんどダメージが無い件』

『そうか、ならもうちよつと本気で行くよ』

そう言っただけで高畑先生は右手と左手にそれぞれ気と魔力を集め出した。あれは究極技法「咸卦法」だ。もう使うとは余裕がないみたいだな。

『生半可なナイトにはまねできないホーリー!!』

『!?!?!?!?!』

ブロントさんの右手から放たれた白の光が高畑先生を襲う。が、間一髪でかわしたみたいだ。光はそのまま飛んでいき地面に当たると同時に炸裂した。

『うわあ!?!?!』

私は情けない悲鳴をあげてしまった。衝撃は凄まじく、ちゃんと踏ん張っていないと吹き飛ばされそうなほどであった。

爆風が過ぎ去ったあと、光の直撃した地面を見ると、

『……………はは』

大きな半径10mのクレーターが出来ていた。ブロントさんが魔法を使えるのにも驚いたがたつたあれだけの詠唱で(そもそもあれは詠唱と言えるのか?)あれだけの破壊力を秘めていたことにも驚愕を禁じえなかった。

『危なかった。あんなのまともに受けていたらひとたまりもないよ』

『お前が何かしそつたのでとりあえず撃つてみたんだが力加減を間違えてしまった感 次からは気をつけるだろうな』

そう言っただけで話してる間にも高畑先生は咸卦法を完成させたようだ。ブロント先生も見たかったのかわざと見逃していた。

『いくぞ』

『いくよ』

二人がとつた行動は対照的だった。高畑先生は後ろに飛び、ブロン

ントさんは前に駆けた。当然ブロントさんの方が早く一気に距離が詰まる。

高畑先生も「居合い拳」で牽制するが盾を構えたブロントさんには通らない。

「ハイスラア！！」

ブロントさんの剣が高畑先生の左上から振り下ろされる。高畑先生は更に後ろに飛ぶことで回避する。

そのまま後ろの壁を蹴り宙に舞った。

「豪殺 居合い拳！！」

「バックステツポウ！！」

読んでいたブロントさんはあらかじめ制動をかけ、後ろに一気に飛んだ。

「フラツシュ！」

突然視界が白に染まった。強い光に目が焼かれ、何も見えなくなってしまった。ブロントさんが飛び上がったのだろう、タツという音が耳に届いた。

「グラットンスイフト！」

剣が空を裂く音が聞こえる。かなり距離が離れているのに聞こえる音が、斬撃のすさまじさを物語っていた。

視界が回復した時、高畑先生はスーツを裂かれ、ブロント先生は頬に血をにじませながら地面に立っていた。どうやら紙一重でかわしたらしい。

「……久々に燃えてきたよ」

「同感なんだが？」

そう言って笑い合う二人はどう見てもバトルマニアだったよ。

その後も十分以上二人の試合は続いた。ブロントさんが右から切り上げればその剣に乗り高畑先生は飛び上がる。再度「豪殺 居合い拳」を放つがブロントさんは盾で防ぎきる。ブロントさんが受けたダメージを魔法で回復しようとするれば「居合い拳」で牽制する。

永遠に続くかと思われた二人の戦いもついに決着を見ることにな

った。ブロントさんが手に持つ剣を投げたんだ。

一直線に飛ぶ剣を高畑先生はしゃがむことで回避するがブロントさんも目前に迫っていた。しかし剣を手放したブロントさんは徒手で挑むしかない。そう思った高畑先生の意識は自然剣を握っていた手に向けられた。

それがブロントさんのしかけた罠だった。

ブロントさんは盾を構えそのままチャージをした。後に聞いたところによるとシールドバッシュという技らしい。

不意をつかれた高畑先生はもろにその攻撃を受けてしまい、体の硬直を余儀なくされた。それを好機と見たブロントさんは光の翼をばばたかせ飛翔、壁にぶつかって跳んできた剣をつかんだ。

『ウリエルブレード!!』

白い光を纏って振り下ろされた剣は動けない高畑先生に直撃する。途端、剣からあふれ出した力が光の柱となって立ち昇っていった。

それは戦いというにはあまりに綺麗な光景だったよ。

グラットンスイフトでバラバラに切り裂いてやるうか!?(後書き)

実は今回の銭湯ウリエルブレードが書きたかったただけだったりする
muggeのフロントさんウリエルブレードあもりにも素敵すぎ
でしょっ?..

こつも人気があつては一人の時間も取れない(前書き)

最近スランプなんだが；普通の小説書いてるとプロント語が使えなくなる事が稀によくあるらしい 陰陽鉄SSを見て勉強してるんだがどうにもプロント語が使いづらくなってる不具合があるんだが；
；普通の小説は会話文中に動作表現がぼこじゃかあるんだがこのS
Sでは基本が会話文になっている やはりここはちよくちよく動作
表現入れるべきなのか……？ 「俺これでいいのか？」と疑問が鬼
なっているので答えてくだしア……；

「こつも人気があつては一人の時間も取れない」

「強いのがブロントさんは」

「そうですね。最後の方は僕も本気でいったんですが……」

「俺も本気出してなかったがかなりヤバかった。戦闘はやはり一瞬の油断が命取りになるな今回のでそれがよくわかったよ。タカムチ感謝」

「タカモチあもりにも強すぎるでしょう？最初から全力出されてたら俺も全力出すはめになつてた（リアル話）」

「高畑先生よりも強いなんて……」

「凄く頼りになりそう……」

「ナイトの強さにみんなが憧れ出したが俺は慣れてるので自慢しない」

「しかし信用できるのでしょうか……」

「やはり危険では……」

「とか言ってるやつもいるがネガキャンされたところで学園ちよいのナイトへの信頼度は揺るがないだろうな」

「ブロントさんもこれだけ強いなら一人で夜の警備に出てもらつても大丈夫そうなの」

「学園長、流石にそれはまずいですよ。万が一のこともありますから……」

「俺もtsかみちと同意見なんだが？」
「確かにナイトは高確率で最強のジョブだが1りでは敵を防げない！防ぎにくい！だから2り一組で警備するのが最善」

「それもそうじゃな……今まで組んだことがあるのは誰だったかの？」

「辰巳あと伊n集院とえる彦だな」

「ふむ……ブロントさん、固定で組みたい人はおらんか？」

「お待ちください」

「何いきなり主張し出したくくガンドウ」
「俺がここに来てすぐに」

会ってたんだが会う度に睨まれてた

「学園長、彼を信用し過ぎではありませんか？」

「ガンドルフイーニ君は信用できんかの？」

「はつきり言って信用できません。ある日突然現れて、しかも高畑先生よりも実力者。よからぬことを企んでいても不思議ではありません」

「おいイ？お前勝手に企んでる扱いされた奴の気持ち考えたことありますか？マジでぶん殴りたくなるほどむかつくんで止めてもらえませんかねえ……？事前に悪者扱いされるとわかっていれば反論も出来ませんがわからない場合手の打ち様が遅れるんですわ？お？」

「信用できるという証拠はあるのか？」

「なら信用できない証拠はあるのかよ ほら見事なカウンターで返した」

「君の評価はまず信用できないところから始まっているんだ。どちらの証拠もなければやはり疑われて然るべきだろう」

「お前マジでふざけんなよ本気出すぞ！！」

オンドルがあまりにも俺をナメた発言をすることで俺の怒りが有頂天になった この怒りはしばらくとどまるところを知らない

「ブ、フロントさん！落ち着いて下しア；」

「こんな恐ろしい敵を作りたくないの僕はあやまりますごめんなさい。hai！ガンドルフイーニ君も早く謝って！！」

「先生！早く謝ってください！ナイトには攻撃きかない！私は絶望的な戦いはしたくないです！必死に逃げてもとんずらされて後ろから切られたくないです！はやくあやまつて！！」

「このままではゼいいん何処にも逃げられないプレッシャーを背負うはめになる（蒼白）どれだけ銃で撃つても盾で防がれてグラットンでバラバラに引き裂かれて裏社会でひっそり幕を閉じるはめになる……」

「い、ごめんあさい；許してくださいア……」

調子こいたガンぢルはアワレにも土下座するはめぬなった

「本来ならば完全な怒りとなつてるところだが仏の顔を三度までという名セリフがあるからな 許してやる」

「先生許された！」

「助かった。もう駄目かと思つたよ」

「やはりナイトは格が違つた！」

「心が広大だな、憧れちゃうな」

これでまたナイトの素晴らしさが証明されてしまったな

「俺が思うに信用できないなら信用できる奴に監視させればいいのではないか？ 見事な解決策だと感心するがどこもおかしくはないな」

「むう……現状ではそれが最善か」

「ふむ、それで納得してくれるかの？ ガンドルフィー二君」

「……致し方ありませんね。他にいい方法が思い浮かびませんし」

「なら決まりじゃの。で、問題は誰をブロントさんにつけるかじゃが……」

「「hai！ 私がやるます！！」」

見るとたつみやとせつつなが勢いよく手をあげた

「ほう、やってくれるか。二人交代でブロントさんについてもらおうかの。あ、一つ言っておくが24時間密着せんでいいんじゃない？ 暇がある時でよい」

「「封印が解けられた！」」

「これからよろしくお願ひします、ブロントさん」

「よろしくお願ひするよ、ブロントさん」

「こつちからも【よろしくお願ひします】」

（これからは俺にほとんどいつも2りの内1りが着くことになる）
決定）これでは一人の時間も取れない；

おいやめる馬鹿この京都行きは早くも終了ですね(前書き)

最近一日一食しかとってない件 これでは栄養が取れない；；体が
だるくて裏世界でひっそり幕を閉じそうなんだが；

おいやめる馬鹿この京都行きは早くも終了ですね

「えーと皆さん、来週から僕たち3・Aは京都・奈良へ修学旅行に行くそうで……もう準備は済みましたかー!?」

「……はいー!!」「……」

俺は今3・Aでホームるんムやってるんだがそろそろ就学旅行も近いのでニギが準備するよう言ってた

「この学校はそれぞれのクラスで行き先を選択することになりますわ。そこでうちのクラスは留学生も多く、ネギ先生も日本は初めてということを考慮しまして、クラスの総意で京都・奈良を選択させていただきました」

「あ、ありがとうございますいいんちよさん!!」

「あ、あらそんなにお喜びに……」

「ほっいい選択だなジュースを奢ってやろう」

つ【フロントドリンク〱有頂天味〱】

「あ、ありがとうございます。後でゆっくり飲みますわ」

「うわー楽しみだなー!!早く来週が来ないかなー!!」

「俺もその意見にはどちらかというトダイサン製だな」

京都は最も高確率で日本らしいところだからな　しうゝなが入ってきた件

「ネギ先生、フロント先生。学園長がお呼びですよ」

「あ、はい!」

「柿園長あもりにも呼び出しすぎでしょう?普通こんなことないだろ……」

一度無視してやったら白煙長からからメールが99件きたことがあるので行ってやることになった

〱アワレな場面移動　学園長室〱

「え……就学旅行の京都行きは中止……!?」

「うむ、京都が駄目だった場合はハワイに……」

「ガ……ン……」

「あゝあ又ギ泣いたわゝおいわれの【ノギ】か？」

「す、すいまえんでした……」

理由を言わずもつたいぶるのは重鎮タイポの人間に稀によくある

ことなんだがちゃんと言わないからこうやって土下座するはめぬなる

「このままでは俺たちは理解不能状態なんだが？早く説明しテ!!」

「実は、京都の戦法がかなりいやがっておつてのう」

「先方？京都の市役所かなんかですか？」

「いや、関西呪術協会、それが先方の名前じゃ」

「関西呪術協会？」

「関西柔術協会とか……また魔法関係だよ（呆）」

「うむ、その通りなんじゃ。ここ麻帆良は関東魔法協会の総本山で
のう、あちらさんとはちと仲が悪いんじゃ。今年は魔法先生が一人
いると伝えたら京都行きに難色を示してきおつた」

「えっじゃあ僕のせいですか？」

「ならミギをメンバーから外すことでこの問題は解決ですね」

「いやいや、ワシらとしてももう西との喧嘩はやめにしたいたいんじゃ。

そこでネギ君には関東魔法協会の特使として西へ行ってもらいたい」

そう言つて机から封等取り出してきた

「暇がある時にこの親書を届けてくれるだけでよい。ただ道中色々
と妨害があるかもしれん。向こうも関係者じゃし一般生徒にまで危
害を加えることは無いと思うが……ネギ君にはきつい仕事になるじ
やろう。やつてくれんか？」

「……僕にできるでしょうか？」

「大丈夫じゃて、いざというときはブロントさんが守ってくれるじ
やろう。な？」

「守りたくて守るんじゃない守ってしまうものがナイト 志向のナ
イトである俺が護衛に着くことで普通より充実した修学旅行生活が

認可される」

「フロント先生……はい、わかりました。任せて下さい」

「うむ。ところで京都といえは孫のこのかの生家があるんじゃないが…

…このかに魔法の事はばれとらんじゃろな？」

「この間吸血機騒ぎでばれそうになってた件」

「何？」

「あ、あの、それは、その……かくかくしかじかで」

急にシユンとしてきたがもう駄目又ギはこのまま骨になる（説教）

「ふむ、まだばれとらんか。それならまだいい。が、気をつけてくれんか。ワシはいいんじゃないがあれの親の方針でな、魔法のことはなるべくばれないようにな」

「は、はい。申し訳ありませんでした」

「うむ。ま、就学旅行は予定通り行っからの。二人とも準備は早めにな」

「はい！」

「h a i ! ! !」

備えあれば憂うなしという名台詞を知らないのかよ（前書き）

久々の投稿だよ（呆）俺は最近前門の花粉症前門の新生活でなす術なしだったんだがようやく普段の生活リズムを取り戻し始めたので更新再開することになった 毎週土曜と決めてたんだが一旦リズムを崩すと更新が続けられない不具合があったんだがまたリズムを刻み直すことでこの問題は解決されるだろうな という訳でまた毎週土曜に更新することになる

備えあれば憂うなしという名台詞を知らないのかよ

「おいネギくん、プロントせんせ〜」

「あ」

「お」

向こうからおkのかとかぐあ「ざかとせつてなが走ってきた件

「皆さんどうしたんですか？」

「もうすぐ就学旅行だからね。買い物しとこうと思って」

「ネギ先生とプロント先生も一緒にどうですか？」

「いいぞ」

「げっ、プロント先生も一緒に来るの？」

「も〜アスナそんなこと言ったらあかんえ。プロントさんいい人やんか」

「う〜確かにそうかも知れないけど……」

「なら別行動にしましょうか？ネギ先生はアスナさんと、私とお嬢様はプロント先生と買い物に行くというのは」

「…仕方ないわね。それでいいわ」

「う〜んネギ君とも買い物したかったんやけど……まあしゃあないか。じゃあアスナ、ネギ君のこと頼んだえ」

「うん、わかった。任せといて」

「さて、行きましょうか。最初は服を見に行きましょう」

俺はせつつなとこにかに連れられて買い物に行くことになった

「俺が思うに2りは仲直りしたんだな」

「あ、はい。おかげ様ですっかり……」

「あ〜やっぱりプロント先生が言ってくれたん？」

「えつながらネガを振りまいてたから助言してやっただけ」

「ありがとうな〜。せつちゃん、こっち来てからほとんど話してくれへんかって、寂しかったんよ」

「それは……申し訳ありませんでした」

せつあながまたネガリだしたので俺はグラットンデコピンをかましてやった

「いたあ!!？」

「侍はすぐネガネガしてくるからな　ネガを振りまく　周りの空気が悪くなる　友達が想像を絶する悲しみに包まれる　絶望が鬼なるいくえ不明　となることが稀によくあるらしいので気をつけるべき死にたくないならそうすべき」

「h a i ! 気をつけまうs ! !」

「……なんかせつちゃんの言語がブロント先生に侵されてる気がするわ」

「気のせいではいか？あもり気にしすぎると禿げることになるぞ」

↓流石の時間経過↓

「これくらいかな？」

「はい。しおりに書いてある分は全て揃いました」

俺たちは買い物が終わったので殺気二ギ達とわかれたところに戻ることになった

「教師の俺が言うのもなんだがしおりで禁止されているトランプとかこっそり持っていくのが就学旅行の醍醐味」

「ブロントさんもそういうことしてたん？」

「俺は不良だったからよトランプとか普通に持っていったし夜更かして好きな人言い合ったりした」

「なぜかブロントさんの学生時代が想像できませんね……」

「俺が思うにナイトは高確率で至高の存在だから子供っぽさとは無関係　それが想像できないげいいんだろうな」

「あ、皆さん買い物終わってたんですか？」

又ギ達も買い物終わったんだろうな　先に戻ってた件

「はい、終わりました」

「ネギ君とアスナちゃんを買えた？」

「うん。全部そろえたわよ」

「では、もうそろそろ寮に帰りましょう。日も落ちかけてますし」「せうとながそう言ったので時計を見たんだがもう6時になってた」「そやな。帰ろっか」

「サンセー。お腹も減ってきたしね」

「学生があまり遅くまで外に出てるとリアルポリスの世話になる恐れがあるからな」

〈露骨な場面移動 寮〉

「私とブロント先生はこっちですので」

「うん。せつちゃんもブロントさんもまた明日な」

「お二人とも、また明日」

「じゃあね」

「ちょっと待つべきそうすべき」

解散する系の流れになってたので言うておくべきことを言うてくことにした

「メギは食事したら俺の部屋に来るべき」

「えっ、何かご用でしょうか？」

「うむ もうそろそろ就学旅行だからな事前に話し合うことでじゅじゅつした修学旅行生活が送れることになる」

「わかりました。じゃあ7時半くらいにお邪魔します」

「二ギの返事に俺は頷くことになった」

「要件はこれだけなので【さようなら】」

俺の言葉であるたちは各自の部屋に戻ることにした

ヴァナの魔法を覚えることで充実した魔法使い生活が認可される(前書き)

楊枝で土曜部にアップ出来なかった件 h a i ! 誤ります! 御免な
しア ; ; ;

ヴァナの魔法を覚えることで充実した魔法使い生活が認可される

ピンポーン

「鍵は空いてるので入ってくるべき」

「失礼します」

俺が促してやると又ギが入ってきた

「要件はわかってますかねえ？」

「修学旅行の打ち合わせをするんでしたよね？」

「そるはどちらかという大間違いだな 一般的な打ち合わせは職
印会議ですんでるので俺たちの仕事について話し合うことになる」

「僕たちの……あつ！親書のことですね!？」

「うむ という訳で外に行くぞ」

「えっ、室内じゃないんですか？」

「ついてくればわかるんですわ？お？」

俺たちはそのまま外に行くことになった

〈見事な場面移動 近くの林〉

「この辺でいい」

「あの〜ここで一体何を……？」

理解不能状態に陥ってるミギに順番に説明してやることにした

「がきゅ園長は妨害があると言ったのは覚えてますかねえ？」

「はい。仲良くするための親書が渡るのを妨害する悪い人たちがい
るって」

「別に悪と決まった訳ではない」

「どうしてですか？折角人が仲良くしようとしているのに妨害するな
んて……」

「「確かに仲良くするのはいいことなんですわ？争ってどちらも
得するとかどちらかというところごく稀」

大概是どちらかしか得をしないか誰も得しないのが争い（リアル話）

「なら!!」

「だがしかし気に入くない相手と仲良くしたいと思えますかねえ？」

「それは……」

「俺はよく知らないんだが日本には多分恐らく呪術協会の方が先に出来たんだろうな。それで後から魔法協会がやってきたというなら呪術妖怪が魔法教会を目の敵にしてもどこもおかしくはないな」

「……自分たちの影響力が弱まったからですか？」

「賢いなさすがメギかしこい。日本全体に及んでた柔術協会の影響力が今じゃ関西だけにとどまってしまっているというあるさま。自分の権益を取られて快く思わないのが人間だからな」

「そんな……じゃあ関西呪術協会と関東魔法協会は仲良くできないんですか？」

「又ギがネガ振りまいてきたが俺が言いたいのはそのうちのことではないにいい」

「いあそうでもいい。おれが言ったのは仮説だしもつと深い事情があるんだろうな。だがバカみたいにヒットした頭の奴らが今更粘着してきたところで時代は進んでいる。今は魔法協会が入ってきた当時とは違うんですわ？お互いに譲歩すれば仲良くなれるだろうな」

「……これはそのための親書で、妨害する人達にも事情がある、と？」

「その通り。人にはそれぞれ事情があるので一方的に悪と決め付けるべきではないな。人を悪と決め付ける。話を聞こうとする気が起きない。誤解があっても解けない。心が狭くなり顔にまで出てくる。いくえ不明。逆に人を悪と決め付けない。話を聞くことで譲歩ができる。平和的解決が実現し心の広大さをアツピルできる。彼女が出来る。ほらこんなもん」

「まずは話を聞いてみる、ということですね」

「うむ。だが中には話を聞かない奴もいるだろうな。そんな奴はと」

にかく9度メガトンパンチをかましてやるのがいいんですわ？はつたおしてやると自分の気持ち話を話したすのは稀によくある話」

「あれ？結局争いに戻ってませんか？」

「頭がヒットした奴を倒して終わりではなく倒してから話を聞いてやるのが大人の醍醐味」

「なるほど……相手を許容する心を忘れてはいけないですね」

「そうすることでおもえはまた九歩大人に近づくだろうな（確信）」

「はい！」

元気に頷くムギは見事な大人になると思った

「で おるがここに連れてきたのはその避けられに戦闘に負けなためのパワーをやるうと思つてな」

「力……ですか？」

「この前の「ヴ」との戦い見てて思つたんだがお前は被弾率が高すぎる」

「でも、アンナのよけれませんよ」

泣きが鬼なつちえしまつてくるくくヌギ

「避けるというのはかなり高確率で高等技能なんですわ？相手の攻撃を予測したり反応したりすることで「そこにいたのになかった」状態を作ることが出来るんだがこれにはかなりの経験が必要」「

確かネジは天才なんですが経験不足は否めない感 つまり被弾率の高さは仕方がいい」

「でも、今からじゃ修学旅行までに間に合いませんよ？」

「被弾するのは覚悟してダメージを減らすのがいいと思つたまあ一般論でね？」

「あの、一応魔法障壁はつてるんですけど……」

「俺が思うにそれは無意識で掛けらるるものであつて有用性が高い 専用の魔法を覚えておくことで更にダメージは減速する」

俺はかばんからスクロールを取り出すことになった

「これを読むと「プロテス」という魔法が覚えらるることになる」

「えっ、読むだけですか！？」

「まあ何度か使ってみないと使い勝手はわからにいが基本読めれば誰でも使えるのが魔法のクローリング。ネヒはそれなりに魔法使えるので覚えられるだろうな」

「そ、それが本当なら凄いことですよ！？初心者用の魔法だって覚えるのに何日もかかるのにそれが読むだけって！！」

「世の中色々あるので自分の常識だけでモノを考えないのが一級廃人。とにかく読んで使っておくことをお勧めする」

「え、でもいいんですか？こんな貴重品を……」

「そこまで貴重品ではないので気にしないべき禿げたくないならそうすべき」

「そうなんですか？凄く貴重だと思っただけどな……ありがたく使わせてもらいます」

「話はこれだけなので帰るぞ」

そして俺たちは帰途に着く事になった

あまり気を抜いてると裏世界でひっそりと幕を閉じるはめになる(前書き)

やっと本編に入った件 俺が思うに多分恐らくオリ展開が待ってる
だろうな

あまり気を抜いてると裏世界でひっそりと幕を閉じるはめになる

Side:ネギ「スプリングフィールド」

今日は待ちに待った修学旅行の日だ。僕は一昨日から準備していた荷物を背負って部屋を出た。

京都は日本を代表する古都で、日本に来た以上は一度は行ってみたいと思っていたところだ。それが修学旅行で行けるのだからいいんちよさんやクラスの皆さんには感謝しなくちゃ。

ただ、教員としての仕事や親書のこと、それにエヴァンジェリンさんから聞いたサウザントマスターの手掛かりを探す等しなければならぬ事は多い。実際僕にこなせるかどうか今から不安だ。

それでも、折角の京都だ。精一杯楽しむぞ！

僕が駅に着いた時は既に何人かの生徒が来ていた。教員の集合は生徒の集合よりかなり早いはずなのに、それだけ修学旅行が楽しみだっただろう。

「皆さんおはようございます！」

「あ、ネギ君おはよー」

「おはようございます、ネギ先生」

僕が挨拶すると皆さんが挨拶を返してくれる。近頃の若い人には挨拶をしない人が増えてるって聞くけど、ウチのクラスとは無縁の話だ。

「【おはようございます。】」

僕よりも早く来ていたブロント先生も挨拶を返してくれる。

僕は正直に言ってブロント先生のが苦手だ。いろいろ助けてもらったこともあるけれど、なんだか威圧感があって話じづらい。話してる言葉も文法がおかしい（けれど何故か意味はわかる）し、教師としてはどこか新田先生に近い空気を感じる。

でも、今回の修学旅行では親書を一緒に届けていくことになってる。だから旅行期間中に少しでも克服できればな、と僕は思ってる。

さて、そろそろ生徒の集合時間だ。各班の班長にメンバーの確認をとってもらった。修学旅行での班分けは敬称略で次のようになっている。

1 班釘宮、柿崎、椎名、鳴滝姉妹

2 班四葉、春日、葉加瀬、超、クーフェイ

3 班長瀬、長谷川、朝倉、村上、那波

4 班大河内、和泉、龍宮、明石、佐々木

5 班神楽坂、近衛、桜咲、マクダウエル、絡繰

6 班宮崎、早乙女、綾瀬、ザジ、雪広、相坂

6 班の相坂さよさんを除けば全員出席だ。（今まで担任してたけど相坂さんに会ったことないなあ……どんな人なんだろ？）

全員が乗り込んだところで新幹線の扉が閉まる。乗り込むだけでも騒がしく、引率の仕事が大変そうに思えてきた。でもまあ、それでもあまり苦にならなそうなのがこのクラスのいいところかな。

「それでは皆さん修学旅行が始まりました。はしゃぎ過ぎて他の人の迷惑にならないよう心がけて下さい。その上でいっぱい楽しんで思い出を作りましょう」

3 - A の貸し切りとなっている車両で始まりの挨拶をする。その後は2時間と少し、自由時間になる。それぞれ暇のつぶし方はいろいろで、早起きで眠気の取れていなかった人は寝てるし、音楽を聴いたり持ってきたカードで対戦している人もいる。

「あはは、にぎやかで楽しいなあ」

「兄貴、もうそろそろ気を付けといたほうがいいんじゃないか？」
肩に乗った力モ君が警告してくる。

「?どうして？」

「親書だよ親書。向こうに入ったら本格的に来るだろうが、今から

来ないとは限らねえ。あんまり気い抜かないほうがいいぜ」

「それもそうだね。油断はしないようにしないと」

胸の内ポケットに入っている親書の感触を確かめて、気を引き締めた。

「……きゃ……!!?」「……」

突然、皆さんの悲鳴が聞こえてきた。

「この悲鳴は!?!」

僕は慌てて3-Aの車両に戻った。すると、

「や……ん……」

「何これ……」

……蛙の大群がばこじゃかわいていた。

「な、なんなんですかこの蛙の団体さんは……!?!」

突然の事態に困惑しながらも袋に蛙を詰めていく。アスナさんやクーフエイさんと言った蛙を触ることにあまり抵抗を感じない人たちも手伝ってくれていた。

「蛙全部回収終わったアルよ」

「保健委員は失神した人の介抱を!いいんちよさんは点呼をお願いします!」

「了解しましたわ!」

「ちよつと、保健委員も失神してるよ!」

この蛙たちは魔法で作られたものだろうか、魔力のようなものを感じられる。真昼間からこんな風に仕掛けてくるとは思わなかったけど、とにかく事態を收拾しないと。あとやらないといけない事は

……

「兄貴!親書は無事か!?!」

「大丈夫!ホラ」

そう言っ胸ポケットから親書を取り出してみせる。が、それがいけなかった。

「あつ!」

手に持っていた親書が何処からか飛んできたツバメに持っていか

れてしまった。あれもまた魔法で作られたものだとしたら非常にまずい。

「まてー!!!」

なんとか追いかけるけど、一向に距離が縮まらない。仕方なく僕は小さな初心者用の杖を取り出し、周囲の人にばれない程度の魔法で撃ち落とそうと思った。

「魔法の……」

「むっ？」

僕が魔法を唱えようとした時、向こう側からやってきたブロント先生がツバメをつかみ取った。かなりのスピードで飛んでいたツバメをつかむなんて流石にブロント先生は格が違った。

「なんでルバメが新幹線の中跳んでるんですかねえ……？しかも加えてるのは親書ではにか」

「ブロント先生！」

不思議そうにツバメを眺めるブロント先生に声をかけた。

「又ギか 俺は見回りしようとする前の車両に言っただが何いきなり飛んできたくくツヴァメ 貧弱一般人なら反応できないところだが一級廃人である俺は光速で飛んでくるツバメを「ほう……」て捕獲する 捕獲されたツバメは必死な顔してくわえたもの差し出してきたがこれはもともとおるたちの物であって詫びの心とは無関係よってこの燕はこのまま骨になる」

言いながら親書をとり返したブロントさんはなんとそのまま燕を握りつぶしてしまった！

僕は目の前で起きた光景が信じられずしばらく呆然としていたが、ブロントさんが開いた手を見て更に驚くことになった。

そこにツバメの姿はなく、代わりに燕の形をした紙があったのだ。

「こりゃあれだな。式神ってやつだ」

「式神？」

聞き慣れない単語に思わず聞き返す。

「うむ 式紙というのはオン妙述で気を込めると簡易な命令を聞く

奴で英語で言うところの「パーゴンレム」

日本にはそんなのがあるんだ。勉強になるな……

「ん？ 陰陽術って」「確か日本の魔法だったよね」

「そうでさあ兄貴！ だからこいつを使った奴は十中八九敵だ！」

「それにこいつった敷紙は術者が近くで操っていることが稀によくあるらしい」

「ってことは術者は電車の中にいるってこと！？」

「その通り！ だからブロントの旦那「さん付けでいい」ブロントさん、逆探知できますか？」

「できまえん……」

「……できないんっすか」

「ナイトは高確率で最強のジョブなんだが敷紙飛ばしてきた奴を探知する系の魔法は未習得状態」

ブロント先生でもできない事ってあるんだ……

「まあ仕方ないっすね。とりあえず親書も取り戻したからそれでよしとしましょう」

「だがこういう卑怯な手使ってくる奴は大抵粘着してくるからな

あもり気を抜きすぎると後で痛い目見るはめぬなる」

先程気を抜いて親書を取られてしまった僕にはブロント先生の忠告が耳に痛い。でも、もう同じ失敗はしない。

「わかりました！」

よしっ！ もう一度気合を入れ直すぞ！！

あまりのヒキョウぶりに完全な怒りとなった(前書き)

休みになると更新が停滞するぞなむすです(反省)すいまえんでし
た……許してくださいア……

あまりのヒキョウぶりに完全な怒りとなった

「ブロント先生、集合写真撮りますよ〜!〜!」

「俺は謙虚だから端っこでいい」

パシヤツ!

「おおーこれが噂の飛び降りるアレかー」

「よし!誰か飛び降りれ!」

「では拙者が……」

「やめろといってるサル!」

俺たちは今清ミス寺に来てるんだが何いきなり飛び降りようとしてるく〜ござる 死なない!死にくい!からといって飛び降りるとかちよとsYれならんしょ;

「じゃあブロント先生を放り込めー^^」

「っっおー^^」

「えっ おいやめる馬k」

ぼいっちょ

「うおわ〜〜!?!」

また落下だよ(泣) この世界に来てから2度目なんだが……(9度でいいとかいうDMなネタはないから)

「うおおおお!秘技!九点接地!」

この技はつま先から頭部まで合計九点を利用することで落下の笑劇を分散することでダメージを軽減する一歩間違えると失敗で大ダメージを受ける隠し技なので放り投げたの生徒達が拍手し出した(Kwskは五点接地でググればいいんじゃないかな?)

だがしあkしそもも投げられなければ使わずに済んだ技なので「うるさい俺は完全な怒りとなった お前ら後でボコるは……」という聖徒達は黙った

「ブロント先生！大丈夫ですか！？」

自体に気付いたららしい雪風呂あやかが上から声かけてきたので大丈夫だと言つてとんずらを使って普通ならまだ付かない時間できょうきよ戻ると「もう戻ったのか！」「はい！」と大驚愕状態だった
「黄金の鉄の塊でできたナイトが草装備の地面に後れをとるはずがない」

「よかった、ご無事でしたか……あなた達！一体何を考えているんですか！？」

「いやー、ブロント先生なら大丈夫かなと」

「ブロント先生が飛び降りても無事なのはまあわかってたこと」

「ブロント先生だからね」

……マジ震えてきやがった；怖いです；；

「おいイ……いくらナイトが指向の存在だからといって過度な期待はしないでくらふあい（約束）」

「全く。ブロント先生、本当に大丈夫ですか？」

「心配【ありがとう】俺は大丈夫なので気にしなくていいぞ」

「……やった！許された」

「ただし投げ込んだ奴ら おもえらはだめだ」

「……オウフ；；」

おるは投げ込んだ奴の頭にメガトンパンチ（垂直）をブチ込んで
やった

「内のクラスあもりに元氣よすぐるでしょう？」

あのまま寄与水寺にいとまた投げ込まれるかもしれにいと
いうことで俺は周囲を散策してたんだが

「……きや……！！？」

という女子の悲鳴が聞こえてきたのでとんずら使つてカカツと
駆けつけると

「いたーい！」

「ま、またカエル！？」

……穴にはまったささいkと雪昼がいた

「おいイ？これは一体どういうことなんですかねえ？誰か説明して！！」

「大丈夫ですかまき絵さんいいんちよさん！」

又ギがあつさ木をおるがいき広を助け出したんだが当人たちも理解不能状態になってるらしく混乱してた

まあいきなり穴にはまってその中にカエルがいれば誰だってビビる 俺は優しいからなビビってる2りの頭を撫でてやりながら他の奴に事情聞くことにした

「2りとも恋占いの石に挑戦してたら途中で落とし穴があつて2りとも落ちちゃったんですよ」

ニギの説明を聞くと俺の怒りが有頂天になるのがわかった

「こんなところに落とし穴仕掛けるとか絶対忍者だろ……汚いなさすが忍者きたない！！」

おるはリアルポリスに通報してやるうかと思つたがあまり騒ぎを起こすと修学旅行が注視になるのでやめておくことになった 大事があつたら俺の山脈使つても卑怯な犯人捜すが2りのリアルラック値が高かつたおかげで怪我もないのでわざわざ通報して思い出作り潰すより放置しておいた方がいいだろうな

まあ犯人は放置するが俺の警戒がとかれる訳ではないので生徒達のより柔術した修学旅行生活が認可されるのは確定的に明らか

「これが音羽の滝かー！」

「ゆえー、どれがどれだっけ？」

「右から健康、学業、縁結びです」

「左の水をのみこめー^^」

「^^おー^^」

「あ、お待ちなさい！ちゃんと順番を守って……」

他にも汚い罫がないかと思回つてると音輪の滝に麻帆良 が円結びに殺到してるのが見えた おもえら恋愛に上杉だろ……

「ブロントさんはどれ飲みますか？」

「ほむ……」

俺は真のナイトで思わずナイトをしてしまってる真のナイトだからもててるのだという事実があるので縁結びは【いりません】
【学業も学75の俺には不ひ要です】

というわけで健康を飲むことになった

「ブフー！！」

「うわっ！？」

「きゃっ！！」

「ブロント先生汚い！！」

おいイ！？音和の滝苦すぎでしょう！？普通の水かと思ったたら凄
い苦いとかこのたきぜったいにんじゃだ「……」

その頃の刹那（前書き）

刹那サイド一話で終わらせようと思ったたら一話になったでしゅるの
巻

その頃の刹那

【Side：刹那】

「ここ絶景やな〜」

「はい、お嬢様」

私は今、清水の舞台からの眺めをお嬢様と楽しんでいる。

お嬢様を護衛するために京都から麻帆良へ行つた当初はこんなに楽しい思いが出来るとは思っていなかった。中学に入った時、お嬢様は私にお気づきになられて声をかけて下さつたが、私は幼いころの失敗によるお嬢様への負い目からまともに挨拶も返すことが出来なかつた。その後も一度たりともちゃんと話することができなかつた。しかしそれから2年たつて、ブロント先生が来た。

ブロント先生はこちら側の人間で、少しおかしなところもあるが基本的には生徒思いのいい先生だ。だからだろうか、今まで誰にも担任であつた高畑先生にも相談したことになかつた悩みを打ち明けた。そしてあの人は私の悩みに真摯に答えてくれた。

そのブロント先生の励ましで私はお嬢様に挨拶することにしたのだ。一度話しかけてしまえばあとは楽だつた。初めはぎこちない会話だつたが、もともと明るい性格のお嬢様が会話をリードして下さつたおかげで私も自然に会話できるようになり、以前京都にいた頃のようにお話することが出来るようになった。

その上、お嬢様のお友達であるアスナさんと友達になれた。本当に、ブロント先生には感謝してもしきれないほど恩がある。

「「きゃ〜〜！」」

「ん〜？またなんかあつたんかな〜？」

「……新幹線の時より切羽詰まつた声ではないので大事ではないでしょう。ブロント先生も向かつてるみたいですし」

全く、ウチのクラスの人間は騒がしい限りだ。でもその騒がしいところも好ましく思えるのは、ウチのクラスのいいところなのだから

う。

悲鳴のあつた方に駆けていくブロントさんを舞台から見下ろしているとお嬢様が私に笑みを向けていた。その笑みに一瞬ドキツとするが、よく見ればそれは嬉しさ等からくる笑みではなく、にやにやといった擬音が似合う笑みだった。

嫌な予感がしつつも話しかけない訳にはいかないふいんきに私は前門の虎前門の王神状態でなす術なしだった；；

「な、なんででしょうか？お嬢様」

「せっちゃんて、ブロント先生の話になるといつつも嬉しそうな顔してるな〜」

「えっ」

「そ、そうなのだろうか？私自身そんな自覚はないのだが。」

「ホンマやで。いつつも頼緩むもん」

両手の人差し指で唇の端を押し上げて笑みの形を作るお嬢様。はて、そんなにわかりやすいほどなのだろうかと自分の頬を触ってみる。

「で、どうなん？ブロント先生のこと好きやったりするん？」

「ずい、と顔を近づけてくるお嬢様に思わずたじろいでしまう。」

「さ、さあ？どうなんでしょう。」「確かにブロント先生は頼りになるし尊敬に値すると思いますが……」

私はあまりそういったことに興味はないが、ブロント先生のごことは素敵だと思う（口を開かなければ、だが）。ただそれが単なるあこがれなのか、それともお嬢様の意味している『好き』というものなのか、私の中では判断がつかない。

「う〜ん……まだ恋愛感情までいつてへんのかな？ブロント先生のご想像したらどんな気持ちになる？」

「想像……」

言われて思い出すのは私を励ましてくれた姿、輝く光の翼を生やし剣を振り下ろす姿、そして私を敵の攻撃から守って立つ後ろ姿。そしてその姿を思い出して感じるのは、

「安心……ですね」

「安心？」

お嬢様が不思議そうに小首をかしげる。そんな仕草もかわいらしいなと思いつつ話を続ける。

「あの人の姿を思い浮かべると凄く安心します。すぐ傍にいないくても、私が困っていたらきつと駆けつけてくれるという安心感、あるいは信頼と言ってもいいかもしれません。それがブロント先生を思い浮かべた時に感じる気持ちですね」

「へえなるほどな」

とりあえず納得したのかうんうんと頷くお嬢様。

「……そこから恋愛感情に発展するっていうのも稀によくある話やからな」

お嬢様がぶつぶつと何か呟いているが多分知らない方がいいのだろっ、きつと。

「「「「「きゃ〜〜〜!!!」「」「」

「またやな」

「……これは。」

「?どうしたんせつちゃん？」

「……少し様子を見に行きましょう」

今のは先程までとは違い焦りが多分に含まれている声だ。また関西呪術協会の嫌がらせがあったのかもしれない。

そんな場所にお嬢様を連れていくのに一瞬躊躇したが、ここでお嬢様と離れる方が危険だと思い連れていくことにした。

お嬢様と声が上がった現場に行くと、十数人の生徒に囲まれて倒れているブロントさんの姿が見えた。

まさかあのブロントさんがやられてしまったのか、と驚愕したが、とりあえず現状を確認しようとして近くにいた綾瀬さんに事情を聞こうとした。

「あの、すいません。なにがあつたんですか？」

綾瀬さんは普段はなす事のない私に声をかけられて一瞬驚いたような表情を見せた後、丁寧に答えてくれた。

「それが、ブロント先生が音羽の滝の健康の水を飲んだと同時に倒れてしまったのですよ」

水を飲んで倒れた？一体どうしてと考える私の頭に浮かんだのは、

『毒』

サツと血の気が引いた。まさか、とかそこまでやるか、とかそんな言葉が頭の中に浮かんでは消えた。そうしてぐちゃぐちゃになった自分の思考に囚われている間に、私はいつの間にかブロントさんの傍に寄って声をかけていた。

「ブロント先生！大丈夫ですか！？」

「……………」

見てみるとブロントさんの胸は上下していた。つまり、呼吸はしているということだ。とりあえず最悪の事態にはなっていない事に心中で安堵のため息をつく、今まで見えていなかったものが見えてきた。

ブロントさんの顔は真っ赤になっており、お酒の臭いが辺りに漂っていたのだ。

「もしかして……………」

お酒を飲んで倒れたのだろうか？でもなんでお酒を……………？

「ブロント先生！どうしたんですか！？」

私が疑問符を浮かべていると、向こうから新田先生と瀬流彦先生が駆けてくるのが見えた。

マズイ、と思った。経緯は知らないが教員が仕事にお酒を飲んで倒れたなどと知られるとどうなることやら。しかも相手は規則に厳しい新田先生だ。

かといって今更ブロントさんを隠すことはできない。私は覚悟を

決めて誤魔化すことにした。

「あ、あの、新田先生。これはですね……」

「ん……？これはお酒の臭い？」

駄目だー！！誤魔化すどころの話じゃない！！

そうやって私がテンパっている間にも新田先生はブロントさんに近づき原因を調べ始めた。

「まさかブロント先生はお酒を飲んだのか……？それで倒れたと？」

ああ、終わった。ブロントさん、恩を返せぬ私をお許しください。などと思っている私をよそに綾瀬さんが新田先生に事情を話し始めた。

「……音羽の滝を飲んでいたら倒れた？それまではそんな寄っている雰囲気はなかったと？」

音羽の滝を飲んで？繰り返し返されたその情報に私は一つの予想を立て、音羽の滝が流れるその建物の屋根に上る。するとそこには、

「……樽酒？」

そう、テレビなどでよく見かける樽酒が倒されていたのだ。しかもごく丁寧にホース付きで。

私は半分呆れた思いでその樽を抱えて飛び降りた。まさかこれも関西呪術協会の妨害工作なのか？と痛む頭を抱えつつ樽を新田先生に見せた。

「先生、屋根の上にこんなものが……」

「これは樽酒か……」

「もしかして誰かのイタズラじゃないですか？」

瀬流彦先生もフォローに入る。瀬流彦先生は魔法先生で今回の修学旅行の事情も知らされているはずだ。

「かもしれませんな。しかし一体誰だ、こんな悪質ないたずらをやるやつは……」

こめかみに青筋を浮かべる新田先生を見てこれは相当頭に来てるなと思った。が、そこは大人の先生だ。怒りが有頂天になっても冷静で、誰かの「通報……」という呟きにも、

「通報はやめておきましょう。折角の修学旅行です。生徒たちの思い出作りの場をこんなことで台無しにしたくはありません。飲んだのはブロント先生だけのようですし、きちんと介抱してあげれば問題ないでしょうから」

と生徒の事を考えてくれる新田先生はやはり一級先生なのだなど感じた。

その後の刹那（前書き）

最近いろいろなところに出没してるぞなむすを探してみるのも面白いかもしれない（ウォー　ーを探せ話）

プロまとかと並行に書きためたオリ小説そろそろ放出するかな……

その後の刹那

「ふう……」

私は今、旅館に結界を張っている真つ最中である。

昼間のイタズラからたとえ一般人の前でもやれるならばやるという敵の覚悟を見た私は、気休めにしかならないが簡易結界を張ることにした。

私は本来剣士であり、術は補助程度にしか使えない。そんな私に出来るのは下級の式紙を返す結界を張ることだけだ。

しかしやらないよりはやっておいた方がいい。下級式紙にお嬢様をさらわれたとあつては護衛の面目が立たない。

「ご苦労なことだな、桜咲刹那」

「あ、エヴァンジェリンさん」

主だった出入り口に結界符を張り終える頃、エヴァンジェリンさんが声をかけてきた。

「守りを固められるなら固めておくにこしたことはないと思いましたが……エヴァンジェリンさんも協力してくれるのですか？」

「まあそのつもりだが、防衛か……私には不向きなことだな」

「そうなんですか？」

エヴァンジェリンさんが珍しく苦手を口にした（普段からそれほど話すわけでもないが）ことに驚きが鬼なっていると、

「ああ。私が強くなつたのは自己防衛のためだが、そもそも私は吸血鬼の真祖だからそう簡単には死なない。それにここ100年ほどは襲撃もなく、ただ自己研鑽するだけだったからな」

なるほど、それなら確かに守りは疎かになるだろう。守るということに関してあまりこの人に頼ってばかりはいられないということか。

「それにこういったことは本来ブロントさんの本領だろう」

「「確かにそうですね」」

自ら騎士と公言して憚らないブロントさんは当然守りは得意な
だろう。盾まで持ってたし。

「ただ、あそこまでお酒に弱いとは思っていませんでしたが……」
「……そうだな」

あの後確認したのだが、あそこに仕掛けられていたお酒はそれほ
どキツイものではなかった。それなのに倒れてしまうほどブロント
さんはお酒が弱かったのだ。

あの人にも弱点があったんだと身近に感じる一方、今それを知
ることになったのはちよとSYれならんしょそれは……とも思う。

「しかし敵の目的はなんだろうな？」

「目的ですか……思いつく限りでは二つですね」

「ほう？聞かせてみる」

こちらの解答を採点する教師のように私に振るエヴァンジェリン
さん。

「まず一つがネギ先生が持つ親書です。これが長に渡ってしまえば
反関東派の肩身は狭くなってしまい、最悪二度と動けなくなるでし
よう。それを阻止するために親書を奪い去るのが一つ。そしてあと
一つが……」

「あ、エヴァンジェリンさん。それに桜咲さんも」

「二人とも何やってんの？」

私達が話していると、向こうからネギ先生とアスナさんがやって
きた。

「ああ、私達は今日の襲撃について話していたところだよ」

「ちょ、エヴァンジェリンさん!？」

いきなり何を言い出すのだろうかこの人は。ネギ先生はともかく、
アスナさんは一般人なのに……

そんな私の焦りを見たアスナさんは笑った。

「あゝ、大丈夫よ刹那さん。私も魔法関係の事は知ってるから」

「へ……?」

驚いた私は間の抜けた声をあげてしまった。まさかアスナさんも

裏の関係者だったとは……麻帆良に来て2年以上たっているが知らなかった。

「アスナさんも裏の関係者だったんですか。今までそちらでは会ったことがありませんでしたから知りませんでした」

「そりゃ〜私が知ったのつい最近だしね」

ついでに言うると本格的にかかわったのは3年になってからだし。

と付け加えるアスナさんに私は驚愕を隠せなかった。

「それはつまり魔法がバレたということでは……？」

「す、すいません！」

私がアスナさんに疑問を投げかけると何故かネギ先生が謝ってきた。ということは……

「初日にバレたそうだ」

「えー！？初日に！！？」

エヴァンジェリンさんの捕捉に開いた口がふさがらなかった。もうさっきから驚いてばかりのような気がする。

「いやね、本屋さんさんが階段から落ちた時に魔法を使って助けてたのよ。それを偶然私が見ちゃって、それで問い詰めたら、ね」

「問い詰めたら……それぐらいならいくらでも誤魔化しようがあるのでは……」

つい半眼でネギ先生を見ると、彼はしきりに頭を下げていた。いや、私に頭を下げられても……

「やはり子供先生より騎士先生ですね。今回のそれがよくわかりました<<アスナさん感謝」

「す、すいません……」

泣きそうになってるネギ先生に、それでも自業自得じゃないかな？と思ってしまう私は間違っていないはず。

自分の中でそう納得していると、今度はネギ先生の肩に乗ったオジヨが話しかけてきた。

「おう、姉さん。そこらへんで勘弁しておいてやってくれねえかな！兄貴だつてまだ子供なんだぜ？」

「魔法学校でも誤魔化し方くらい習ったはずだがな」

エヴァンジェリンさんの容赦ない追撃にネギ先生の涙目は更に加速してしまった。流石にこれ以上はいけないと思ってエヴァンジェリンさんの方を見ると、

「ククク……」

あ、これだめだ。いじめっ子の笑みだ。瞬間的にそう察知した私は、止めることをやめた。ここで止めれば私に被害が及ぶ。絶対。すいません、ネギ先生。私はお嬢様をお守りするという使命があるのです。こんな不甲斐ない私をどうか許して下さい……

心の中でそう謝罪した私は成り行きを見守ることにした。

「ついでに言えばそれを学園長に報告しなかったのも悪いな。もし神楽坂明日菜から他の一般人にばれたらどうするつもりだったんだ？」

「えう！でもアスナさんは黙っていてくれるって約束してくれましたし……」

「バカめ。それを信じられる保証がどこにある。来て一日も経たず信頼関係等出来るものか。そんなことで魔法が広まった責任をどう取るつもりだ？」

まあその時点でオコジョ決定だがな、と更に邪悪な笑みを浮かべるエヴァンジェリンさんにネギ先生は遂に涙を流し始めた。

「よしよし、泣かないの！男の子なんだから」

そのネギ先生を抱きしめて慰めているアスナさんを見て、子供嫌いと言っていたがやはり優しいのだなと思った。

「エヴァちゃん！」「確かにバラしちゃったのは悪かったんだろうけど、そこまで言う必要ないじゃない！」

「……まあ私も言いすぎだと思うがな。たまにこうやってキチンと言っておかないとまた同じ過ちを犯すかもしれない。特にコイツは際限なくバラしそうだから……」

「うっ……そうかも」

「アスナさ〜ん！？否定して下さいよ〜！！！」

ネギ先生、諦めて下さい。600年生きてるエヴァンジェリンさんにアスナさんを説き伏せることなんて簡単なことなんです。

哀愁すら誘うネギ先生の姿に、思わず涙がホロリと落ちた。

「まあ私はそうなっても一向に構わないんだが、フロント先生は坊やに目をかけてるようだからな。自分の過去の過ちを指摘されて狼狽えるのではなく、キチンと受け止められるまでは何度でも言うてるぞ」

そこまでしないと成長しないからな。と付け加えるエヴァンジェリンさん。あのきつい言葉はキチンとネギ先生のことを考えていたのだなと評価を上方修正した。まあ楽しんでいたことも否定できないが。

「まあそこまでしておきましょう。それよりも今は……」

「ん？ああ、そうだな。襲撃者の話だったな」

「あゝあの嫌がらせの数々ね。ネギの持つてる親書とやらが狙いつて聞いたけど……」

うんざりした顔のアスナさん。「確かにあれは少しひどかった。

「もう一つ、お嬢様をさらうという可能性があります」

「えっ！？木之香を！！？」

「はい。詳しい説明は省きますが、お嬢様はとても大きな力を持っています。だからこそ麻帆良に送ってその力を利用されることを防いでたのです……」

「流石に修学旅行に行くな、とは言えんからな。今回は関西に戻らざるを得なかった」

「お嬢様が今のようなお立場で関西に来ることは二度とないでしょう。つまり今回は敵にとって最後の好機、というわけです」

「死に物狂いでさらいに来るかもしれない、というわけですね？」

いつの間にやら復活したネギ先生が確認してくる。この辺はやはり天才なのだろう、こちらが一を言えば十を理解してくれる。

「その通りです。私はお嬢様の護衛、そしてこのちゃんの親友です。ですからなんとしてもお嬢様だけは守りぬかないといけません」

たとえ命に代えても。それが私の誓いなのだ。

「よし！そういうことなら協力するわよ！なんたって私もあの子の友達だしね！」

「僕にも協力させてください！」

二人ともそう言うってくれる。少し頼りないかもしれないが、それでも一緒に戦ってくれる仲間がいるだけでこんなにも心強い！

「はい、お願いします！」

だから私はお二人の力を借りる。お嬢様を守るために。

「じゃあ僕は外の見回りしてきますね！」

ネギ先生はそれだけ言い残すと走って外に行ってしまった。意外に行動力があるなと思いい、十歳で先生が務まっているのだからそれも当然かと思いなおす。

「あゝもうネギったら」

「いいですよアスナさん。私達は館内を見回しましょう」

「ならば私は部屋に戻っておこう。一緒の部屋だからいざという時は……っ！?!？」

突然言葉を詰まらせたエヴァンジェリンさんに何事かと尋ねようとしたところ、私は異様な気配を感じた。恐らくエヴァンジェリンさんもこれを感じたのだろう。

「どうかしたの、エヴァちゃん」

唯一気配を感じる術を持たないアスナさんが問いかけてくるが、それに返してる余裕はない。私とエヴァンジェリンさんは急いで部屋に戻った。

「お嬢様！」

「近衛木之香！」

勢いよくドアを開けると、そこには魔法で縛られている絡繰茶々丸さんしかいなかった。

「茶々丸！」

「すいません、マスター。近衛さんが……」
くそっ！

「お嬢様！」

「まだ遠くには行っていない！追え、刹那！私も茶々丸を解放した
らすぐに行く！！！」

エヴァンジェリンさんの声に今為すべきことを理解した私はすぐ
に気配を追い始めた。同時、今頼りになるかもしれない人に連絡す
るのも忘れなかった。

「ブロントさん！！！」

汚いなさすが忍者きたない（前書き）

先週更新サボってすいまえんでした；；、「レジまぐ」というサイトでオリジナル小説公開しようとしてたらこつちのこと全く忘れてた感；というわけで今回2話分投降したんだがいつもとほとんど量が変わらないとかどういふことなの……

まあいいんはわかってる<<戦闘シーン 先頭描写あもりにも難しすぎるでしょう？俺にはこれが限界だったんだが……そういえば最近マジ恋とか見たんでそこにブロントさんを放り込んで戦闘描写の練習するのでもいいかもしれないと思った

後さっきも書いたとおり「レジまぐ」でオリ小説投稿してるので暇があったら見てくだしア！

汚いなさすが忍者きたない

「……おいイ？」

知らない天井なんだが？

おるは「確か音羽の多岐で水飲んでたはずなんだがそこからの記憶がない不具合；

「あ、気が付かれましたか？」

横からいさずなが話しかけてきたのでとりあえず起きることにしたんだが

「……頭がガンガンするんだが；」

「お酒飲んで倒れたんですから仕方ないですよ」

「俺がいつ酒のんだって証拠だよ？あもり捏造すると通報で逮捕確定」

「音羽の滝が酒」

「えっ」

「音羽の滝がお酒になっていたんです。屋根のところにお酒の樽が設置されていて、誰かのイタズラだという話ですが」

「おいイ……そんなとこに鮭仕掛けるとかそいつ絶対忍者だろ……汚いなさすが忍者きたない」

なんでそんなところにしかけるのか理解不能状態なんだが；

「それでプロント先生が倒れてしまったので新田先生がここまで運んで来たんです」

「ちよとSYれならんしよそれは・行った先生にはれてるとかSEKKYO確定なんだが；」

仕事中に不可抗力とはいえ酒飲んだとかキレられる感；

「それは大丈夫です。先程も言いましたけどイタズラということで結論が出てますから多分責められませんよ」

「助かった！終わったかと思ったよ」

シンクノソー

何急になりだしたくく形態 デスプレイ見てみるとせつつなから
だったのでしょうzなに断って出てやることになった

「ブロントなんだが」

「ブロントさん！お嬢様がさらわれました！！」

「おいイ！？マズイだろ……今どついう状況なのか理解不能状態な
ので早く説明しテ！！」

「さらった敵は駅の方に向っていて、今私とアスナさんが追ってい
ます。エヴァンジェリンさんも後から来てくれます！」

「又ギは！？」

「ネギ先生は外を巡回中でしたから、気付けば来てくれると思いま
す」

「俺も今すぐ行くから足止めしとくべきそうすべき！」

「hai！！」

指示した俺は力カツつと着替えて追いかけることにした

「ブロント先生？どうしたんですか？」

「ウチの生徒がどうやらピンチらしく「はやくきて〜はやくきて〜」
と泣き叫んでいるので俺は助ける系の仕事があるので」

しつずなの返答も聞かないうちにとんずら使って走り出した

「おいイイイイ！！」

俺はとんずらを使って普通ならまだ付かない時間できょうきよせ
ちなたちに追いつくと

「もうついたのか！」「はい！」「きた！盾きた！」「メイン盾
きた！」「これで勝つる！」

と大歓迎状態だった 敵はアワレにも援軍が来たことに慌てふため
いていた

そこで俺は更にk s kして卑怯なサルにメガトンパンチを食らわせ
てやるうとしたんだが何急に地面から生えてきたくく石の槍 普通
ならそこで食らってしまう人がぜいいんだろうが俺は一級ナイトな
ので力カツつとバックステップすることで危険を回避

するとなんか白髪の子ビが突撃してきたので盾で防いでやるとどうやら貫けないらしくバックステップし出した。防がれたことに動揺せず、潔く引くそのあるさまに流石のナイトも「ほう………」というか鬼なつた。

そうこうやってる間にサルがちよつとわずかばかり遠くに行ったので「おもえらここは俺が食いとめるので早く追いかけるべきそうすべき」

と言つてやるとえsつなとかぎら坂とニギはそのまま走つていった。こつという時残る奴心配して足止めるやつがいるんだがナイトの信頼度は格が違うので安心して後を任せられる。

横を走りぬけていくヌギ達が気になつたんだろうななんか魔法出そうとしてきたんだが俺はその間に力カツつと割り込むことで防御「……あなたは少し厄介だな。ここで始末しておこつ」

「おもえいきなり始末するとか言われる奴の気持ち考えたこと有りますか？マジム力つくんで止めてもらえませんかねえ………？」
俺らはそのまま睨みあうことになった。

先に動いたのは白髪の少年であった。

急接近した少年の右ストレートがブロントさんを襲つが、彼はそれを盾で軽く受け流し右の膝を入れようとした。

ガンツ！！

見事なカウンターで放たれたそれは少年の強固な魔法障壁に防がれた。少年はすぐさま左の拳を放つ。

「ほう………」

上体を軽くそらしてそれをよけたブロントさんは右手のグラットン横に薙いだ。そのダークパワーに危険を感じたのか少年はブロントさんの体に蹴りを入れ大きく後ろに跳び退いた。

「生半可なナイトにはまねできないホーリー！！」

すかさず追撃を放つが、少年が手を前に突き出して生み出した障壁によって防がれてしまった。

「すごいな、今で障壁が何枚も割れてしまった」

「俺のホーリー防ぐとかお前絶対八二ーだろ……魔法絶対防御とかウチのシマじゃノーカンだから」

数秒の睨みあいの後、今度はブロントさんが駆けだした。

「ハイスラア！」

ブロントさんの斬撃が右斜め上から振り下ろされるが、少年はしやがむことで回避、すかさず蹴りを放つ。ブロントさんが盾で防ぐが、攻撃直後で体勢が整っておらず、そのまま後ろに飛ばされてしまふ。

「『石の槍』」

少年はその隙を逃さず石の槍を放った。迫りくる石槍を前になんとか体勢を整えたブロントさんは盾でそれを受け止めた。が、

ヒュッ！！

「ぬっ……！！？」

横から襲った刃がブロントさんの腕を切り裂いた。咄嗟に右に転がり込んだおかげで腕をなくさずに済んだが、それでも腕を半分以上断たれおびただしい量の血が流れ落ちていた。

「おいイ！？男のタイマンに横槍入るとか汚すぎるでしょう！？そんなこともわからない奴は悪者でFA！そんなことする卑怯者はマジでかなぐり捨てンぞ！！」

ブロントさんの怒声が辺りに響く。一方、彼の腕を切り裂いた影は白髪の少年の隣に立った。それによって今まで見えなかったその姿が見えてきた。

「おもえは！？」

「久しぶりだなブロントオ！」

それは、ブロントさんがよく見知った姿であった。

汚いなさすが忍者きたない(後書き)

ハニーの元ネタは「ランス」というエロゲなんだがわかった人はい
るんですかねえ……？

俺はこれで忍者きらいになった(前書き)

感想でリクがあったので前回で紹介した「レジまぐ」のURL載せておきまう<http://regimag.jp/>

俺はこれで忍者きらいになった

Side:フイイト「アーウエルンクス」

「おもえも来てたのかというか鬼なる」

「HPに帰ろうと思ったたらこっちに来たんだよ。最初はどうしたもんかと思ったがお前もここに来てるって聞いてな。折角だからこっちでやつちまおうと思ったんだよ」

「俺が思うに昼間の酒もお前の仕業だろ 人を酔わせてから仕留めようとか汚いなさすが忍者きたない 俺はこれで更に忍者きらいになったなあもりにもひきょう過ぎるでしょう？」

相手の騎士風の男と知り合いらしい忍者は彼に敵意を向けている。聞くところによると何か因縁があるみたいだが、今の目的は彼を倒すことではなく彼の足止めだ。

「これくらいでいいだろう。引くよ」

「ハア？何言つてんだよ？」

この忍者は何故か目線が付いているが、それでもわかるほど疑問顔になっていた。何の因縁があるかは知らないが一応仕事なのでちやんとやってほしいものだ、僕はこっそりため息をついた。

「僕たちの仕事は彼の足止めだ。あれだけの傷を負わせれば十分だよ。あれなら少なくともこの修学旅行期間中は戦えない」

本国であればあれだけの傷でも数時間で治せるだろうが、ここではそれも難しいだろう。そう考えていると、

「あれ見ろよ」

「……えっ？」

こんな間の抜けた声が出たのはいつ以来だろうか。忍者が指さす方を見れば、男の傷口に淡い緑の光が溢れ、見る見るうちに治癒していった。

「俺やアイツみたいなヴァナ人は『死な安』なんだよ。あれくらい

どうってことねえ」

……ヴァナというのは恐ろしいところだ、そう思った。普通あれだけの傷を負えば、たとえ治ったとしても戦意喪失、良くても精神に何らかのダメージを負う。だというのに彼は平然としている。その姿は今のような傷がよくあつた事を示唆していた。

「……どちらにしても今は撤退した方がいい」

「……みてえだな」

そう言葉を交わすと同時、男の影から二つの人影が這い出てきた。その影はすぐに色を持ち、鮮やかな金と柔らかな緑となった。

「救援に来たぞ……ってなんだその血は!？」

「大したことないので気にしないべきそうすべき」

「むう……まあお前がそういうなら後回しにするが」

「おいイ? 気にするなって言うのが聞こえませんか? 聞こえてないならお前の耳は意味ないな後ろから破壊してやるうか!？」

「……『闇の福音』か。まいったね、封印が解けたという噂は本当だったのか」

心の中で舌打ちをする。計算の範囲内とはいえ、厄介には違いな。折角忍者という予想外の戦力が入ったのにこれではまた五分に戻ってしまう。

「っていうかこっちは良いんでメギの方向ってもらえませんかねえ?」

「もう終わってた」

「えっ」

「私達が行った時にはもう終わってたよ。無事に取り戻してたさ」

「ほう……又ギ達もなかなかやるな 後でジューズを奢ってやるう」
「どうやらクライアントの方も失敗に終わったらしい。ますますこの場にとどまる意味がなくなった。」

「これでお前らの運命は決まったな コニカは取り戻したし前門の虎前門の王神状態でなす術なしだしな」

「へっ、それはどうかな!」

チラリと横を見ると、忍者は懐から球状の物体を二つほど取りだした。そしてそれを勢いよく地面に投げつけた。

ボンッ！

どうやら煙だ魔だったようだ。辺りに白い煙が立ち込める。ご丁寧に魔法的なチャフの役割も果たしているようであった。

「よし、行くぞ！」

忍者が僕の手首をつかんで走り出そうとする。が、
「待って」

「あ？何だよ！？」

僕は逆に忍者の手首を握り返し、勢いよく川へと跳んだ。

「おわっ！」

水面に着く寸前にゲートを発動、そのまま川に飛び込んだ。

「チツ、逃げられたか」

「深追いは不ひ要だからな このまま見逃すのが得策」

しかし忍者まで来るとは思ってた感 今思うに昼間の酒も俺を知ってるやつじゃないとやれない！やりにくい！忍者は向こうで決闘する時も大概呪われた酒投げてきたからな

「絵羽」

「ん？なんだ？」

「九円【ありがとう】あの2りが相手だと流石のナイトも二日酔い状態じゃほんのわずかばかりしか保たなかっただろうな そうなると俺はあのまま裏世界でひっそりと幕を閉じてた」

「とってやると照れたんだらうな急に頬染めてきたくく江波

「ん、まあ、気にするな。前も言っただろう、お前が困っていたら助けてやるとな」

そっぽ向いているのは照れ隠しなのはバレバレで 嬉が鬼なるのは止められないようだった

「コホンッ！しかしまあなんだ、あの2りはそれほど強かったのか？」「確かに2りとも只者ではなかったが……」

「白髪の方は今のエバと同じくらいだが忍者の方は俺より少し弱いくらいなんだが？」

「!?!?それほどか!?!?」

「忍者もおると同じ一級廃人 一時はヴァナのメイン盾の座を脅かした実績がある」

「……ならさつきはかなり不味かったんじゃないか？」

「だからそのまま骨になりそうだったんですわ？」

「いや、私達が来てもだ」

「あいつは効率厨だからよ 分の悪い賭けはしにい」

「時間をかけて造園が来るのを恐れた、か。全く、今回の修学旅行は一筋縄ではいかないようだな」

絵葉が露骨にため息がついてるが俺もため息つきたいんですわ？

「マスター、ブロント先生。あちらからネギ先生が」

「おい、ブロント先生！エヴァンジェリンさん！」

俺達が喋つてると向こうからミギが走ってきたんだが

「おいイ？何でおkのかの服が脱げてる訳？どうしてそうなるのか 理解不能状態なんだが……」

「ブロントさん!?!いや〜ん見んといて〜!!」

「ブロントさん？厳重注意ですよ^^ 厳重注意^^」

「ブ、ブロント先生！刹那さんに言い訳効かない！早く謝って！」

「す すいまえんでした……」

アワレにもプリケツ土下座さらす内藤がいた！

「早い！もう土下座したのか！」

「情けないですね」

これハメでしょ？ウチのシマじゃノーカンだから……

「と、とにかく宿に戻りましょう。僕もう疲れちゃいまして！」

「そうすべき明日に響かせたくないならそうすべき」

「……エロヴァーン」

「……」

変な空間になったので俺はミステリーを残す為ニギの言葉と同時

に宿に帰ることにしたが多分のPT内でヒロヴァーン認定になっ
てるorz

前門のネギ前門の告白（前書き）

またサボりだよ（土下座）週一更新が随分ときつくなってきたんだが、他の小説＋多忙＋内臓痛い＝亀更新 となってるのは確定的に明らか；すいまえん……
というわけで今回は挿絵付 携帯だと縮小表示されるから絵の下手さはばれない……はず

前門のネギ前門の告白

「では皆さん、いただきます」

「……いただきます!」「……」

「いやーらーしいあーさがきたー るこーつなあーさーだとい
うわけで2か目の朝なんだが今日は奈良で班別行動系の話がある
のでどうしようかと悩んでいると

「一緒にまわらんか?」

とエファからの誘いがあったので

「いいぞ」

といつてやると

「やった!許しが出たか!」

と大歓迎状態だった おるにしても絵羽のいる5班はokのかが
いるのでついていこうと思ってた

「あ、ブロント先生は5班と回るんですか?じゃあ僕も……」

「ネギく〜ん!!」

「わーっ」

何いきなり又ギに飛びついて来たく〜あつさ木

「ネギ君、今日一緒に見学しよ!」

「ま、待ちなさいまき絵さん!ネギ先生は私達と一緒に……!」

「え、あの」

「さすが子供先生だな 露骨に生徒のタゲ確保してくる……いやら
しい」

「えちよ、たすけ」

「あんたも大変ね〜」

「アスナさんまで!?!」

「あ、あの!」

雨季広と佐々くがニギ争奪戦しているとみあざきが/shoutし
てきた

「今日の班別行動、私の班と一緒にまわってください！」

「え、でも……」

メギがなんかこつちをチラツチラツ見てきたんだが空気の読めるナイトは又ギの言いたいことがわかる

（このあkのことなら心配しなくていいぞ 今日俺も体調万全だし絵羽もいる完璧な布陣 まあ見てなwww）

（うわぁ……これがフラグか）

（おいイ！？何いきなり人の発言フラグ扱いしてる訳！？ナイトにフラグ効かない！！早く謝って！）

（更にフラグを重ねていく……）

（お前頭悪いなフラグの重ねがけは逆にフラグ回避につながるんだぞ）

「あ、あの～ネギ先生？」

「あ、はい。別に大丈夫みたいなのでいいですよ。僕は6班とまわることにします」

「「「おお～～～！！」「」」

こうしておるは5班ニギは6班とまわることになった

「ふ～（ほっこり）」

「は～（ほっこり）」

「……なにほっこりしてるんですか二人とも」

俺とエヴは茶屋で抹茶セット頼んでほっこりしてたんだがせっつなにはそれが気に入らなかつたらしいな なんか文句言ってきた

「いいじゃないか。たまにはこういうのも」

「見学して回らなくていいんですか？」

「まあ慌てるな。計画はちゃんと立ててあるさ。だから今はこうしてゆっくりと……」

「……一応お嬢様狙われてるんですけど」

「俺らは一級廃人だからよ こうしてほっこりしても常に周囲に気を配ってるので無問題です」

「ならいいんですが」

「それよりもお前は向こうで鹿と戯れてきたらどうだ？お嬢様と一緒に」

俺らが茶しばいでいる間家具あ坂とこにはシカにシカせんべいやつてた

「そ、そうですね。お嬢様と一緒に鹿と戯れてくることにします」

「何急にもじもじでしたくく侍 まだ恥ずかしいんですかねえ？」

「いやブロントさん、コイツは舞い上がってるだけだ」

「な！？別に私は舞い上がってなど！」

「あゝはいはいいいからとつと行つてこい。全く、何が悲しくて女のもじもじしてるのを見なきゃならんのだ……」

「おるはどちかというと大好物ですが」

「「えっ」「」」

「ズズ（ほっこり）」

「おお！これが奈良の大仏か！！」

「見たことなかったんですかねえ？」

「ああ、京都の方には一度行ったことあるんだがな。奈良は初めてだ」

エバが明らかに浮かれてるんですが大丈夫ですかねえ？

「あ、ほら見る！あそこの穴をくぐりぬけると頭がよくなったり願いがかなったりするらしいぞ」

「……あまりにも小さすぎる……」

「大仏の鼻の穴と同じ大きさらしいからな。ブロント先生は……流石に無理だろ」

「ミニマム使えばいける感」

「えっ」

「ミニマムという体を小さくする魔法があるんですわ？」

「……いや、わざわざ魔法使わんでも。まあいい、少し待ってる」
絵葉がそういうと穴をくぐろうとしたんだが

「……絵羽」

「ん？なんだ？」

「パン2 見えなんだが？」

「なっ／＼／＼／＼見るな、見るな〜！〜！」

麻帆良の制服スカート丈短すぎるんじゃないかな？まあ一般論でね？ここで江波の下着が見えないようにさりげなく力カツと体でガードした茶々 は流石一級従者といったところかな

「……」

「……」

「……」

「……………俺が思うにピンクのフリル付きの下着もエヴに似合ってるぞ」

「黙れ、殺すぞ」

真っ赤になつた顔で睨まれたんだが；

「す すいまえんでした；許してくださいア；；（ジャンピング土下座」

「フンッ！」

完全にへそ曲げてしまった感 というかさっきのは不可抗力であつてエロヴァーンとは無関係 俺は悪くぬえ！

「【むむむ。】どうしたもんか……む？」

俺はその時9つの土産や見つけたんだがその中でも朱塗りのかんざしの綺麗さが目についていた かまわずに絵羽を宥めようとするとそのかんざしが赴きある美しさ出して手好印象だった

「これ下シア」

「1990円になります」

ちよつとわずかばかり高かったが普段から無駄遣いしない俺にスキはなかった 俺はそれを力カツと購入するとエヴァに渡してやった

「ん？なんだ？」

まだ不機嫌が鬼なってる江波だが

「俺がジャンピング土下座することでエヴァの怒りを回避できたんだが追撃のお詫びの品で謝罪は更に加速した お前全力で受け取っていいぞ」

「とってやると」

「む、むう……そこまでするなら許してやらんこともないぞ」

「また顔真っ赤にして許しを出してきた」

「やった！許された！！」

「マスター。折角ですのでつけてみてはいかがですか？」

「ああ」

傍に付いてた茶つあ丸がそういうとエバは俺がプレゼントしたかんざしを渡したすると茶々まっ「が手際よく江波の髪まとめることになった」

「どうだ？似合うか？」

「うむ 似合ってるぞ」

「お似合いですよ、マスター」

> i 2 6 6 3 5 — 3 4 6 4 <

「そうか！似合ってるか！！」

どうやら機嫌直してくれたようで助かった 終わったと思ったよ

「あ……プロント先生」

「む？おもえはミア崎ではにか メギとまわってるんじゃないかなのかよ？」

「あらかた見終わったのでまた茶屋に来てたんだが何急に飛び出してきたくく見た崎」

「一体何があったのか説明するべきそうすべき」

「あ、あの、実は……」

〈宮崎のどか事情説明中〉

「ふむ 要するにニギに告白しようとして出来なかった系の話か」

「はい……」

ネガがオーラになって見えそうになってるんだが；

「おもえの班」「確か雪風呂がいたな？」

「は、はい」

「取られる」

「えっ」

「取られるぞ行く広に アイツヌギにアタックかけまくってるからよ お前がそんな風じゃすぐにとられるんですわ？お？」

「あううゝそんなゝ」

「前門のノギ前門の告白で緊張するのはわかりますがここで後門の雪日理を想定することで退路を断つべきだと思った つまり背水の陣」

「……」

「ここでチャンス生かせない奴は後々のチャンスも全部だめにするだろうな 次があると思わずこれっきりと考えてみるべき決心しないならそうすべき」

「チャンスは、一度きり……」

「人生はいつでも一期一会だからな 頑張れよ」

俺はミア崎の背中を軽く叩いて激励してやった

「プロント先生、ありがとうございました。が、頑張って告白してきます！」

宮アズ木はそういうと向こうの方へ駆けていくことになった

「……若いなあ」

「急に老けこまないくださいマスター」

「いや、私にはもうあんな甘酸っぱいふいんきは出せそうにないよ」

「老けこむなといってるサル！諦めんなよどうして諦めるんだよそこで！」

「流石にこれだけ生きてると物怖じしなくなるからなあ……」

「ならお前は好きな人に恥ずかしがらず告白できるのかよ？ほら見事なカウンターで返した」

「できるぞ……………多分」

「最後に多分と付け足す恥知らずな吸血鬼がいた！」

進んで混浴してくるとか聞いたことないんで抜けますね^^;(前書き)

ふう……やっとリアル生活に一区切りついたので投稿することになった
のだがしかしほんの合間に書いたから恐ろしく短いんだがとり
あえず生存報告的な意味を込めて投降することにした また明日か
ら地獄系の仕事があるので更新遅れまうs;;;

進んで混浴してくるとか聞いたことないんで抜けますね^^；

「流石に露天風呂は格が違うな」

俺は今露天風呂はいつてるんだが他の先生方は既に上がってしまったので1り風呂の封印が解けられた　ちなみに言うが生徒の入浴時間に食い込んで鉢合わせとか言う【コリブリ】なネタはないから「ふるいひろに1りで入る　リラックスできる　心が豊かになり性格も良い　彼女が出来るとなるのは確定的に明らかだな」

そうやってしばらく1りで入ってたんだが後ろからドアの空く音が聞こえてきた感　そういえば又ギがまだ入ってなかったなと思つてそつち向くことにした

「ニギ　ちゃんと頭洗つてから入るべきそうすべ……き……」

「あら、ブロント先生」

入ってきたのはしうゝなだった件；

「おいイ！？何急に入ってきてる訳？先生　の入浴時間は先生の前だったはずなんだが！？」

「明日の予定を確認してたら入浴時間を逃してしまいました……男性教員の皆さんが上がってきたのを見たので今の内に入ってしまったおつかと思つたんですか……」

「おもえ今はいつてたのがナイトでよかったなこれが見る彦ならお前襲われてるぞ？」

「瀬流彦先生にそんな度胸ありませんよ（クスクス）」

「瀬流いひこエ……」

競り彦の評価の低さに全俺が泣いたんだが……

「もう少し威厳があればいいんですが（ザッパン）」

「おいイ？何か湯してる訳？俺が入ってるのが見えませんか？見えないならその目は意味ないな後ろから破壊してやるつか？」

「ブロント先生は紳士ですから大丈夫でしょう？（チラ）」

「露骨にチラ見してくる……いやらしい」

「ふう（チャポン）」

「おいやめる馬鹿 広大な風呂で隣同士とか聞いたことないんで抜
けますね……」

「まあまあ」

おるは風呂から上がるうとしたんだがしっずなに腕引つ張られる
ことになった

「おいイ！？当たってるんですが……」

「何がですか？（ムニユウ）」

「勘弁して下さいア……」

「ふふふ」

あまり調子乗ってるとリアルで痛い目見る(前書き)

やっと終わった……地獄のような時期がな
というわけでこれから週一で投稿できると思います

あまり調子乗ってるとリアルで痛い目見る

「おいイ？おもえら一体どうしたんですかねえ？」

俺が風呂から上がってミルク飲んできると又ギが絶望が鬼なつてた

「げ、ブロント先生……」

「あ、ブロント先生。実は朝倉さんに魔法がばれてしまったそうなんです」

一緒にいたかギユあ坂とあsつなが事情説明することになった

「あ桜にばれるとか……それって間接的とはいえ世界に魔法ばらしたのと同様だろ……」

「……ですよね」

「あう、ブロント先生まで」

「ま、まあオコジョも悪くないって！ね！」

「うえ〜ん！！」

「そもそもどうして魔法バレたのか理解不能状態 早く説明しテ！」

「実はかくかくしかじかで……」

「おいイ……」「確かに猫助けするのは勝手ですがそれなりのやり方があるでしょう？いあ猫助けは9歩譲っていいとしてもその後人目を気にせず飛んだのはあまりにも迂闊すぎる」

「す、すいまえんでした……」

「まあ説教は後回しだな とにかく朝吉良捕まえて口止めするべきオコジョになりたくないならそうすべき」

「しかし口止めしたくらいで黙っていてくれますか？」

「口止め料でも脅しても何でも使うのが口止めの秘訣 最悪おるのギガトンパンチで記憶を消すのも仕方ないんじゃないかな？」

「お〜い！」

おる達が話をしているとさあクラが声かけてきた件

「何いきなり話しかけてる訳？」

「えっ」

「あゝ朝倉の姉さん。この人これがデフォだから」

「そ、そうなんだ……（知らなかったなあ。っていうかかもっち喋
っていいの？）」

「（おう、この人も魔法関係者だからな）」

「（へえ、ならこの人も対象にしていわけ？）」

「（儲かる可能性は少しでも高い方がいいってもんだ）」

「（OK）」

「人の前でこそ話とかやめてもらえませんか^^・ストレスた
まるので（苦笑）」

「あ、すみません」

「それで何か用かな？」

「ブロント先生もいるんだったらついでに話しといたほうがいいか
もしれねえ」

「そうだねかもっち。はい」

「そう言っただけに渡してきたくく浅倉

「それ、証拠写真とデータね」

「えっ」

「どういうことなの……？」

「な〜に、かもっちの熱意に絆されてね。ネギ君の秘密を守るエー
ジエントになるうってわけ」

「「え〜〜〜!?!」」

「い、いいんですか？」

「うんうん。私が情報操作すれば魔法の隠匿なんてちよちよいのち
よいよ」

「ちよ、ちよっと待ちなさい！アンタ何企んでんのよ」

「やだな〜私があんた何企んでるように見える？」

「むしろそれ以外にどう見ろっていろいろ……」

「まあ何か企んでも別に構わにいたが……」

「おるは朝うくららの左肩をがっちりホんるドして

「あまり調子こくとリアルで痛い目を見て病院で栄養食を食べる事

になるってことをよく覚えとくべきだな 調子乗ってるとお前の意識が雷属性の左でシャッタアウトするはめぬなる」

雷纏った左拳を見せてやるとかなり青褪めてた

「ハ、ハハハ……肝に銘じておきます」

騒ぐにしてもそれなりの騒ぎ方があるでしょう？（前書き）

ネギま34巻読んだんだがなんだあの展開は……胸圧だな

今更の警告なんだがこのSSは最新刊までのネタばれを含む可能性がどちかというところかなりあるので必ず最新刊まで見てから読むべき
ネタばれされたくないならそうすべき

騒ぐにしてもそれなりの騒ぎ方があるでしょう？

「コラー！静かにせんかー！」

おるが外の見回りから帰ってきたらぬった先生の怒りが有頂天になつてた

「ニツや先生 一体どうしたんですかねえ？」

「ああ、ブロント先生。見回りお疲れ様です。あのですね、3 - Aの生徒たちが騒いでまして」

「……おいイ」

外で聞こえてたのはこいつらの肥だったらしい

「コッブ、ブロント先生」

何か助けを求めてきたが俺はそれを華麗にスルー

「お前ら騒ぐにしてもそれなりの騒ぎ方があるでしょう？先生の優しさにしがみついた結果がこれ一足早く静かにするべきだったな？お前ら調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？」

と喋ってやると

「ごめんあさい；許してくださいア；；」

とプリケツ土下座するはめぬなつた

「いいか、今晚は自分の部屋から出ることを禁止する！もちろん騒ぐのも禁止だ！見つけ次第朝までロビーで正座させるからな！！」

「コッ、え〜〜！？」

「その程度で済んでよかつたな？俺が中の見回りだったらお前らもう正座だぞ」

「コッ、……」

side:エヴァンジェリン

「全く、ガキどもが……」

これでは自由に動けんではないか。折角ブロントさんと晩酌しよ

うと思つていたのに……

ザワザワ……

「ん……？」

なんだ？やけに騒がしいな……

「『ネギ先生&ブロント先生とラブラブキツス大作戦』！』」
む、なんだと？

「え〜なになに？」

「要するにネギ君とブロント先生の唇を奪っちゃおうって訳 勝者には景品もあるよ。もちろんネギ君のマネージャーには許可とつてあるし、ブロント先生なら大人な態度で受け流してくれるだろうから問題なし！」

ほう……ほうほう。

「おい、その話詳しく聞かせろ」

「おおー！？エヴァンジェリンさんも興味あるの？」

なんだその意外そうな面は？血吸うぞ。

「ノリでキスが出来るんだろう？」

私は朝倉和美の肩に乗ったオコジヨを掴みながら尋ねた。

「う、うん。ハッ、ということはもしかしてエヴァンジェリンさん……」

「それだけわかればいい。後はコイツに聞くことにするよ」

まだ何か聞いて来ようとする朝倉和美をおいて自室に戻ることにした。

「さて、どういふことだ？」

「ど、どういふことってなんのことっすかね？」

「とぼけてると煮て食うぞ」

私はシャキン！と爪を伸ばしてみせた。

「ヒー！」

「私の質問に答える。嘘をついた場合は……わかるな？」

私に捕まれたままのオコジヨは震えながらぐくぐくと頷いた。

「お前はこの旅館の周りに魔法陣を張ったな？」

「い、イエス！」

「で、その魔法陣は仮契約の魔法陣だ。違うか？」

「ひえ、その通りでござえます！」

「それであの『ラブラブキツス大作戦』とやらだ。……一般人が巻き込まれるぞ」

「あ、ああ」

「一般人に魔法を教えるのは厳禁。それをわかっててやったのか？」
「た、」確かに一般人に魔法をばらすのは厳禁だ。だがな、昨日の戦闘を見て思ったんだ。兄貴にはもつと戦力がいるんだよ！」

なるほどな。確かに理由としては十分だ。だが……

「馬鹿が。武闘派の奴らならまだしも素人が戦いで役に立つ訳がないだろう。無暗に首を突っ込んで足手まといになるのがオチだ」

別にウチのクラスの奴らが勝手に首を突っ込んで死のうが構わないが。ブロントさんはそんな愚かなでさえも守ろうとするだろう。それでは彼の負担が増えるばかりだ。戦いの最中で負担が増えるというのは死の危険が増えるのと同義だ。そんなことを見過ごせるわけがない。人間は脆いんだからな。

だが。

「やりようによってはいい策だ」

「……は？」

「さつきも言ったが、素人ではなく武闘派は使える。長瀬楓やクーフェイあたりだな。そいつらを味方につけられれば即戦力となるだろう」

それにちょっと術式をいじってやれば、こちらがマスターになることもできる。となれば、あのブロントさんを私の従者にすることもできるだろう。

そうすればブロントさんに私の魔力を付与することができるし、アーティファクトを手に入れることもできる。生存率は格段に跳ね上がるはずだ。

「お、さっすが闇の福音話がかかる！あっしはそういうことが言いたかつ「調子に乗るな」……」

「可能性が低いと思うが、一般人が勝利するかもしれない。万が一一般人が仮契約をした場合、極力こちらに関わらないように配慮しろ。わかったな？」

「hai!!」

よし、これで後顧の憂いは断たれた。後は私が勝利すれば……

「では、俺たちはこれで……（コソコソ）」

「まあ待て（サク）」

「ぎゃー！ー！いてー！ー！！」

「警告だ。仮にも主人を金もつけの出しにしようとするな下等生物。あまり調子に乗っていると『断罪の剣』でバラバラに引き裂くぞ？」

「す、すいまえんでした……」

さて、私もエントリーしに行くか。

教師を梗塞する浅はかさは愚かしいな（前書き）

h a i ! ! お久しぶりでうs ! ! 長い間更新滞ってすいまえんでしたorz

最近まったくストーリーが浮かばない系の話があるので不定期更新になるんだが俺それでいいのか？

教師を梗塞する浅はかさは愚かしいな

（side：エヴァンジェリン）

指定された場所で待機していると、始まりを告げる合図があった。「さあ始まりましたラブラブキッス大作戦！ネギ先生とブロント先生の唇を奪うのは一体誰だ！？」

生徒らの密かな歓声が聞こえてくる。ふむ、600年生きてきたが未だこういったイベントには心躍るものだ。

「詳しいルールはお手元の単行本で確認してもらおうとして、早速チーム紹介いってみよう！」

1班、長瀬直伝の忍法はどこまで通用するのか！？鳴滝姉妹！

2班、頭脳とパワーを兼ね備えた中国コンビは一番人気！？超&ク1フエイ！

3班、現代によみがえった忍者！だが合い方はやる気がなさそうだぞ！長瀬&長谷川！

4班、まさかの参戦！？それぞれ狙いは違うみたいだが大丈夫か！？龍宮&佐々木！

5班、こちらもまさかの参戦！金髪幼女と和製美少女の実力は未知数だ！近衛&マクダウエル！

6班、いいんちよの身体能力は周知の事実だが、本屋はそれについていけるのか！？ダークホースとなれるのか！？宮崎&雪広！

以上の面々で争っていたできます！今回は同時にトトカルチョも実施して開始5分まで受け付けてるよ！」

「盛り上がつとるな〜」

「そうだな」

本当なら茶々丸をパートナーにするつもりだった。しかし、近衛木之香がどうしてもというので一緒に組むことになった。

「しかしお前が参加するとはな。てっきり観戦する側にまわると思っていたんだが……」

「ウチはエヴァちゃんの方が観戦すると思つとつた」

……まあ普段ならこういつたことに参加はしないんだがな。というかちゃん付けするな。

「まあいい。で、お前はどっちが狙いだ？」

「ウチ？初めはネギ君にしようか思つてんけど、折角の機会やしブロントさんにする。こんな機会でもないとするこたないやろつし。せつちゃんには悪いけど（ボソ）」

最後の方は小さい声で聞こえなかつた。が、

「目的は同じか……」

「あ、やつぱりエヴァちゃんも？」

ん？やつぱり？

「待て、やつぱりとはどういうことだ？」

「え？エヴァちゃんはブロントさんのこと好きやろ？」

「な！？」

い、いきなり何を言い出すんだこいつは！？私はただブロントさんに死んでほしくないだけで……！！

「好きとちやうん？」

「うぐ、ま、まあ、好きじゃない訳じゃないが、お前が思っているような意味では断じてない！」

「なるほろ〜ツンデレさんか〜」

「ちがーうー！！」

全く、詠春の謙虚さは一体どこにいったんだ！

「はあ……もういい。とりあえず外に行くぞ」

「へ？なんで？」

「ふふん。お前にも教えておいてやろつ。戦いつていうのは事前の情報で勝敗を左右するんだ。特に今回みたいな場合はな」

ブロントさんの行動は既に茶々丸がサーチ済みだ。

「おいイ……旅館から異様な気配がするんだが……」

敵意的なものではないんだがどうも一波乱ありそうな感

「お前ら静かにする気はないのか……」

このままではぬった先生の寿命がストレスでマツハなんだが……

「おい、ブロント先生」

「何いきなり話しかけてる訳？」

ふり返ってみると何急にPOPしてきたくくエファ&コニカ

「部屋からでたら正座っていったのわかりませんか？生徒は部屋で大人しくしてろ」

「まあそうしてやりたいのは山々なんだが……」

「ぬ」

おいイ？何いきなり絡みついてきたくく糸 いきなり体の自由奪うとか絶対忍者だろ……

「ウチ先にしていい？」

「ん？ああ、まあいいだろう。私はちよつと準備がいるからな」

「よし。じゃあごめんなーブロント先生」

そう言うなりおkのか顔近付けてきた件；

「おいやめる馬鹿 拘束して唇奪うとか犯罪だぞリアルポリスに通報されたいのか!？」

おkのか俺の言葉をスルーして近づけてきた感 無視とかやめてもらえませんか……

〈side:エヴァンジェリン〉

「そこまでアル！」

……ちつ、少しのんびりしすぎたか。クーと超のコンビがきてしまった。

「フフ、さあ観念するネ。いくらエヴァンジェリンでもこの戦力差は覆せないヨ！」

「……フン」

「確かに少し不利だな。二人の戦闘力は一般人を遙かに超えている。対してこちらは封印が完全に解けていない、足手まといの近

衛がいる、そして何より一般人が見ているので魔法が使えないのが痛い。

あちらは魔法が使えなくてもそこまで困りはしないだろう。状況は限りなくあちらに味方している。

だが。

「嘗めるなよ、小娘共」

私は闇の福音。

「かつて闇の頂点を極めた私の力を見せてやろう！」

たかだか十数年しか生きていない小娘どもに負ける私ではない！

「うひゃ〜すごいな〜」

おいイ……さつきから気弾とかワイヤーとか飛びまくってるです
がお前から自重する気はないのか；

すかしあいつらの目がこつちに向いてないのはチャンスなのでお
るは友好活用することにした

「き之香 いい加減ほどいてくれませんか^^;」

「……逃げへん？」

「逃げまえん」

汚い忍者ならここで約束破るだろうがナイトは誠実なので約束を
破らない

「うーん……ならええよ。ちよつとじつとしててな」

そう言つてコニカが糸に触れたんだが

「いたっ」

「おいイ？大丈夫ですかねえ？」

「ちよつと指切れてもった」

「おいイ……指切れる糸で縛るとかエバ絶対忍者だろ……汚いなさ
すが忍者きたない！」

それからこのksが浴衣で手を包んでほどこうとしたが無理だっ
た件

「ごめん、無理やわ」

「……」
誰か助けてくださいア……

何勝手にキスしてる訳？（前書き）

薬一カ月ぶりの投稿なんだが最近ブロント語使ってなかった影響か
ほとんどブロント語が頭から出てこなかった件・ああブロント語は
外国語と似たような物なんだな 今回のでそれがよくわかったよ
<長期間放置感謝

何勝手にキスしてる訳？

「ハア……ハア……思い知ったか！」

「おいイ……」

結局エバが勝つことになったんだがあまりにもひどすぎるでしょう？ 辺りが穴ぼこになってるんだが；

「さて、邪魔者もいなくなったことだし。早速いただくとするか」「何をいただくんですかねえ……？」

「無論、ブロントさんだ」

「おいイ！？ ちよとそれsYれならんしょ；お前たちはまずそのヒツトした頭を冷やすべきそうすべき！」

「フフ、観念することだ。近衛木乃香？」

「はいな」

「おいやめる馬鹿相手の許可とらずにキスするのは犯罪ムグツ！」「いきなりキスされて俺は驚きが鬼なったんだが常にリアに囲まれてたおるがそれ以上驚くことはなかった

むしろ状況を楽しむ余裕はさすがナイトといったところかな 俺子のかの唇の柔らかさとか普通に堪能するし

「くぁwse drftgyふじこ1p」

「ブロントさん落ちて着いてくださいますか^^；」

「^^；」

「どどどどどやって俺が動揺してるって証拠だよ！捏造は犯罪だぞ！」

「次は私だな」

「おいムグツ！」

二階連続で生徒にキスされるとか勘弁してくださいあ……；

「ムグウウウウウ！」

「~~~~~」

たっぷりねっぷり9秒間もディンぷキスされることになった；

「ぷはあ！くくく……なかなかうまいではないか」

「ひゃく大人のキスやな」

「オウフ……」

そこで俺はようやくやつと意図から解放されたんだが

「oi」

「ん？」

「メガトンパンチ！！」

「うおわー！！」

その時には既にあまりの暴走ぶりに完全な怒りとなつてた

「お前ら何勝手にキスしてきてる訳！？お前らまじぶつころしょ？」

「まーまーおちついてーな」

「そつだぞ、少しは落ち着いたらどうだ？」

「お前らは一級廃人のおれの足元にも及ばない貧弱一般人 その一般人もが一級廃人のおれに対してナメタ態度をとることでおれの怒りが有頂天になった この怒りはしばらくおさまる事を知らない俺の怒りのオーラが見えそうになつてたんだろつな 2りともかなり青ざめてた

「ひい！こんな恐ろしい敵を作りたくないで私はあやまりますごめんなさい！近衛木之香も早く謝るべき死にたくないなら謝るべき！ごめんなさい私は吸血鬼だけど命ロストしたくないんです！」

「ほうお前はなかなか解つてるようだな」

「hai！！木之香も早く謝ってください！まだ私は死にたくないんです！！命ロストが怖いんです！私の生きる時間を奪わないで下さい！私がロストしたらここで謝らなかつたお前のせいですね？」

「ごごごごごめんなさい……許してくださいア……」

二人してプリケツ土下座晒してきたんだが
「これで許されると思っていた浅はかさは愚かしいな お前たちはこの後正座で骨になる」

「そ、そんな！」

「俺の優しさと心の広大さにしがみついた結果がこれ一足早く言う

べきだったな？お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？」

結局2りは他にも騒いでたやつらと一緒に正座するはめになった

京都来てゲーセン行くとかお前らそれでいいのか？（前書き）

そういえばニギとあうsなのパクティオンまるまるカットしてたのに今頃きづいたんだが；原作でどこにキスしたシーンとほとんど同じだと思ってくらふあい でこが唇に変わっただけだね？これからも微妙にカットしたりするので疑問に感じたら力カッツといつて下しア

後このSSでは原作と班分けが微妙に違ってるので勘違いしてるとリアルで痛い目見るはめになる

京都来てゲーセン行くとかお前らそれでいいのか？

今日は自由行動の日なのでニギは親書渡しに行く系の仕事をしに行くらしく朝から魔法関係者と打ち合わせすることになった

「じゃあ私とネギで親書を届けに行けばいいのね？」

「はい。私とブロントさんはお嬢様の護衛につきます」

アウスナが又ギにせっつなと俺が子のあkに就くことになった
おるも又ギに着いて行ってやりたかつたんだが汚い雑魚がおのかを狙ってる件があるので護衛に回るようになった

「すかしちよつとわずかばかり心配なんですけどねえ」

「……あの白髪のがキか？」

「あとは汚い忍者だな」

どつちもノギより圧倒的に強いんだが・あいつらにニギが襲われると高確率で負けるのは確定的に明らか

「……仕方ないな、代わりに私と茶々丸がコイツに付いていってやるよ。守りは不得手だが近衛を守るよりはやりやすいだろう」

「頼んでもいいんですかねえ？」

「ああ、それくらいならやってやるさ」

俺が思うにメギは自分でそれなりに戦える分コニカより守りやすいだろうな

「チーム分けは決まりましたね。じゃあ僕は先に出ますので橋のところで待ち合わせしましょう」

「おるもあすあん達が来るまでミギと一緒に待ってやるう」

俺とニギは力カツと浦口から抜け出して待ち合わせ場所に行くことにした

(露骨な場面移動 橋)

普通なら見回りする教師がぜいいんだろつが俺と又ギは学園厨か

ら自由行動の許しがでているので何も問題はなかった

しばらく待っているのと向こうから人陰が見えたんだが

「わ〜皆さん可愛いお洋服ですね」

「おいイ……」

余計なもんまで付いてきてる不具合がある件；6班がいるんだが；

（アスナさん、どうして皆さんが！？）

（ごめんネギ！抜け出す時にパルとあやかに見つかったちゃってさ）

「ネギ先生！」

「え、あ、はい！」

「一緒にまわりましょう！」

「え、あ、あの……」

「いいぞ」

「え」

「やった！許しが出たか！」

（いいんですか！？）

（適当なこと言ってごまかすと着いてくる可能性があるからな 途中で
おるがタゲとってやるからそんなときに抜け出せばいいんですわ
？）

（わ、わかりました）

「なあブロントさん」

モギと裏テルしているとコニカが話しかけてきた

「何か用かな？」

「服似合つとるかな？」

「ここには何着ても高確率で似合うのは確定的に明らかなんだが今
日の福は可愛らしさと大人っぽさが備わり最強に見えるな」

「えへへ〜お〜きに」

「むむっ！ほのかなラブ臭が……！！」

「おいイ？捏造とか止めてくれませんかねえ？妙な噂が立つと俺の
教師生活がクビでマッハ……」

「はいはい喋ってないでさっさと行くわよ!」

(きょうきよ場面移動 ゲーセン)

「おいイ……京都来てゲーセン行くとか……」

「まあまあ」

関西限定のレアカードとか言ってる時点で京都観光する気ないだ
ろ、

「いけ!夕映!」

「……ここです!」

……まあ楽しいんならそれでいいのかもしれないな 思わず苦笑
が漏れてしまったんだがそれを雪儀ろが見てたらしく話しかけてく
ることになった

「ブロント先生も大変ですわね」

「まあな だがしかし子どもの内はアレでいいんじゃないかな?ま
あ一般論でね?」

「そうですね。ウチのクラスはどこでも楽しくやっていける所が
いいところだと思っっていますわ」

「その才能は神の贈物だろうな 後は人に迷惑かけなければそれで
いいんですがねえ……」

「ホホホ……そこはご愛嬌ということで^^」

「抑える身にもなってもらえませんか^^」

「あやか、ブロントさくん!そんなところで喋ってないでこっち
来なさいよ!」

「……全くアスナさんは。叫ばずともいいでしょうに」

「……激しく同意ですね」

2りして苦笑するながら遊びの輪に加わることになった

いい具合にゲームにのめり込みだしたのでおるはニギの傍に行っ
てやった

(又ギ)

(?何でしょう?)

(これからおるがあれいつら引き付けるからその内に力カッっとんずらするべきそうすべき)

(あ、はい。お願いします)

「ぬ パンチングマシンか」

俺がそう呟いてやるとえっつなもそれに乗ってきた

「パンチングマシンですか……………ブロント先生がどこまで出せるのか気になりますね」

「ウチも気になるな」

「ブロント先生は普段どれくらい出せるんですか?」

「おれはパンチングマシンで100とか普通に出すし」

「パンチングマシンで100って普通だと思うのですが……………」

「お前頭悪いな100は普通に出すだけであって本気出すとパンチングマシンが非常にまずい事になる」

百聞は一見に鹿という名台詞があるので俺はきょうきょやってやることにした 結果は

「999……………」

「限界突破してますわね……………」

「俺パンチングマシンで999とか全力でだすし」

おるがそう言う頃にはすでにノギ達はいなくなってた

他人のピンチで笑うやつは本能的にドSタイプ(前書き)

フロントさんがエファとかとキスしてる間に裏では割と原作通りに
進んでるつまりはネギとのそかがパクティおん

他人のピンチで笑うやつは本能的にドSタイプ

（side：ネギ「スプリングフィールド」）

フロント先生達と別れた僕達は、西の総本山に向っていた。のだけれど……

「封鎖型の結界だな。全く、考えなしに突っ込むからこうなる」

僕達は今、結界に囚われてしまっています；；

「むう、悪かったわよ……っていつかエヴァちゃんだって止めなかつたでしょ！」

「こういう経験もさせておいてやろうと思ってな。慎重の必要性が身に染みただろ？後エヴァちゃん言うな」

エヴァンジェリンさんの言葉に耳が痛い。「確かに敵の気配がないからってどんどん行きすぎたかもしれない。いや、かもじゃないよ」とそうなのだろう。

「……エヴァンジェリンさん、この結界破れますか？」

僕は東洋の術式に詳しくないので、この中で一番詳しくそうな人に聞いてみた。

「私は結界とか補助系は苦手なんだよな……茶々丸」

「申し訳ありません、マスター。東洋式の結界を解くプログラムはインストールしておりません」

わずかに眉をひそめて茶々丸さんが言う。そんな場合じゃないとわかっていても、わずかといえど感情表現が出来る麻帆良のロボット技術には驚かざるを得ない。

「なによ、吸血鬼とか偉そうにしてるのに出来ないわけ？」

アスナさんがエヴァンジェリンさんに詰め寄る。エヴァンジェリンさんはそれに眉をしかめて、

「苦手だと言っただろうが。それに、出来ないわけじゃない」

「ならやりなさいよ」

「焼け野原になる」

「えっ」

「辺り一面焼け野原になるぞ」

「えっ、どっ、どうしてですか!？」

僕は慌てて理由を問うた。結界破壊ってそれほど厄介なのかな？

「力業で破壊することになるからな。結界を破壊するだけの力だ、必然余波で辺り一面吹き飛ぶぞ？それでいいならやるが」

「そ、それはちょっと……」

流石に辺り一面焼け野原にするのは……それにここは西の総本山の目の前だ。そんなことをしたら友好どころじゃなくなってしまう。「ならまずは別の方法を探すことだ。こういった結界は必ず術士が基点となるものが存在する。それを破壊すれば出られるだろ」

まあ内部にあるとは限らんがな、とエヴァンジェリンさんは続けた。その言葉に僕はわずかに顔を青ざめる。

「外にあつた場合は……?」

「誰かに助けて貰うか、最終手段だな」

にやり、と笑うエヴァンジェリンさんに僕の血の気は更に引いていた。どうしよう、早くなんとかしないと焼け野原確定だ。

「……うっ」

「?アスナさん、どうかしましたか?」

アスナさんの体が少しだけ震えている。僕と同じ想像をしたのかな？

「……エヴァちゃん、無理矢理でいいから結界壊してくれない?」

「別に私は構わんが……どうしてだ?」

「いいから早く!」

顔を真っ赤にして叫ぶアスナさん。一体どうしたのだろうか?

「ははくん……トイレか」

「うっ」

エヴァンジェリンさんの推測は、どうやら凶星だったらしい。しかしトイレ……あばばば、早くなんとかしてあげないと!

「ハハハハハハハ！トイレならそこら辺ですればいいじゃないか！ティツシュがなくともそこら中に拭けそうな草が生えてるぞ？さあどうしたさつさと済ましてくるがいい野外でその尻を晒し母なる大地に向かって用を足してみるさあハリーハリーハリー！」

「ああ……マスターがドSモードに」

「う、うわ〜ん！！（カカツ）」

「アスナさ〜ん！？」

限界まで顔を真っ赤にしたアスナさんはそのままどこかに走り去ってしまった。

一瞬呆然とした僕だけど、慌ててアスナさんの後を追いかける。しばらく走っていると、アスナさんが休憩所に入っていくのが遠目に見えた。

「チツ、つまらん、間に合ったか。私としては間に合わずに漏らすシチュエーションがよかったのだがな。いや、それが不意に敵が現れてその目の前で漏らすというのもありだな」

「お、鬼だ……」

カモ君が呟く。僕も激しく同意だ。

「吸血鬼だからな」

「あはは……」

もう苦笑しか出てこない；

「は〜、スツキリした〜」

僕達がそうやって話していると、トイレを済ませたアスナさんが休憩所から出てきた。

「大丈夫でしたか？アスナさん」

「ギリギリね。でも危なかったことには変わりないわ。この結界張った奴絶対にぶちのめしてやるんだから！」

うわあ、凄く怒ってる。なるべくアスナさんと目を合わせないようにながら、喉の渴いた僕は休憩所の自販機でジュースを買おうとした。しかし、

ドオン！！

「ほな戦るか、西洋魔術師」

大きな蜘蛛と一緒に、少年が降ってきた。

やはり補助魔法は重要だな 今回のそれがよくわかったよ & get . . . & get . . .

「オラア！！」

「くっ」

少年が降ってきてから、状況は非常にまずいものとなっている。

僕と同じ年くらいであろうこの少年はどうやらこの間の襲撃者の仲間らしく、降ってくるると同時に僕達に襲いかかってきた。

一緒に降ってきた蜘蛛は戦闘開始と同時にアスナさんが倒した（アーティファクトで一撃だった。やはりあのアーティファクトは特別な物かもしれない）のだが、少年の方がとても厄介だった。

彼は戦士、つまり前衛タイプであり、拳を使って戦うスタイルらしい。本来ならば僕のような魔法使いは直接戦わず、前衛である従者（この場合はアスナさん）に守ってもらいながら闘わなければならない。

しかし少年は戦士であると同時に術師であつたらしく、アスナさんは彼の操る黒い犬によって無力化されてしまった。

そうなれば必然僕は彼と一対一で戦わなければならないのだが、今まで戦士タイプとあまり戦ったことのない、それどころか戦闘経験自体少ない魔法使いでは戦士の相手は難しかった。

頼りとなりそうなエヴァンジェリンさんと茶々丸さんは静観の立場を取っている。恐らくは僕の修行になると思っているのだろう。いざという時は助けてくれるかもしれないが、それまでは自力で何とかしなければならぬ。

何より、僕にだってプライドはある。同年代と思われる少年に、

一対一で負けたくはなかった。

「何考え事しとんねん！」

状況を確認していたことで隙が出来たらしい。少年が右の拳を叩きこんでくる。

それはほとんど見えなかったが、僕は自身の杖と自動で張られて

いる魔法障壁でなんとか防いでいた。

しかしそれも長くは保ちそうになかった。彼の鋭い連打に徐々に削られていた魔法障壁の限界が近づいていたのだ。

空に逃げようにも少年がそれを許してくれそうもない。第一、飛んだところでこの無間結界の範囲を把握できていない自分が飛んだところで、自由に動けそうにない。下手すれば、敵の足元に飛びだしてしまう危険性だつてある。

このままじゃ……！

薄れゆく障壁に意識をやった僕の頭に一筋の光が走った。

！そうだ！！

僕は杖での防御を放棄した。当然、障壁が削れる速さは増す。代わりに、障壁を凝縮して短時間だけ強度を上げた。

防御を放棄したことによって彼の手が空き、呪文を唱える余裕ができた。

その隙に僕は直ぐさま詠唱を開始する。

間に合え！

半ば祈るように紡がれた詠唱は間一髪、間に合った。

「『プロテス』！」

少年の拳が魔法障壁を抜くと同時に、薄黄色の、六角形が組み合わさった膜が僕を包む。彼は一瞬目を見開いたが、関係ないと言わんばかりに拳を緩めなかった。

しかし、彼の拳が膜に触れた瞬間、膜はゴムのようにたわんだ。

結果、それによって僕に拳が届いてしまったものの、その弾力によって威力はほとんど殺されており、更には膜自体には何の傷もつかなかった。

これがプロテス。

ブロントさんに教わった、完全にダメージを防ぐのではなく、ある程度通すことで攻撃それ自体では決して壊れない魔法の保護膜である。

「けど、こんなもん！」

痛い……けど痛くない！

プロテスは少年の攻撃を普通の子供レベルにまで落としてくれた。
いた。

これなら、普段アスナさんに叩かれてるほうがよっぽど痛い！

そう、僕の集中力を切るには至らない。伊達にその程度では魔法
学校主席、更には飛び級までしていた訳ではない。

そして僕の詠唱は、完成した。

「『白き雷』！」

僕の手から白雷が放たれる。それは僕の眼前にいた少年に避ける
間もなく降り注いだ。

すかさず僕は後ろに跳び、僕は次の詠唱に入る。あれだけの強さ
を誇っていた少年が、この程度で倒れるとは思わなかったからだ。

「っ、やるやないかチビ助！護符が半分以上消えてもうたわ！」

案の定、彼は僕に向って突撃してきた。けれど、それは予想済み
だ。

「『魔法の射手 連弾・雷の17矢』」

「うおおおお！？」

僕の手から放たれる17本の雷の矢の直撃を受ける少年。彼はそ
れによってわずかに後ろに下がり、僕は更に後退を続けた。魔法の
矢の至近射撃、それも全弾命中となればかなりのダメージとなるは
ずだが、それでも彼は向ってきた。しかし、

まだだ、まだ僕の攻撃は終わってない！

「『遅延呪文 白き雷』！」

僕のとっておき、『遅延呪文』。まだ練習中で基本的なことしか
できないけど、貯めればいくつもの魔法を連続で放てる優れモノだ。
今の『白き雷』は『魔法の射手』を放つ前にストックしておいたも
のである。

「ぐがあああああー！」

再度少年に白雷が降り注ぐ。彼が持っていたらしい護符はもうな
いようので、彼は直撃を受けて倒れた。

「はあ……はあ……」

僕は息も絶え絶えになりながら、杖で倒れた少年の体を一応ついでみた。どうやら意識を失っているらしく、何の反応も返っていない。

その段になってようやく僕は力を抜いた。

お世辞にも僕の完勝とはい難かった。確かに僕はあまりダメーヂを受けていないが、それでもあちこち腫れているのがわかる。

彼にしたって、アスナさんに使った黒い犬を使ってこなかった。

アスナさんの行動を制限するために使っていたので、恐らく僕との戦いに使うことが出来なかったのだろう。

そう言った意味でもアスナさんがいなければどうなっていたかわからない戦いだっただけ。

「……でも」

勝ちも負けも。彼だっただけな蜘蛛を従えてきた訳だし、きっと文句はないはず。

「……（グッ）」

僕は、無言で握りこぶしを掲げた。

おれ備前長船兼光とか普通に装備するし（前書き）

男は刀見ると興奮するもんなんですか？刀の資料調べてたら9時だったのに11時だったという表情になった

おれ備前長船兼光とか普通に装備するし

おるは今おkのか達と今日と観光してるんだがどうやら汚い敵がこちらを狙ってるらしくとがった鉛筆投げてきた

俺とせちゆなはそれをつかんだりはいじいたりしてやってたんだが向こうはそれ見て調子に乗ったんだろうな 消しカス投げてきた

俺は謙虚なナイトだったので挑発効かなかったがえsつなは憤つたらしく苛苛してた

まあ気持ちはわからなくはいい 消しカスが髪の毛についたりするとそれに気づかなかつたりするからそのままになってて社会的に致命的な致命傷を負うことが稀によくあるからな

俺の怒りが有頂天にならないのは昔不良だったところに消しゴム丸々一個粉々にして雨のように消しカス降らしあつたことがあるからであつてストレスがたまつたのは事実

だから差乙女の提案は渡り舟だった

「太秦シネマ村行かない？」

「いいですわね。私も行ってみたいですよ」

「私は別にかまいません」

「わ。私も……」

「ウチも賛成。せっちゃんは？」

「え、わ、私ですか!？」

いきなり声かけられて焦ったんだろうな 鉛筆がヒットしそつだつたから俺がしおりで防いでやつた

するとせうtなは小さくお辞儀するながら話しかけてきた

(ブロント先生)

(何か用かな?)

(どうしますか?)

話の流れ的にIsネマ村に行くかどうかということだろうと当たりをつけたおるは

(シネマ村に行く同人混みと仮装が両方備わり一般人に見えるだろうな)

「と行ってやるとどうやら理解したようで

「私も賛成です」

と言った

「プロント先生は？」

「シネマ村なら他の班のやつもいるんじゃないかな？俺がそいつらの様子を見に行ってもどこもおかしくはないな」

どうやらぜいいん賛成らしくシネマ村に行くことになった

(露骨な場面移動 シネマ村)

シネマ村といえば仮想なのでおる達はとりあえず火葬することに
した

「せつちゃん、プロント先生、似合ってる？」

「はい、とてもよくお似合いですよ」

「流石に鼓之香は格が違ったな 着物着せたらウチのクラスで高確率で一番だろうな」

コニカが着物着てきたんだがよく似合ってる件

「パル達も着替えとるから2りも行ってきたら？」

「いえ、私はそういうのは……」

「どちらかというと大賛成だな 先に行くぞせつつな」

「え、あ、ちよつとプロント先生!？」

折角なのでここは侍にジョブチェンジしとくのが一級廃人

「おお、プロントさんも意外と似合ってるな。なあせつちゃん？」

「は、はい。そうですね……あの、プロント先生」

「何か用かな？」

「その刀……オーラが凄くて見えそうになってるんですが、一体何
なんですか？」

「備前長船兼光なんだが？」

「えっ！？それってあの……！？」

「俺は一級廃人だからな 侍ジョブも普通にこなすし備前長船兼光とか普通に装備する」

備前長船兼光分らない人はググるといいらしいぞ？

「あの、少し見せてもらっていいですか？」

えsつなが何かwkwkしてきたんだが

「おもえが仮装してきたら見せてやる」

と行ってやると

「hai！今すぐ着替えてくるます！」

と更衣所に行くことになった

「ど、どうでしょうか……？」

「似合とるで」

「ほう新撰組の扮装か 俺が思うにせうtなには似合ってるな」

「あ、ありがとうございます。それですね、その刀を……」

「いいぞ」

「やっと許しが出たか！」

えsつなが早速刀抜き出したんだが

「…… 凄い綺麗」

「…… おいイ；魅入られるなよ？」

ちよつとわずかばかりせつあんが危ない不具合・光彩亡くした目でうふふふとあk言ってるんだが；；

「ブロント先生、私達も着替え終わりましたわ」

そんなことをしているとユイク広達も着替え終わったらしく戻ってきた

「ほむ ぜいいん似合ってるんじゃないかな？まあ一般論でね？特にうyき広は西洋系美人なので和服は地獄の宴かと思っただがそんなことはなかった感 流石美人は服装を選ばないな」

「あらブロント先生つたら、美人だなんてそんな……」

何急に頬染めてきたく雪風呂 俺は感想述べただけなんです

ねえ……

「プロント先生？」

「何急に話しかけてうおわー！」

えsつながら急に話しかけてきたので振り向いてやると目の前に刀が付きつけられてた件；

「あ、すいません。これ、お返しします」

「お おう……」

平坦な調子で言われるとちょっとわずかばかりビビるんだが！？
俺がほんの少し恐怖していると向こうから馬車が走ってきた件

「お、お前は！」

（おいイ あれ誰なんですかねえ？）

（アレは一昨日にお嬢様を誘拐しようとしてきた連中の一味で、神鳴流剣士の月詠です。道中鉛筆などを投げてきたのも恐らくは奴でしょう。気をつけて下さい）

「どうも〜神鳴流です〜……じゃなかったです。その洋館の貴婦人です。そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお嬢様もらいっけに来ましたえ〜」

「な、お前一体何を「せつちゃんせつちゃん、これお芝居や」「」

「なるほど、そういうことか……」

おっととシネマ村のイベントを逆手に取られるとは一杯喰わされた感

「そうはさせんぞ！お嬢様は私が守る！！」

「……」

「きゃ〜せつちゃんかっこえ〜！」

「お、お嬢様」

「ん〜なら仕方ないな〜えいつ」

せちゆなに手袋投げてきたんだが俺はそれを掴んで言っつてやることになった

「おいイ？お前にはこの一流のナイトが見えないのか？見えてないならその目は意味ないな後ろから破壊してやるつか？」

「…ウチ、センパイと戦いたんやけど」

なんか不穏な空気出してきたが俺にテラー効かない！

「お前頭悪いな」「確かに刹那は木之香を守る侍だが俺はこの2りを守るナイトなんですわ？お？刹那と闘いたいならまず俺から倒すべきだな」

俺が手袋を投げ返してやると後ろのギャラリーが拍手し出した

俺は「うるさい気が散る一瞬の油断が命取り」というとギャラリーは黙った

「……分かりました。あなたも十分楽しめそうですし……けど、そこまで言つて逃げたらあきまへんえ？（ニコオ）」

そう言つと馬車に乗つてどっか行くことになった

アイツ目が笑つてなかつたんだが；絶対異常だろ……

俺に勝てると思ってる浅はかさは愚かしいな(前書き)

更新遅れてすいませんでした……

俺に勝てると思ってる浅はかさは愚かしいな

「いいんですか？」

「普通なら無視する奴がぜいいんだろがこの状況で無視するとかあもりにもKYすぎるでしょう？」

「しかし……」

「それにここで闘う 加勢ができない！ できにくい！ ケツチャコをつけられる 敵の戦力を削れる 守りやすくなるのは確定的に明らか ちよつとわずかばかり危険な賭けだが後々のことを考えれば最良なんですか？」

「……」 「確かにそうですね。ではブロント先生は奴を頼みます。

奴は月詠、私と同じ神鳴流剣士です。ですが私と違って小太刀を二刀扱い、小回りのきいた対人戦を得意とするタイプです。神鳴流の技についてはあまり口外する訳にはいかないのですが、緊急事態です。後で道すがら大まかに教えます。

これくらいの情報しか渡せませんが、ブロント先生ならきつと勝てるでしょう。私はお嬢様を見ておきますので加勢はできませんがご了承を」

「うむ」

大仰に頷いてやると何急に話しかけてきたくく幸弘

「ブロント先生、格好よかったですわ！」

「俺はかなり高確率でもてるからな これくらい当然のこと」

「でも刹那さんの見せ場取っちゃったんじゃない？」

あs乙女が何か言ってくるが言い訳は既に用意してあった時点で俺の無実は確定していた

「えsつなはアドリブに弱い系の話があるので危険が危ないからな さつきは急に劇が始まってもなんとかなつてたが次は大勢の人が集まってくるのは確定的に明らか そこでミスれば恥をかくことになるのであえて俺が前面に出ることでこの危険を回避」

「へ〜そうなんや。」「確かにせつちゃんはそのうところあるもん
な〜?」

「あ、はい、そうなんです!ですので先程のブロント先生のフォロ
ーは助かりました!」

いきなり話振られたせちゆなは慌てることになった

「あの、ブロント先生、頑張ってください」

「俺はジヨブを選ばないから吟遊詩人や踊り子もこなすので人前に
出るのは慣れてる感 だからこの程度のお芝居はゆゆうなんだが?
まあ見てなw」

「……何故この騎士先生は失敗フラグを立ててるですか……」

失敗フラグを立てて回収するんじゃない破壊してしまうのが一級
廃人

〜カカツつと場面移動 シネマ村「日本橋」〜

「お待ちしておりましたえ〜」

「何いきなり話しかけてる訳?」

おる達がそこに就くと既に月読がいた件

「ウチが勝つたらお嬢様も、先輩も頂きますえ〜」

「おいイ?何勝手に決めてる訳?こつちだけ賭けるとかあもりにも
不公平すぎるでしょう?そちらも何か賭けるべき賭けてほしいなら
そうすべき」

「そちらが勝つたら借金はチャラにして上げます〜」

芝居の設定利用してくるとか……だあgしかしここでそれを否定
すれば周りからのブーイングが避けられない件 汚いなさすが誘拐
犯きたない!

「それは木之香と釣り合う条件であつてせうとなを賭ける条件には
ならないんですわ?お?」

すかし俺も黙ってそれを受け入れるほどバカではないですわ?

「ん〜そうですね〜……ならウチ自身を賭けますわ」

「おいイ……」

どちらにしても俺が勝つからいいんだがそんなにせつつなが欲しいのかというか鬼なる

まあおるとしては流石の騎士も公衆の面前で女子を気絶させるのは拙い系の話があったので同意の上で連行できるのは好都合なんだが……

「お前それでいいのか？」

「構いませんえ〜」

……あっちも負けること考えてなさそうなので別にいいのかもしれにい

ただ月詠むの誤算はおるが一級廃人だということだけだろうな聞いた話ではせつにやと同レベルらしいからな それでは俺に勝てないのは確定的に明らか

「ならこちらもそれでいいぞ」

「ちよつ、ブロント先生！」

せつあんがなんか言ってるが無視してやった

「じゃあ決まりです〜では早速」

うつく詠が二刀を構えだしたので俺も備前長船兼光を構えることになった

「いきますえ〜」

「お前ヒツテンミツルギスタイルでぼこるは……」

侍は弱足してもらった方が世界がよく見えると思った(前書き)

戦闘シーンとかウチのシマあじノーカンだから……

侍は弱足してもらった方が世界がよく見えると思った

先手を打ったのは、月詠であった。

音もたてず接近した彼女は右手の刀を右上段から振り下ろす。ジヨブを侍にチェンジしたブロントさんはそれを見切り、左に身をかがめて避けた。

月詠はその勢いそのまま体を回し、左の刀をバックハンドで叩きつけた。

ブロントさんはそれを衝撃を殺しながら受け止め、さらに上にはじく。そして、体勢を崩した月詠に、

「刀キツク！」

鋭い蹴りを入れた。

「ゴフツ！」

月詠の口から空気が漏れる。彼女は蹴られた勢いそのまま後方に飛ばされ、しかしくるくると回転して橋の欄干に立った。

「吉之太刀・燕飛！」

だが、ブロントさんはもう間合いを詰めていた。右から水平に切りつける刀を月詠は左の刀でパライする。対するブロントさんは弾かれた流れのままに構えを整え、鋭い突きを放った。

月詠はそれを右の刀ではじこうとしたが、逆に弾かれてしまった。「くうっ！」

しかし彼女とてさる者。弾く力に身を任せブロントさんの左手に身を転がした。

「ほうお前はなかなかやる様だな 後でジューズを奢ってやろう」

「おおきに」

表面上にこやかに返す月詠だが、内心ではひややせをかいていた。

(……強すぎる)

たった数合の攻防。それだけで、月詠は相手との差を理解してしまった。

こちらから攻撃を加えられたのは先手を打った初撃だけで、後は全て防戦一方だった。敵の攻撃に対処するのが精いっぱい、反撃を許されなかった。

相手の強さがわかるのもまた強さの内だという。ブロントさんの強さを理解できるのは、月詠も実力者だからに他ならない。力ないものであれば、理解する間もなく打ち倒されてしまっただろうから。

だから自分は、それなりに強者であると自覚するがしかし。

きっと自分は、目の前の敵には勝てないだろう。

(……でも)

そういった強者と戦うのも月詠の悦びである。屈辱と悦楽が同時にせりあがってくる。

(もつと戦ってたいな)

戦闘狂。月詠は、そういう人間だった。

「おいイ！」

次に仕掛けたのはブロントさんだった。大上段からの切り下ろし。

月詠は、右に体を持っていき回避した。

「っ！」

しかし振り下ろされた切っ先は急に角度を変え、再び彼女に襲いかかる。

燕返し。

かの剣豪、佐々木小次郎が編み出した秘剣。常人の筋力では刀の重みに耐えかねて腕を壊すか、あるいは二撃目が極端に遅くなってしまうその剣技を、ブロントさんはエルヴァーンのSTR（力の強さ）で強引に行った。

月詠は自分の左下からくる斬撃を両の刀で受け止め、その勢いに乗ってブロントさんから距離を取った。

ブロントさんも月詠に向かって駆ける。が、

「にとーれんげき・ざんくうせーん！」

月詠の刀から二つの斬撃が飛んできた。ブロントさんは足を止め、

それらを左右に切り払った。

「いきますえ〜」

「【むむむ。】」

その隙に月詠は高く跳びあがっていた。その二刀にはバチバチと雷が纏わりついている。

「らいめーけーん！」

振り下ろされたそれをブロントさんは刀で受け止めた。

しかし斬撃こそ防ぎはしたが、気で作られた雷はそのままブロントさんの体に流れてゆく。

「ぐう！」

あまりの雷撃に流石のナイトも体がよろめいた。

月詠はそれを好機と見たのか、左の刀でブロントさんを押したまま右の刀を構え、

「神鳴流奥義：百花繚乱！！」

奥義を放った。

至近で放たれたそれは、よろめいたブロントさんの体を吹き飛ばすはずだった。しかしそれは彼の体をすり抜けるように後方へ流れていった。

心眼。

侍のジョブアビリティであるそれは、敵の攻撃を確実に見切る事が出来る。ブロントさんはそれによって月詠の左に回避した。

一方の月詠は大技を放ったせいで大きな隙が出来ていた。当然それをブロントさんが逃すはずもなく、

「リアルで痛い目を見せてやるから歯を食いしばるべきそつすべきすかさず八双の構えに入った。

「雪！」

そして刀を右に薙ぎ払い、

「月！」

その勢いのまま体を回し、左下からほぼ真上に切り上げ、
「花！！！」

もう一度体を回転させ、脇構から右に切り払った。

試合が終わる頃にはスタスタにされた金髪の雑魚がいた！

「お前これが峰打ちでよかったな？刃の方だったらお前はもう死んでるぞ」

やはりナイトは格が違った！ナイトはジョブを選ばないので侍も普通にこなす

おるが刀突きつけるながら言ってるやると何急に涙目になりだした
くくちゆくよみ

「勝ったと思うなよ……」

「もう勝負付いてるから」

これで敵を一人打ち取ってやったから格段に下段ガードを固めやすくなったのは確定的に明らかだな

悪者の集い(前書き)

東方陰陽鉄wikiの方で活動再開したんでよろしければ見てくだ
しア！

悪者の集い

「月詠はんはなにしてんのや！」

城を模した建物の中で、巫女服のような服を着た女性が激昂している。

「んなこと言うなら今からでも攫いにいきやいだろうが」

それに忍装束をまとった男性がうんざりした様子で返し、白い髪の少年がそれを諫める。

「無理だよ。もう騎士もお嬢様のところに戻ってる。それに僕達の強さではたとえ非日常を演出するシネマ村でも周囲の人間に魔法を隠ぺいするのは不可能だ。こつも人が多いと必ず巻き込んでしまう。それは千草さんの望むところじゃないでしょう？」

「当たり前や！魔法使いは隠匿されるべし、これは絶対の不文律や！」

女性、天ヶ崎千草は最早見聞きする何もかもが気に触るといったように喚き散らす。

「チツ、こつちは色々とめんどくせえな……まあ依頼人の意向には逆らえねエか」

深いため息をついて男性、汚い忍者がその意を汲んだ。

効率を重んじどんな卑怯な手であっても厭わず使う忍者にとつては、この枷は非常にストレスのたまるものである。

自分の依頼人は復讐のために関西呪術協会の長の娘を利用するといふ。それを否定するつもりは毛頭ない。

だがそれを為してしまえばもう彼女に未来は訪れないだろう。ならば今更不文律を破る程度気にするのではないだろうに。

その一派に属し、協力する忍者にも同じことが言えるのだが、こちらは忍ぶことに関しては一流である。そして今回の仕事でもらえる多額の報酬を思えば、その程度のリスクは覚悟しているのだ。

「しかし向こうの陣容は厚いですね……僕が助っ人を用意しましょ

う

少年は忍者と違って無表情に提案する。

それを聞いた彼女は一瞬気色を浮かべるが、次の瞬間には思い切り懐疑的なまなざしを向けた。

「……使いもんになるんか？」

「……少なくとも彼女は」

彼らの眼下では、月詠がナイトに簞巻にされて運ばれるのが見える。

事態は改善することなく、むしろ着々と悪化していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4957o/>

騎士先生プロま！

2011年12月27日23時53分発行